

○吾妻鏡研究書目

東洋二五冊——校訂増補吾妻鏡(一〇冊)高桑駒吉等校——吾妻鏡「櫻園史大系」——吾妻鏡脱瀆「史書集覽」——吾妻鏡備考三冊(高桑駒吉)——吾妻鏡集解二冊(高桑駒吉)此の集解には吾妻鏡類標と云ふ吾妻鏡の索引あり。

○考證には「吾妻鏡考附吾妻鏡脱瀆、吾妻鏡脱瀆抽纂(文學博士星野慎)」「史學會論叢第一輯」——建治三年丁丑日記「吾妻鏡を和ふべし」。類從第四二二(武家部)】

第五編 南北朝時代(西紀一三三二—一三九二)

室町時代(暗黒時代西紀一三九二—一六〇三)

第一章 總論——神皇正統記——太平記。

鎌倉の末に方つて、陪臣北條氏の失政は、天下不平の種となり、上には此の時、英斷の君御即位ましまししかば、今こそ武門が、其の權を失ふ好時期とは見えたりける。元より、朝廷には、將軍家及び將軍の名の下に天下の政權を執る倍臣を覆さんとの暗流、常に絶えざりしが、未だ最後の手段を執りたまはざりき。然るに、御醍醐帝の、近頃御位に即きたまふや、爰に初めて、此の手段を採り給ひ、必死の困難を冒し、數度の勝敗を閲して後、其の御企圖の一部分を達したまひしが、兩帝同時に立ち給ふこととなれり。一帝は、將軍の擁立にして、京都の舊都に於て即位し、一帝は大和の吉野及び其の附近各所に即位して、覺東無くも獨立し給ひき。歴史上之を南北朝と稱す。これより内亂打ち續きしが、後遂に兩統合一して後小松帝一統の世となり了んぬ。是より、新將軍家足利氏は、京都室町に幕府を開けり。因つて、歴史は南北朝の次を室町時代と稱す。斯くて、足利氏の勢、西紀一五七三年に至つて盡き、同じき一六〇三年

南北朝。

室町時代。

に至りて、政權の府は更に再び關東に轉移したり。

此の兩時代、前後合せて二百七十年間は、日本に於ける名文學不毛の時代にして、只歴史風の書物一二種・興味深き論文の書一種・戯曲ワッパツ的小品文(謠曲)數百篇有るのみ。併し是等は、熟讀すべき價值十分あり。

○此の時代の研究書目

(1) 南北朝時代の研究書目、簡短に一部に書にまとまりし歴史見え。故に少くとも、左の書物などを見ざる可からず。

梅松論——吉野拾遺——伯耆之卷——建武年間記——保歷年間記(以上群書類從)——櫻雲記(史籍集覽)
——國大曆——増鏡(因に記す。和田・佐藤兩氏の増鏡詳解の附録は、増鏡時代の諸系圖・分類年表・京都及び京都附近地圖等あり、有益なり)——太平記——讀史愚抄(權國史大系)——神皇正統記(北畠親房)
——南山史三冊、三十卷(成島綱)これは日本史に依ひたる體裁——大日本史(これは諸種の原據によりたるものなれば、精確に大體を知るには、此の書を措て外に無し)——楠氏の事には——南木崎、八冊(中山利實)——三浦實錄(島山泰山)あり。

(2) 室町時代のものには、後醍醐五冊、三六五卷(成島綱)これは元弘以來天正年間に至る二四〇年餘間室町十三代の歴史。體裁東鑑に倣ふ。徳川幕府の命によりて編す。權國史大系にもある。

徳見記二三卷(遠山信春)これは、織田信長一代史。——太閤記二卷(小瀬清齋著、此の人は豊臣秀次に仕へし人)これは豊臣秀吉一代史(史籍集覽、帝國文庫)——川角太閤記(史籍集覽、我自刊我書)——野史、二九一卷(飯田忠房)「吉川弘文館出版の活字本の首巻には、本條索引あり。又、明細より文政に至

る四百二十餘年間に於ける分類年表あり、是れ有益なり)——安土桃山時代史一冊(渡邊世祐)これは、近頃の著書にして戦國時代史のまとまりしもの。

(3) 宗教・文學・政治等の事實を簡明に見るには、

訂大日本教育史(佐藤誠實)——京都將軍時代における消息文(芸窓雜載)

社會の有様は——日本文明史略(物集高見)

文學・時勢等の表退を見るには——老人雜誌——塵塚物語(此の二書史籍集覽)——白石神書——段長平

記抄——徳政考(芸窓雜載)等あり

風俗を見るには——日本風俗史(藤岡、平出)——東山時代に於ける室内裝飾の一斑(芸窓雜載)

(4) 應仁亂後豊臣氏一統までの京都の地圖は、——中昔京都地圖(故實叢書第二輯)あり。

「神皇正統記」

神皇正統記。

「神皇正統記」の著者は、北畠親房と云うて、政事家にして武人なり。親房は、かの十四世紀の初期(後醍醐天皇朝)に於て日本を騒がせたる内亂の際に、南朝の爲めに盡力せし人なり。

さて、親房は村上天皇の皇子具平親王の後胤にして、西紀二三九三年に産る。後醍醐天皇の御世の初、歴進して、世良親王の傳となりしが、親王の薨後は、落飾して致

北畠親房の略傳。

仕したり。然るに、一三三三年、後醍醐天皇、隱岐より還御の後、再び仕官し、其の後數度の合戦には、衆に擡てたる武功ありき。斯くの如く、劍を揮ひ、筆を握り、或時は出て戦ひ、或時は帷幕に參し、一意専心、南朝の爲に盡したる親房が大功は西紀一三五二年に授けられたる位階に由つて察せらるべし。此の年、親房従一位に叙せられ、正平六年〔西紀一三五二〕三宮に准ぜられ、輦車にて、宮中に入るを聽さる。親房、此の後幾程も無くて薨じたり。(伏見^{一九五三}元^{一〇}後村上^{二〇}正平^九)
夫れ「神皇正統記」は、親房が畢生の大著にして、編纂の主旨は、題號の示すが如く、神皇の正統を記せる歴史にして、我が仕へ奉る南朝の天子の正統なることを知らしめん爲なり。此の故に、此の書、帝權の沿革・天子の系統・帝位の繼承に關して議論し、之を證明するに、古來の事實を以てし、南朝の帝位に昇るの至當にして動かすべからざるを明白に論じたり。

本書は、後村上天皇の御世に成り、「後村上帝興國元年(北朝の光明天皇曆應三年)」卷數六卷あるが中にも、第一の卷は、専ら神話にして、「夫れ、天地未だ分れざるし時渾沌として圓れること、雞子の如く、くじもりて牙を含めりき」より始めて、諸冊男女の二神が、日本を創造したまひし事を記したる處は、主として日本紀より拔萃し、之に雜ふるに、支那哲學及び印度神話なる世界開闢論を以てし、人皇第一代の神武天皇は、かの二神の姫君天照大神の正統なる由來をば、巧に叙したり。

次の四卷は、神武天皇以後の歴史にして、西紀一千二百八十八年、伏見天皇の御即位までの史實を記したる乾燥無味のもの。

第六卷は、即ち親房が當代の歴史なり。然るに惜しきことは、此の卷の大部分は、政事の主義を論じて、當時の歴史を詳説せざりし事なり。蓋し、親房之を詳説せざりしは、之を詳説する時は、即ち、たゞ己れ親子の功勞を吹聴する事となりて、不都合なりと思惟したるが爲めなるべし。故に、此の卷は、當時日本の政事家が懐ける政治上の意見を察する爲には、必要なるべきも、是等は、西洋人には左程興味有るものに有らず。然るに、古來日本人は、親房を稱して支那風の政治哲學者なりとし、今に至るまで、過當の讚辭を與へて止まず。げに、其の書は、政治家らしき才幹を示したる例少からず、例へば、神宮・僧侶に無用の閑職を附與したるを非難し、寺領地の不可を論じたる點の如し。

尙、此の書の平凡なる點に向つて批難すべき所多かれど、我等が當然記憶すべきことは、親房は、活政治學に哲學的原素を附加せんと試みし日本に於ける第一人なる事

神皇正統記の價値。

と、此の書の議論、現今にてこそ陳腐なれども、其の當時の讀者には斬新にして興味ありしものなることなり。

「神皇正統記」の文は、質朴にして着實。文學としての價値よりは、此の書が鼓吹せし政治的感慨の價値の大なることを知る。著者の熱心に翊賛したる政治運動が、爲に大に利する所ありしのみならず、此の書は後世にも亦大に此の種の感化を與へたり。思ふに、今や帝權復古して、明治の昭代を形成せし事も、正統の天子に對する親房が愛國勤王の精神の與つて、大に力有りしなり。

日本の文學者は、古來和歌を挿入せざるは稀なるが、親房は之を濫用せざる一人なり。

左の抜萃にて、親房が政治的觀念の一斑は窺はるべし。

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日の神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ、此の事あり、異朝には其の類なし。此の故に神國とす也。

Great Yamato is a divine country. It is only our land whose foundations were first laid by the divine ancestor. It alone has been transmitted by the Sun Goddess to a long line of her descendants. There is nothing of this

kind in foreign countries. Therefore it is called the divine land.

只我國のみ、天地開けし始めより、今の世の今日に至るまで、日嗣を受けたまふこと邪ならず、一種姓の中にあつても、自ら傍より傳へ給ひしらず、猶正に歸る道ありてを保ちましめしける。これ、しかし乍ら、神明の御誓あらたにして、餘國に異なるべからはれなり。抑「神道の事はたやすく顯はらず」と云ふ事あれど、根元を知らざれば、みだりがはしき端とも成ぬべし。その弊を救はん爲めに、聊か勤し侍り。神代より正理にて受け傳へる訓を宣へん事を志して、常にまごめる事は載せず。然れば「神皇正統記」とや名づけ侍るべし。

It is only our country which, from the time that heaven and earth were first unfolded until this very day, has preserved the succession to the throne intact in one single family. Even when, as sometimes naturally happened, it descended to a lateral branch, it was held in accordance with just principles. This shows that the august oath of the gods [to preserve the succession] is ever renewed in a way which distinguishes Japan from all other countries.

There are matters in the way of the gods [the Shinto religion] which it is difficult to expound. Nevertheless, if we do not know the origin of things, the result is necessarily confusion. To remedy this evil I have jotted down a few observations showing how the succession from the age of the gods has been governed by reason, and have taken no pains to produce an ordinary history. This work may therefore be entitled 'History of the True Succession of Divine Monarchs.'

凡そ、男夫は稼穡を勤めて、己も食し、人に與へても飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として、自も衣、人をも暖かならしむ。賤しきに似たれども、人倫の大本なり。天の時に隨ひ、地の利によれり。

この外、商沽の利を通ずるもあり、工巧の態を好むもあり、仕官に志すもあり、之を四民と云ふ。

仕官するにとりて、文武の二道あり。座して以て道を論ずるは、文士の道なり。この道に明かならば、相とすに堪へたり。さては、文武の二は、暫くも捨てた

まふ可からず。「世亂れたる時は、武を右にし、文を左にす。國治まれる時は、文を右にし、武を左にす」との事なり。

The man devotes himself to husbandry, providing food for himself and thus warding off hunger; the woman attends to spinning, thereby clothing herself and also making others warm. These may seem mean offices, but it is on them that the structure of human society rests. They are in accordance with the seasons of heaven, and depend on the benefits drawn from earth.

Others are skilled in deriving gain from commerce; while others, again, prefer the practice of the mechanic arts, or have the ambition to become officials. These are what are called the 'four classes of the people.'

Of officials there are two classes—the civil and the military. The method of the civil official is to remain at home and reason upon the right way, wherein, if he attains to Incidity, he may rise to be a Minister of State. It is the business of the soldier, on the other hand, to render service in warlike expeditions, wherein, if he gains fame, he may become a general. Therefore

these two professions ought not to be neglected for a moment. It has been said, 'In times of civil disorder, arms are placed to the right and letters to the left.'

凡そ、王土に孕まれて、忠をいたし、命をすつるは、人臣の道なり。必ず、之を身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その跡を察みて、賞せらるるは、君の御政なり。下として、競ひ争ひ申すべしにはあらねばや。まして、おせる功無くして過分の盛をいたす事自ら危むる端なれど、前車の轍を見る事は、賊に有りがたきならひなりけんかし。(アヌマン氏は、此の有りがたきの意を誤解せるが如し。)中古までも、人のちのみ豪強なるをば戒められり。豪強になりぬれば、必ずおごる心あり、果して身を口ほし、家を失ふためし有れば、戒めらるるも理なり。

It is the duty of every man born on the Imperial soil to yield devoted loyalty to his sovereign, even to the sacrifice of his own life. Let no one suppose for a moment that there is any credit due to him for so doing.

Nevertheless, in order to stimulate the zeal of those who come after, and in loving memory of the dead; it is the business of the ruler to grant rewards in such cases [to the children]. Those who are in an inferior position should not enter into rivalry with them. Still more should those who have done no specially meritorious service abstain from inordinate ambitions. It is a truly blessed principle to observe the rut of the chariot which has preceded, at whatever risk to our own safety [that is, a conservative policy should be maintained at all hazards].

凡そ、政道と云ふ事は、所々に記し侍れど、正直慈悲を基として、決斷の力有るべきなり。これ、天照大神の明かなる御教なり。決斷といふにとりて、あまたの道あり、一には其の人を選びて、官に任ず。官に其の人ある時は、君は垂拱してまします。されば、本朝にも異朝にも之を治世の本とす。二には、國郡を私にせず、分つ所、必ず、その理のまゝにす。三には、功あるをば必ず賞し、罪あるをば必ず罰す。これ、善を勧め、惡を懲らす道なり。之に一つもたがふを亂世とは

1360

I have already touched in several places on the principles of statesmanship. They are based on justice and mercy, in the dispensing of which firm action is requisite. Such is the clear instruction vouchsafed to us by Tenshōdajin [the Sun Goddess]. Firm action is displayed in various ways. Firstly, in the choice of men for official positions. Japan and China both agree that the basis of good government consists in the sovereign finding the right man and bestowing his favour on him. Secondly, in excluding private motives from the distribution of appointments to provinces and districts. This should be done on grounds of reason only. Thirdly, firm action is shown in the reward of merit and the punishment of crime. By this means encouragement is given to virtue, and wickedness is repressed. If any of these three things is neglected, we have what is called bad government.

課辱と尸祿とは、國家の破るゝ階、王業の久しからざる甚なりと云。

Sinecures and jobbery in the matter of promotions are steps towards the downfall of the State, and fatal to the permanence of the royal office.

「元元集」
「東家秘傳」
「二十一社記」
「職原鈔」
「古今集註」
「造殿儀式」

此外、親房の著書に、元元集(八卷)東家秘傳(一卷)(二十一社記)(一卷)あり。皆、神道に關する書なり。職原鈔(二卷)は、親房が吉野に於て編みたるものなりと云ふ。歴代官職の沿革・及び補任の次第を述べたるもの。蓋し、日本法制史の嚆矢と稱すべし。而して、此の書を著はす時、一卷の参考文書も手にせざりしなり。親房も亦博覽強記の人なりしを察するに足る。又、古今集を註せる「古今集註」もあり。又大中小社の差別・造宮の制度を陳へたる「造殿儀式」も此の人のなりと傳はる。

○神皇正統記研究書目

- (1) 木版の單行本及び活版本も少からず。又群書類從第二九卷帝王部、國文大觀第九編史籍集覽等にもある。又、明治書院に、神皇正統記讀本(金子元臣編)を出す。又校訂本には、校訂神皇正統記(飯田武郷校)あり。
 - (2) 註釋書には、校註神皇正統記一冊(大宮宗司) 校正標註神皇正統記一(三木五百枝、佐伯有藏) 神皇正統記講義二(今泉定介) 神皇正統記補註一(大久保初雄)
- 職原鈔二冊、單行本あり。又群書類從第七一卷官職部に出づ。
- 此の註釋書には、

増註職原鈔參考(於雲子)——撰註職原鈔本(近藤秀樹)——又藤井貞幹の好古日録、菟井義則の官職淨説或問を見よ。職原鈔の各目に関する説あり。

○親房傳は、

大日本史——家庭教育歴史本枯野の櫻(落合直文、池邊義象)

「太平記」(四十一卷)——爰に、神皇正統記の如く賞賛せらるる書と「太平記」とす。此の書は、後醍醐天皇が東夷(鎌倉將軍及び其の黨與を指す)を征伐せんと密かに謀りたまひしより事起りて、四十餘年間日本を騒がせたる内亂の歴史なり。

「太平記理盡抄」の説によれば、叡山の玄慧法師、後醍醐天皇の勅を受けて起稿し、後に來賢・智教・教圓・義清・壽榮等之を増補し、横川の能隣之を大成す。而して、此の作者は其の事實を、當時の事件に關係したる尊氏將軍・新田義貞・足利直義等より直接聞取つて筆記したるものなりと云へど、此の説、何の典據より出づるかは知らず。然るに、近頃の研究の結果に據れば、此の作者は叡山の僧小島法師(——西紀一三七四)なりと云ふ。而して、小島法師の傳は傳はらず。此の新説、果して眞ならば、かの前説は偽なるか(日本の文學史にはかゝる類少からず)。但しは、小島法師は前陳の如くして集めたる事實を利用したるか、二者其の一に在るべし。之を本書の内容に就いて觀察するに、かの内亂後、暫時にして出てたる或人の著作にして、史上の人物の直話を筆記したるより

太平記の解題。

も作者自身の想像譚多し。

本書の記す處は、西紀一一八一年源頼朝以來の幕府の沿革を略記し、次いで一三一九年、後醍醐帝即位(花園天皇文保二年)當時の政態に説き到り、尋て一三三八年、後醍醐天皇崩御までの事件を詳説し、後村上天皇正平二十二年まで(一三六七)凡そ五十年間の事蹟なり。

而して、今の「太平記」には、本書普通の趣意と關係無き謀叛談・神武の東征・神功の征韓・元寇の亂の如き數章加はれり。是れ恐らくは、後人の挿入せるなるべく、又「太平記綱目」の附録は、勿論本書の部分にあらず。

◎太平記の歴史的價値について諸學者の説の主なるものは、

太平記の隱安遺瀾多きことと辨す(管政友)〔史學雜誌第三第四〕——太平記は史學に益無し(久米邦武)〔同上〕一七、一八、二〇、二二、二三號——太平記は勅撰の書なりとするも不可無きもの如し(宮地殿夫)〔明治會叢誌第三七號〕——太平記は小説家の作にあらざるの説(内藤操聚)〔文第一卷二二號〕——内藤操聚君の太平記云々の説を辨す(星野恒)〔文第一卷第二四號〕——讀「太平記非」小説二説と(學山外史)〔文第一卷第二五號、第二卷第四號〕

太平記の性質。

此の書、名けて「太平記」と稱す。前古稀有の一内亂を記したる書名としては、一奇なり。況んや書中、權謀・術數・開戦・死亡・放逐等の記事多くして應接に遑あらざるをや。

併し、「太平記」とは、初よりの名にはあらず。最初は「安危由來記」「國家治亂記」「國家太平記」「天下太平記」と順次、其の題號を改めしが、最後に只「太平記」と稱するに至りしなり。(理盡鈔の説)而して、斯の如き題號を見ん人は、蓋し想像せん、此の書、寧ろ一個の哲學的歴史なるべしと。併し、此の書は、政治家・哲學者の筆にあらざして、興味深き物語を企てたりし一文學者の手に成れるなり。此の故に、本書は、數量に關する事項・月日・系圖等は不精密なり。而して、此處の城攻・彼處の籠城・或は一騎打の事柄に關しては、身之を實見するも、到底斯の如く傳ふること能はざる程詳細の筆を以て粉飾し、或は夢の告・前兆など、奇怪の譚を雜へて、其の物語を豊富ならしめたり。即ち、斯の如き文學者に於ては、かの數量等に關して不精密なるは元より怪しむに足らず。此の外、書中の人物が爲したる種々の談話は、實に是れ、作者が臨機に適當なる談話を人物に爲さしめたるものにて、*Thucydides* 作中の人物の談話の如く、幾分か歴史的價值を有する者とす。

○ツキヤマス(四紀前四七一—四〇〇頃)雅興の雄辯家、歴史家。四紀前四二四年ヘロドタス戦争の時、海軍司令官なりしが、覆轍の罪により免職となりて、二十年間國外に追放せらる。シシリーなどに流寓し、紀元前四〇四年頃免されて雅興に歸るや「ヘロドタス戦争史」を著す。批評的歴史家の第一人と稱せらる。

然るに「太平記」の註釋者は、此の書が、往々傳奇的領内に侵入すると、嚴密に區別せんとするは面白からず。

小島法師——若し此の書の著者ならば、——の文章は、誇張にして、學問を衒ふとは、日本の批評家が非難する所にして、每章抄からず此の事實有るをば、余も首肯する所なり。此の作者は、和漢一切の修辭學に通じ、盛に漢語漢文を使用し、支那の歴史的古事を引いて、例話とす。即ち、親王をば「竹園」と稱し、皇后を「椒房」といひ、殿上人を「月卿雲客」と呼び、天子の車駕を「風輦」と書き、天子の顔面を「龍顏」と記し、美姬を賞するに、「毛嬙・西施も面を耻ず」といひ、國亂の起るを、「*カスサ* 天、*カスサ* 靦波動地」と云ふのみならず、類似せる支那・印度の歴史を長々しく挿入することすら躊躇せず、殊に、これらの事件が傳奇的性質のものならば尙更の事なり。

「太平記」が、西洋普通の讀者を苦しむる點は、小島法師が漢學の智識を誇示せし點にあらずして、彼が熟達せる佛學に在りとす、此の書、佛教を説きたる所最も多し。此の故に、宗教史を研究する人には、此の書は殊に興味あるべし。元來、日本人は、異種の宗教を相融和し整頓する性質を有するが、小島は偶々其の模範的人物となりたり。抑も神、儒、佛の三法は、其の主旨、元來は相衝突するものなるを、小島は「太平記」にて、之を

太平記の文體。

漢文、漢語を使用す。

太平記中に見えたる佛教。

太平記は日本宗教史の研究に資す。

調和せしめんと欲し、第十六卷の末に於て、陰陽の二儀を論じて萬物の根源なりとし、此の二氣の作用によりて、伊弉諾・伊弉冊の二神生れまし、其の御子天照大神は、佛菩薩の権現にましまして、第六天の魔王(印度の神話)

○神話を研究するには——比較神話學(高木敏雄)

を盡未來際に降伏し、以て日本に於て、正法(佛法)の弘布するを防碍すること無からしむるを以て、人界に於ける事業となし給ふと説きたること左の如し。

夫、日本開闢ノ始メヲ尋レバ、二儀己ニ分レ、三才漸顯レテ、人壽ニ萬歳ノ時、伊弉諾、伊弉冊ノ二ノ尊遂ニ妻神夫婦ト成テ、天ノ下ニアマクダリ、一女三男ヲ生給フ。一女ト申ハ、天照太神。三男ト申ハ、月神・蛭子・素戔嗚ノ尊ナリ。第一ノ御子天照太神、此ノ國ノ主ト成テ、伊勢國御裳瀧川ノ邊神湘下津岩根ニ跡ヲ垂レ給フ。或時ハ垂跡ノ佛ト成テ、番々出世ノ化儀ヲ調へ、或時ハ本地ノ神ニ歸テ、塵々刹土ノ利生ヲナシ給フ。是則チ跡高本下ノ成道也。爰ニ第六天ノ魔王集テ、此國ノ佛法弘ラバ、魔障顯クノ其力ヲ失ベシトテ、彼應化利生ヲ妨ントス。時ニ天照太神彼ガ魔障ヲ休メン爲ニ、我レ三寶ニ近付ジト云誓ヲゾナシ給ヒケル。依レ之第六天ノ魔法悉リヲ休メテ、五體ヨリ血ヲ出シ盡未來際ニ至ル迄、天照太神ノ苗裔

タラン人ヲ以テ、此ノ國ノ主トスベシ、若王命ニ違フ者有テ國ヲ亂リ民ヲ苦メバ、十萬八千ノ眷屬朝ニカケリ、夕ベニ來テ、其罰ヲ行ヒ、其命ヲ奪フベシト、堅誓約ヲ誓テ、天照太神ニ奉ル。今ノ神靈ノ異説是也。誠ニ内外宮ノ在様、自餘ノ社壇ニハ事替テ、錦帳ニ本地ヲ顯ハセル鏡ヲモ不懸、念佛讀經ノ聲ヲ留テ、僧尼ノ參詣ヲ許サレズ。是伊當社ノ神約ヲ不違シテ化屬結縁ノ方便ヲ下ニ秘セル者ナルベシ。云々

日本圖書の書籍を使用す。

併し、小島法師は、始終漢語と神學とのみに據つて、其の感慨を洩すものにあらず、亦、平家物語の如くに、其の國固有の思想と形式とを以て大いに、詩的文句を使用せり。而して、其の調子は、長歌のそれに似て、彼に異なる點は、五七の句の順序を顛倒して七五調としたることと、漢語をも拒否せざることとにあり。かの「俊基朝臣の東下」の文句は、即ち此の詩的文句の一つなりとす。俊基朝臣は、後醍醐天皇の御企に參與して、竊に關東を謀りし故、幕府の手に捕へられて、鎌倉に護送せられて斬られたるが、其の東下の道中を記すに、當つて、沿道の地名をば、巧に文中に織り込み、讀者をして、其の狀景を想見せしめんとしたり。而して、此の文句は、大いに、江戸時代に於ける。淨瑠璃及び、小説に影響し、斯種の文句は、後世の平民文學を風靡したり。かの「道行」と稱

する文句は、全く「太平記」の此處の文句の模倣にして、其の調子も同じく七五調なるにも、如何に「太平記」の影響の大なるかを知るべし。

併し、歐人、若し「太平記」を見るも、其の物語の大部分は率直にして、秩序あるを悦ぶべし。勿論、時に應じて美句麗文無きにはあらねど、かの淺學の人を驚倒せしめ、博識の人よりは、誇學の譏を蒙る可き比喩謎語は弄せざりき。

太平記に用ひられたる日本語の性質。

「太平記」の中なる日本語は、平安時代のものよりも甚だ異なり。甚だ精巧なりし古文法に代ふるに、簡易なるものを以てし、單語を増加ならしめん爲には、夥多の漢語を採用したり。而して、其の漢語は、従前の如く、一度俗語に採用せられて日本語に熟和せるものを採用したるのみならず、漢籍より直に採用したるものもあり。

太平記の文體は、近世文學に影響したり。

「太平記」が、日本文學史上に有する重要な地位は、歴史として本書が有する實際の價值以上に在りすとす。本書は、最も多く近世の文體の基礎となり、其の文章の良否兩つながら、直接間接に、後世の文學に影響せしもの甚だ多かりしを知る。

太平記は、又後世の文學に多大の材料を寄與したり。

獨り、文體のみならず、近世の文學は、其の事件も、人物も、多くは、之を太平記より得、其の故事も廣く「太平記」より採りたり。而して、かの、後世徳川時代に、江戸及び京都に於て、太平記を讀んで、生活したる一派の學者（講釋師）ありしを見て、此の書

太平記讀。

が、如何に世間の好評を得たりしかを察すべし。思ふに、此の太平記讀は、「平家物語」を彈ずる琵琶法師に似たるものなり。

次に掲ぐるは、六波羅と、朝廷方なる叡山の大衆とが、琵琶湖の畔、唐崎の近所に會戦したる記事なり。蓋し、此の文は、元より本書の文體を代表すると同時に、日本文學に、數多き軍談の雛形ともなるべし。

（前略）海東（これは、海東左近將監とて、七千餘騎にて、搦手へ向ひし六波羅方指揮官の一人なるが、僧兵三百人に過ぎざるを見て）是ヲ見テ「敵ハ小勢也ケルソ、後陣ノ勢ノ重ナラヌ前ニ懸散サテハ叶マジ。ツツケヤ者共」ト云儘ニ、三尺四寸ノ太刀ヲ拔テ、鎧ノ射向ノ袖ヲサシカサシ、敵ノウズ巻テ扣ヘタル、真中へ懸入、敵三人切フセ、波打際ニ扣ヘテ、續ク御方ヲソ待タリケル。岡本房ノ播磨堅者快實遙ニ是ヲ見テ、前ニツキ隻タル持楯ニ帖岸破ト踏倒シ二尺八寸ノ小長刀、水車ニ回ノ躍リ懸ル。海東是ヲ弓手ニウケ、冑ノ鉢ヲ眞ニニ打破ント、隻手打ニ打ケルカ、打外シテ袖ノ冠板ヨリ菱縫ノ板マデ、片筋カイニ懸ズ切テ落ス。二ノ太刀ヲ餘リニ、強ク切ントテ、弓手ノ鎧ヲ踏ヲリ、己ニ馬ヨリ落ントシケルカ、乘直リケル處ヲ、快實刀長ノ柄ヲ取延、内甲へ鋒キ上ニ、二ツ二ツ、スキ間モナ

ク、入タリケルニ、海東アヤマタス、喉フエヲ突レテ、馬ヨリ眞倒ニ落ニケリ。快實懸テ海東カ上卷ニ乗懸リ鬚ノ髪ヲ鬨テ、引懸テ首カキ切テ、長刀ニ貫キ「武家ノ大將一人討取タリ。物ノ始ヨシ」ト悦テ、アザ咲テゾ立タリケル。爰ニ何者トハ知ス、見物衆ノ中ヨリ、年十五六計ナル小兒ノ、髮唐輪ニ上タルカ、趨塵ノ筒丸ニ、大口ノソハ高ク取リ、命作ノ小太刀ヲ拔テ、快實ニ走懸リ甲ノ鉢ヲシタ、カニ、三打四打ソ打タリケル。快實屹ト振蹄テ是ヲ見ルニ、齡二八計ナル小兒ノ、大眉ニ鐵漿黒也。「是レ程ノ小兒ヲ討留タランハ、法師ノ身ニ取テハ情無し。打タジ」トスレハ走懸走懸、手繁ク切回リケル間「ヨシ」サラハ長刀ノ柄ニテ、太刀ヲ打落テ、組止メン」トシケル處ヲ、比叡辻ノ者共カ、田ノ畔ニ立渡テ、射ケル横矢ニ、此ノ兒胸板ヲ、ソト被ニ射抜テ、矢場ニ伏テ死ニケリ。後ニ「誰ソ」ト尋レハ、海東ガ嫡子幸若丸ト云ケル小兒父カ留置ケルニ依テ、軍ノ伴ヲハ、セサリケルカ、猶モ覺束ナクヤ思ケン。見物衆ニ紛テ、跡ニ付テ來ケル也。幸若稚シト云ヘ共、武士ノ家ニ生タル故ニヤ、父カ討レケルヲ見テ、同ク戰場ニ打死シテ、名ヲ殘ケルコソ哀ナレ。海東カ郎等はヲ見テ「二人ノ主ヲ目ノ前ニ討セ、剩ハ首ヲ敵ニ取セテ、生テ歸ル者ヤ可有」トテ、三十六騎ノ者共、雙ヲ雙テ

懸入。主ノ死骸ヲ杖ニメ、討死セント相争フ。快實是ヲ見テ、「カラ」ト打咲テ、「心得ヌ物哉。御邊達ハ、敵ノ首ヲコソ取ランズルニ、御方ノ首ヲホシガルハ、武家自滅ノ端相顯レタリ。ホシガラハ、スハ取ラセン」ト云儘ニ、持タル海東カ首ヲ敵ノ中ノ、カント投懸。坂本様ノ拜ミ切、八方ヲ拂テ火ヲ散ス。(下略)

When Kaitō saw this, 'The enemy are few,' he cried. 'We must disperse them before the rear comes up. Follow me, my lads.' With these words he drew his 3 feet 6 inch sword, and holding up his armed left sleeve as an arrow guard, rushed midst into the whirl of the expectant foe. Three of them he laid low. Then retiring to the beach of the lake, he rallied to him his followers. Now when Kwajisan, a monk of Okamoto, deserted him from afar, he kicked over—'Kappa!'—the shield which he had set up before him, and with his 2 feet 8 inch bill revolving like a water-wheel, sprung forward to attack him. Kaitō received the stroke with his armed left sleeve, while with his right he aimed a blow at the skull-piece of his adversary's helmet, meaning to split it fair in twain. But his sword glanced off obliquely to the shoulder-

plate, and thence downwards to the crossstitched rim of his *épaulette*, doing no harm. In endeavouring to repeat the blow he used such force that his left stirrup-leather broke, and he was on the point of falling from his horse. He recovered his seat, but as he was doing so Kawaijitsu thrust forward the shaft of his bill so that the point entered Kaitō's helmet from below two or three times in succession. Nor did he fail in his aim. Kaitō, stabbed through the windpipe, fell headlong from his horse. Kawaijitsu presently placed his foot on the depending tassel of Kaitō's armour, and seizing him by the hair, drew it towards him, while he cut off his head, which he then fixed on the end of his bill. 'A good beginning! I have slain a general of the military faction,' he exclaimed joyously, with a mocking laugh. Whilst he was standing thus, a boy of about fifteen or sixteen, with his hair still bound up in 'Chinese-ring' fashion, wearing a corselet of the colour of brewer's grains, his trowsers tucked up high at the side, came out from among the onlookers, and drawing a small gold-mounted sword, rushed at Kawaijitsu and smote him vigorously three or

four times on the skull-piece of his helmet. Kawaijitsu turned sharply, but seeing a child of twice eight years, with painted eyebrows and blackened teeth, thought that to cut down a boy of this age would be a piece of cruelty unbecoming his priestly condition. To avoid killing him he made numerous dashes, repeatedly flourishing his weapon over him. It then occurred to Kawaijitsu to knock the sword out of the boy's hands with the shaft of his bill and seize him in his arms; but while he was trying to do so, some of the party of the Hiyei cross-roads approached by a narrow path between the rice-fields, and an arrow shot by one of them transfixed the lad's heart so that he fell dead upon the spot. Upon inquiry it was found that this was Kaitō's eldest son Kōwakamaru. Forbidden by his father to take part in the fight, he was discontented, and mixing with the crowd of spectators, had followed after. Though a child, he was a born soldier, and when he was his father slain he too fell fighting on the same battlefield, leaving a name behind. Alas, the pity of it!

When Kunito's retainers saw this, they felt that after having their chieftain and his son killed before their eyes, and, what was still worse, their heads taken by the enemy, none of them ought to return home alive. Thirty-six of them, bridle to bridle, made an omush, each more eager than the other to fall fighting, and make a pillow of his lord's dead body. Kwajitsu, seeing this, laughed out, 'Ha! ha! There is no understanding you fellows,' he exclaimed. 'You ought to be thinking of taking the heads of enemies instead of guarding the heads of your own people. This is an omen of the ruin of the military power. If you want the head you can have it.' So saying, he flung the head of Kunito into the midst of the foe, and with downward-sweeping blows in the Okamoto style, cleared a space in all directions.

次の文は、後醍醐天皇の股肱の一朝臣、俊基朝臣が逮捕せられて、關東へ下向の段なり。

七月十一日ニ、又六波羅へ召捕レテ、關東へ送ラレ給フ。再犯不_レ赦法令ノ定ル

所ナレハ、何ト陳ズル共許サレシ、路次ニテ失ル、カ、鎌倉ニテ斬ル、カニノ間
ヲハ離レシト思儲テソ出ラレケル。……………

(と寫し來りて、何の標題も無く、直に、文句と云ひ、語勢と云ひ、思想と云ひ、質
質上、全くの歌を續けたり。但し、此の歌は、悉くは、小島が獨創にあらずして、彼
が記憶せる古歌を綴り合せたる處最も多し。)

落花ノ雪ニ踏迷フ、片野ノ春ノ櫻カリ、紅葉ノ錦ヲ衣テ歸嵐ノ山ノ秋ノ暮一夜ヲ
明ス程ダニモ、旅宿トナレハ懶ニ、恩愛ノ契リ淺カラヌ、我故郷ノ妻子ヲハ、行末
モ知ス思置、年久モ住馴シ九重ノ帝都ヲハ、今ヲ限ト願テ思ハヌ旅ニ出給フ、心
ノ中ソ哀ナル。

憂ヲハ留メ相坂ノ關ノ清水ニ袖滯テ、末ハ山路ヲ打出ノ濱沖ヲ遙見波セハ、鹽
ナラヌ海ニコガレ行身ヲ浮舟ノ浮沈ミ駒モ轟ト踏鳴ス、勢多ノ長橋打渡リ、行
向人ニ近江路ヤ、世ヲウネノ野ニ鳴鶴モ、子ヲ思カト哀也時雨モイタク森山ノ、
木下露ニ袖ヌレテ、風ニ露散ル篠原ヤ篠分ル道ヲ過キ行ハ、鏡ノ山ハ有トテモ、
泪ニ疊テ見ヘ分ス。物ヲ思ヘハ夜間ニモ、老蘇森ノ下草ニ駒ヲ止テ願ル、古郷ヲ

雲ヤ隔ツラン。番馬醒井柏原、不破ノ關屋ハ荒果テ猶モル物ハ秋ノ雨ノ、イツカ
 我身ノ尾張ナル、熱田ノ八劔伏拜ミ、鹽干ニ今ヤ鳴瀧。傾ク月ニ道見ヘテ、明
 暮ヌト行道ノ、未ハイツクト遠江。濱名ノ橋ノ夕鹽ニ引人モ無キ捨小船、沈ミ
 ハテヌル身ニシアレハ、誰カ哀ト夕暮ノ、晚鐘鳴ハ今ハトテ池田ノ宿ニ着給フ。
 元暦元年ノ比カトヨ、重衡ノ中將ノ東夷ノ爲ニ囚レテ、此宿ニ付給シニ、

東路ノ丹生ノ小屋ノイブセキニ

古郷イカニ戀シカルラン

ト、長者ノ女カ讀タリシ、其古ノ哀マテモ、思殘サヌ泪也。旅館ノ燈幽ニ、
 鷄鳴曉ヲ催セハ、匹馬風ニ嘶ヘテ、天龍河ヲ打渡リ、小夜ノ中山越行ハ、白雲路
 ヲ埋來テ、ソコトモ知ヌ夕暮ニ、家郷ノ天ヲ望テモ昔西行法師カ「命也ケリ」ト
 詠ツ、二度越シ跡マテモ、浦山敷ソ思ハレケル。隙行駒ノ足ハヤミ、日己ニ亭
 午ニ昇レハ、餉進ル程トテ、輿ヲ庭前ニ昇止ム。轅ヲ叩テ、警固ノ武士ヲ近付
 ケ、宿ノ名ヲ問給フニ「菊川ト申也」ト答ヘケレハ、承久ノ合戦ノ時院宣替タリ
 シ谷ニ依テ、光親ノ脚關東ヘ召下サレシカ、此ノ宿ニテ誅セラレシ時

昔南陽縣菊水 汲ニ下流ニ而延
 今東海道菊河 宿ニ西岸ニ而終命

ト書タリシ、遠キ昔ノ筆ノ跡、今ハ我身ノ上ニナリ、哀ヤイト、増リケン。一首
 ノ歌ヲ詠テ、宿ノ柱ニソ書レケル。

古モカ、ルタメシヲ菊川ノ同シ流ニ身ヲ沈メン

大井川ヲ過給ヘハ、都ニアリシ名ヲ聞テ、龜山殿ノ行幸ノ、嵐ノ山ノ花盛リ、
 龍岫鶴首ノ舟ニ乗り、詩歌管絃ノ宴ニ侍シ事モ、今ハ二度見ヌ夜ノ夢ト、成ヌト
 思ツ、ケ給フ。島田藤枝ニ懸リテ、岡邊ノ眞葛裏枯レテ、物カナシキ夕暮ニ、宇
 都ノ山邊ヲ越行ハ、萬楓イト茂リテ道モナシ。昔業平ノ中將ノ住所ヲ求トテ、
 東ノ方ニ下トテ「夢ニモ人ニ逢ヌナリケリ」ト、讀タリシモ、カクヤト思知レタ
 リ。清見瀧ヲ過給ヘハ、都ニ歸ル夢ヲサヘ、通サヌ波ノ關守ニ、イト、涙ヲ催サ
 レ向ハイツコ三穂ガ崎、奥津神原打過テ、富士ノ高峰ヲ見給ヘハ、雪ノ中ヨリ立ツ
 煙、上ナキ思ニ比ベツ、明ル霞ニ松見ヘテ、浮島カ原ヲ過行ハ、鹽干ヤ淺キ船
 浮テ、ヨリ立ツ田子ノ自モ浮世ヲ邊ル車返シ、竹ノ下道行ナヤム。足柄山ノ嶺ヨ
 リ、大磯、小磯直下テ、袖ニモ波ハコユルギノ急、トシモハナケレトモ、日數ツ

キレハ、七月二十六日ノ荏漚ニ、鎌倉ニロン着給ケレ。其日繼テ、南條左衛門高直職取奉テ、諏方左衛門ニ預ラレ。一間ナル處ニ、蜘蛛キビシク結テ、押籠奉ル有様、只地獄ノ罪人ノ、十王ノ廳ニ渡サレテ、頭械手扱ヲ入ラレ罪ノ輕重ヲ訊メラシキ、カシヤト思知レタリ。
(ハメマン氏の譯は儘か數行に誤知あり。本文は有各なれば、序に全文を掲ぐ)

On the 11th day of the seventh month he was arrested and taken to Rokuhara [the residence of the Shōgun's representative at Kyoto], and was despatched thence to the eastern provinces. He set out on his journey, well knowing that the law allowed no pardon for a second offence of this kind, and that whatever he might plead in his defence he would not be released. Either he would be done away with on the journey, or he would be executed at Kamakura. No other end was possible.

*But one night more and a strange lodging would be his,
Far from Katano, where in spring his steps had often wandered in the
snow of the fallen cherry-flowers:*

*Far from Aveshigama, whence on an autumn eve he was wont to return
clad in the brocade of the red maple leaves—
Despondent, his mind could think of nothing but his home, bound to him
by the strongest ties of love,
And of his wife and children, whose future was dark to him.
'For the last time,' he thought, as he looked back on the ninefold Im-
perial city,
For many a year his wonted habitation.
How and his heart must have been within him.
As he set out on this unlooked-for journey!
His sleeve wet in the fountain of the barrier of Osaka—
No barrier, alas! to stay his sorrow—
He sets forth over the mountain track to Uchide's no hama,
When from the shore he cast his glance afar over the wave.*

¹ Uchide means "to set forth," and hama, "shore."

右の如く、此の文は、小島が盛に双關的語を用ひて、事實の絲にて、巧に地名を絡り合せたるものなれば、到底之を譯すること能はず。

次の文は、往々「太平記」の中に見ゆる挿入文の一章にして、西紀第十三世紀に起りたる元寇の亂をば、非常に想像的に記したるもの、(元寇の事蹟、研究書目は前に掲ぐ)。

自、太元二攻日本事(卷三十九)

信三餘ノ暇ニ寄テ、千古ノ記ス所ヲ看ルニ、異國ヨリ我朝ヲ攻シ事、開關以來已ニ七箇度ニ及ベリ。殊更文永弘安兩度ノ戰ハ、太元國ノ老皇帝支那四百州ヲ討取テ、勢ヒ天地ヲ凌グ時ナリシカバ、小國ノ力ニテ難退治カリシカドモ、輒ク太元ノ兵ヲ亡シテ、吾國無爲ナリシ事ハ、只是尊神靈神ノ冥助ニ依シ者也。

其ノ征伐ノ法ヲ聞ケバ、先太元ノ大將萬將軍、日本王幾五箇國ヲ、四方三千七百里ニ勘ヘテ、其ノ他ニ兵ヲ無ニ透間立双テ、是ヲ數ルニ、三百七十萬騎ニ當レリ。此ノ勢ヲ大船七萬餘艘ニ乗テ、津々浦々ヨリ推出ス。此ノ企兼テヨリ吾朝ニ聞エシカバ、其ノ用意ヲ致セトテ、四國九州ノ兵ハ、筑紫ノ博多ニ馳集リ、山陽山陰ノ勢ハ、帝都ニ馳參ル。東山道北陸道ノ兵ハ、越前牧野津ヲ堅メケル。

去程ニ文永二年八月十三日太元七萬餘艘ノ兵船、同時ニ博多ノ津ニ押寄タリ。大

船船艦ヲ双テ、モヤヒヲ入テ、歩ノ板ヲ渡シテ、陣々ニ油幕ヲ引キ、干戈ヲ立双ベタレバ、五島ヨリ東、博多ノ浦ニ至ルマデ、海上ノ四國三百餘里、俄ニ陸地ニ成テ、壓氣爰ニ乾闥婆城ヲ吐出セルカト被レ怪

日本ノ陣ノ構ハ博多ノ濱端十三里ニ石ノ堤ヲ高ク築テ、前ハ敵ノ爲ニ切立タルガ如ク、後ハ爲ニ御方ノ平ヤトシテ、懸引自在也。其陰ニ屏ヲ塗リ、陣屋ヲ作テ、數萬ノ兵並居タレバ、敵ニ勢ノ多少ヲ見透サレシト思フ處ニ、敵ノ船ノ船前ニ、楫棹ノ如クナル柱ヲ、數十丈高ク立テ、横ナル木ノ端ニ、人ヲ登セタレバ、日本ノ陣内目ノ下ニ直下サレテ、秋毫ノ先ヲモ數ツベシ。又面ノ四五丈廣キ板ヲ、筏ノ如クニ疊鎖テ、水上ニ敷双タレバ、波ノ上ニ平ナル路數々作出サレテ、恰三條ノ廣路、十二ノ街衢ノ如也。此ノ路ヨリ敵軍數萬ノ兵馬ヲ懸出シ、死ヲモ不願戰フニ、御方ノ軍勢ノ鋒タユミテ、多クハ退屈シテゾ覺ケル。鼓ヲ打テ兵刃既ニ交ル時、鐵砲トテ鞠ノ勢ナル鐵丸ノ迸ル事、下坂ヲ車輪ノ如ク、霹靂スル事、閃閃雷光ノ如クナルヲ、一度ニ二三千抛出シタルニ、日本ノ兵多ク燒殺サレ、關橋ニ火燃付テ、可ニ打消隙モ無リケリ。

上松浦下松浦ノ者トモ、此ノ軍ヲ見テ尋常ノ如ニシテハ肝ハジト思ケレバ、外ノ

浦ヨリ廻テ、僅ニ千餘人ノ勢ニテ、夜討ニゾシタリケル。志ノ程ハ武ケレドモ、九牛
 ガ一毛、大倉ノ一粒ニモ當ラヌ程ノ小勢ニテ寄セタレバ、敵ヲ討事ハ二三萬人ナ
 リシカドモ、終ニハ皆被レニ生捕、一身ヲ縛縛ノ下ニ苦シメテ、掌ヲ連索ノ、舄ニ貫レ
 タリ。

懸リシ後ハ、重テ可レ戰様モ無リシカハ、筑紫九國ノ者共、一人モ不レ殘四國中國
 ヘゾ落タリケル。日本一州ノ貴賤上下、如何カセント周章騒ク事不レ斜、諸社ノ行
 幸御幸、諸寺ノ大法秘法、宸襟ヲ傾テ肝膽ヲ碎カル、都テ六十餘州大小ノ神祇、靈
 驗ノ佛閣ニ勅使ヲ被レ下、奉幣ヲ不レ被レ捧云所ナシ。此レ如御祈禱已ニ七日滿ジケ
 ル月諏訪ノ湖ノ上ヨリ、五色ノ雲西ニ變キ、大蛇ノ形ニ見エタリ。八幡御寶殿ノ
 扉啓ケテ、馬ノ馳ケル音響ノ鳴音虚空ニ充滿タリ。日吉ノ社二十一社ノ錦帳ノ
 鏡動キ、神寶刃トカレテ、御香皆西ニ向ヘリ。住吉四所ノ神馬、鞍ノ下ニ汗流レ、
 小守勝手ノ、鐵ノ橋已ト立テ、敵ノ方ニツキ双ベタリ。凡、上中下二十二社ノ震動
 奇瑞ハ不レ及申、神名帳ニ載ル所ノ三千七百五十餘社、乃至山家村里ノ小社櫻社道
 祖ノ小神迄モ、御戸ノ開ヌハ無リケリ。此ノ外春日野ノ神鹿、熊野山ノ靈鳥、氣比
 宮ノ白鷺、稻荷山ノ名婦、比叡ノ猿、社々ノ仕者悉、虚空ヲ西ヘ飛去ルト、人毎ノ

夢ニ見エタリケレバ、サリ共此、神々ノ助ニテ、異賊ヲ退ケ給ハヌ事ハアラジト、
 思フ計ヲ憑ニテ、幣帛ヲ捧ヌ人モナシ。

浩ル處ニ、弘安四年七月七日皇太神宮ノ禰宜荒木田尙良、豐受太神宮ノ禰宜度
 會貞尙等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ、上奏シケルハ、二宮ノ未社風ノ社ノ寶殿ノ
 鳴動スル事良久シ。六日ノ曉天ニ及テ、神殿ヨリ赤雲一村立出テ、天地ヲ耀シ、
 山川ヲ照ス。其ノ光ノ中ヨリ、夜叉羅刹ノ如クナル青色ノ鬼神顯レ出テ、土囊
 ノ結目ヲトク、火風其ノ口ヨリ出テ、沙漁ヲ揚ゲ、大木ヲ吹抜ク、測知ヌ九州ノ
 異狄等、此日即可レ滅ト云事ヲ。事若誠有テ、奇瑞變ニ應ゼバ、年來申請ル處ノ
 宮號、以ニ叙感儀可レ被レ宣下トゾ奏シ申ケル。去程ニ、太元ノ萬將軍七萬餘艘
 ノモヤヒヲトキ、八月十七日辰刻ニ、門司赤間ガ關ヲ經テ長門周防ヘ押渡ル。兵
 已ニ渡中ヲサシ、時、サシモ風止ミ雲閑ナリツル天氣、俄ニ替テ黒雲一村、長ノ方
 ヨリ立覆フトソ見エシ。風烈ク吹テ、逆浪天ニ漲リ、雷鳴霆テ電光地ニ激烈ス。
 大山モ忽ニ崩レ、高天モ地ニ落ルカトオビタ、シ。異賊七萬餘艘ノ兵船トモ、或
 ハ荒磯ノ岩ニ當テ、微塵ニ打碎カレ、或ハ逆巻浪ニニ打返サレテ、一人モ不レ殘
 失ニケリ。斯リケレドモ、萬將軍一人ハ、大風ニモ放タレズ、浪ニモ不レ沈窈冥

タル空中ニ、飛揚リテ立タリケル。爰ニ呂洞賓ト云仙人、西天ノ方ヨリ飛來テ、萬將軍ニ示シケルハ、日本一州ノ天神地祇、三千七百餘社來テ、此惡風ヲ起シ、逆浪ヲ漲シム。人力ノ可及處ニ非ス。汝早ク一箇ノ破船ニ乗テ本國へ可歸ト申ケル。萬將軍此言ヲ信シテ一箇ノ破船有ルニ乗テ、只一人大洋萬里ノ波ヲ渡テ無程明州ノ津ニ著ニケル。(下略)

Poring over the records of ancient times, in the leisure afforded me by the three superfluous things [night, winter, and rain], I find that since the Creation there have been seven invasions of Japan by foreign countries. The most notable of these attacks were in the periods Bunyei (1264-1275) and Kean (1278-1288). At this time the Great Yuan Emperor [Kublai Khan] had conquered by force of arms the four hundred provinces of China. Heaven and earth were oppressed by his power. Hard would it have been for a small country like our own to repel him, and that it was able easily and without effort to destroy the armies of Great Yuan was due to naught else but the divino blessing.

The plan of this expedition was as follows: General Wan, the leader of the Yuan force, having estimated the area of the five metropolitan provinces of Japan at 3700 ri square, calculated that to fill this space with soldiers so as to leave no part of it unoccupied would require an army of 3,700,000 men. So he set forth from the various ports and bays with his troops embarked in a fleet of more than 70,000 great ships. Our Government, having had previous information of this design, ordered preparations to be made. The forces of Shikoku and Kinshu were directed to assemble in all haste at Hakata, in Tsukushi; those of the western provinces of the main island hurried to the capital: while the men of Tōsandō and of the northern provinces occupied the port of Tsuruga, in Echizen.

Thereupon the warships of Great Yuan, 70,000 in number, arrived together at the port of Hakata on the third day of the eighth month of the second year of Bunyei (1265). Their great vessels were lashed together, and gangways laid across from one to another. Every division was surrounded by

screens of oilcloth; their weapons were set up in regular array. From the Goto Islands eastward as far as Hakata the sea was enclosed on all sides for 400 ri, and sudden became dry land. One wondered whether a sea-serpent vapour had not been belched out and formed a mirage.

On the Japanese side a camp was constructed extending for thirteen ri along the beach of Hakata. A high stone embankment formed its front, precipitous on the side of the enemy, but so arranged in the rear as to allow free movement for our troops. In the shelter of this, plastered walls were erected, and barracks constructed, in which several tens of thousands of men were lodged in due order. It was thought that in this way the enemy would be unable to ascertain our numbers. But on the bows of the hostile ships, beams like those used for raising water from wells were set up to a height of several hundred feet, at the ends of which platforms were placed. Men seated on these were able to look down into the Japanese camp and count every hair's end. Moreover, they chained together planks forty or fifty feet wide so as to

form a sort of rafts, which, when laid on the surface of the water, provided a number of level roads over the waves, like the three great thoroughfares or the twelve main streets [of Kioto]. By these roads the enemy's cavalry appeared in many tens of thousands, and fought so desperately that our troops relaxed their ardour, and many of them had thoughts of retreat. When the drum was beaten, and a hand-to-hand contest was already engaged, iron balls, like footballs, were let fly from things called 'cannon' [with a sound] like cart-wheels rolling down a steep declivity, and accompanied by flashes like lightning. Two or three thousand of these were let go at once. Most of the Japanese troops were burnt to death, and their gates and turrets set fire to. There was no opportunity of putting out the flames.

When the men of Upper Matsura and Lower Matsura saw this, they felt that ordinary measures would be useless, so they made a circuit by way of another bay, and, with only 1000 men, ventured on a night attack. But however brave they might be, they were no more than one hair upon a bull

or one grain of rice in a granary. Attacking with so small a force, they slew several tens of thousands of the enemy, but in the end were all made prisoners. They were bound with cruel cords, and their hands nailed to the bulwarks of the line of vessels.

No further resistance was possible. All the men of Kinshin fled to Shikoku and the provinces north of the Inland Sea. The whole Japanese nation was struck with panic, and knew not what to do. Visits to the shrines of the Shinto gods, and public and secret services in the Buddhist temples, bowed down the Imperial mind and crushed the Imperial liver and gall-bladder. Imperial messengers were despatched with offerings to all the gods of heaven and earth, and all the Buddhist temples of virtue to answer prayer, great and small alike, throughout the sixty provinces. On the seventh day, when the Imperial devotions were completed, from Lake Suwa there arose a cloud of many colours, in shape like a great serpent, which spread away towards the west. The doors of the Temple-treasury of Hachiman flew open, and the

skies were filled with a sound of galloping horses and of ringing bits. In the twenty-one shrines of Yoshino the brocade-encased mirrors moved, the swords in the Temple-treasury put on a sharp edge, and all the shoes offered to the god turned towards the west. At Sumiyoshi sweat poured from below the saddles of the four horses sacred to the deities, and the iron shields turned of themselves and faced the enemy in a line.

(Many more similar wonders follow.)

Now General Wan of Great Yuan, having cast off the moorings of his 70,000 ships, at the hour of the dragon on the seventeenth day of the eighth month started for Nagato and Suwô by way of Moji and Akamagasaki [Shimonoseki]. His fleet were midway on their course when the weather, which had been windless, with the clouds at rest, changed abruptly. A mass of black clouds arising from the north-east covered the sky, the wind blew fiercely, the tumultuous billows surged up to heaven, the thunder rolled and the lightning dashed against the ground so abundantly that it seemed as if great mountains

were crumbling down and high heaven falling to the earth. The 70,000 war-ships of the foreign pirates either struck upon cragged reefs and were broken to atoms, or whirling round in the surging eddies, went down with all hands. Nevertheless, General Wan alone was neither driven off by the storm nor buried beneath the waves, but flew aloft and stood in the calm seclusion of the middle heaven. Here he was met by a sage named Kyo To-bin, who came soaring from the west. He addressed General Wan as follows: 'The gods of heaven and the gods of earth of the entire country of Japan, 3700 shrines or more, have raised this evil wind and made the angry billows surge aloft. Human power cannot cope with them. I advise you to embark at once in your one shattered ship and return to your own country.' General Wan was persuaded. He embarked in the one shattered ship which remained, braved all alone the waves of 10,000 ri of ocean, and presently arrived at the port of Ningeln [in China].

此の處に、「鐵炮」と云ふは、元より「火繩銃」のことなるが「和漢三才圖會」といふ百科字彙に據るに、(和漢三才圖會第二一卷鐵砲の條)第十六世紀以前には、支那に大砲も火繩銃も有らざりき。火繩銃は、一千五百四十三年(日本の後奈良天皇天文十二年)葡萄牙人メンデス、ピント等、日本種子島に來りし時、初めて、之を日本に紹介し、其の後、日本より支那に傳へし記事より推測すれば、此の章は蓋し、すべて後人の挿入ならむ。

但し、讀者心せよ。小説の如き粧飾ある此の文中にも、事實の種子の潜めるに。元主忽必烈は、一大艦隊を整へて日本に寇せしが、其の結果は、不幸にして、英國を征服せんとて來寇したる西班牙艦隊アラバタの如くなりしぞ。

○「太平記」の研究書目

(1) 太平記の作者は、小島法師なりと云ふ説は、近年帝國大學にて史料編纂の際、洞院藤原公定(後村上二〇〇元)——後小松應永六(一四五九)の日記、應安七年五月三日の條に、傳聞、去二十八九日之間、小島法師圓寂云々、是近日統天下「太平記作者也、凡難レ爲三卑賤之器二有二三名匠之四」可レ謂三無念二と有るを發見し、即ち此の作者は、小島法師なることに決定し、重野成齋博士始めて學士會院にて演説し、菅政友氏之を史學會雜誌第三號に掲げたり。又星野恒博士は、小島法師は兒島高徳の出家したるなりとまで説きたり。(公定日記は山城毘沙門堂所藏)

(2) 素本は——日本文学全集第一六、第一七、第一八編。——續帝國文庫第一一編。——太平記五册(國文學會校訂)(これはよし)

(3) 註釋書は、其の軍略兵法を論せしものなど古來數多き中に、明治以前のものにて有益なるは——太平記鈔四十卷十册(古活字本)——太平記大全四十一卷(四道智)——太平記綱目六十卷、刊本(原友軒)——參考太平記(今井弘濟、内藤貞顯)等。近頃のものは、——國文學會校訂本と併に出てる萩野博士校訂の太平記註釋、この註釋簡明にして要を得たり。よろし。

第二章 兼好法師と徒然草。

○徒然草は Rev. G. S. Eby, 氏より譯せられたり、Chrysanthemum 第三卷に載る。

日本の文學には、乾燥不毛の地も多かれども、また、泉水混々たる沃地オアシスの無きにあらず。「徒然草」の如きは、確に最も趣味ある文學の一つなり。「徒然草」は、短篇文・逸事談、及び全く想像的題目——其の中の或著は Selden の Table Talk の如きもの——に關する論說等を記す。

Selden (一五八四——一六五四) 英の政治家にして著述家なり。著書、數多きが中にも Table Talk は最も價值あり。

此の著者は、即ち兼好法師(後宇多天皇安一四二——後村上正二〇一五)とす。而して、「法師」

砂漠の中にも、沃地あり。

兼好法師。

とは、やゝ英國の Rowland に似たる僧徒の尊敬の稱號なり。兼好は良家の出にして、系統の流に溯れば、天兒屋根尊を初めとして、其の家代々俊傑の人を出したり。

○卜部氏系圖

○大雷臣命(天兒屋命十二世)——(經九世)——鏡足——(經四世)——日真慶(賜卜部姓)——(經九世)——兼茂——兼直

兼直從四位右京大夫 大府正慈遍
兼茂從四位右京大夫 兵部大輔兼雄
兼直京師吉田社神官 兼好法師

而して兼好は、數年間、後宇多院に仕へ(後宇多院に親昵せられて左兵衛尉となる)たるの故を以て、朝廷の有職故實に明かなりしは「徒然草」中の記事の證する處なり。斯くて、西紀一千三百二十四年、後宇多院崩御の後は、出家して、或は木曾に隠れ、或は京在の吉田に住して、吉田兼好と呼び、遂に我が葬地を京都雙岡に卜して櫻花を植え、

契りちく花と雙びの岡のへに

あはれ幾世の春を過ぐさん

とまで詠じて、雙岡の法師とまで呼ばれしが、後應永三年、伊賀守橘成忠の招に應じ

兼好の人物。

て、伊賀に赴き、國見山の麓、田井庄に庵を結びて風月を楽しみ、六十九歳にて正平五年（西紀一千三百五十年）其處に歿したりといふは信に近きが如し。

日本の批評家には、兼好の人格に關して、互に正反對の説を成す者あり。或人は、かの太平記卷の二十一に見えたる誹謗的記事を楯として、兼好は、高師直の爲に、鹽治判官高貞の妻に送る艶書を認めたるほどの逸蕩放埒の凡僧なりと云へば、一方には、併し、太平記は甚だ疑はしき原據にして其の記事を疑ふ可き理由多々あるを以て、兼好は信心堅固なる法師なりと固く主張する崇拜者も有り。

之を、其の著書より推察するに、兼好には二様の性質ありしが如し。即ち、一面、馨烈なる醋酸の如き性質に、風雅にして稍罵詈好の人なると同時に、一面また、信心堅固の道者なり。併し此の両面中、前者は後者よりも、稍優れりと思はる。故に其の宗教心は敦厚の如く見ゆれど、實は然らず。兼好の性質は、かの Horace に似て、敬虔の心有れども、ホレースの如き一大徳なりといはんは未だし。

○ホレース又ホラチウス(Horatus 西紀前六五—前八)は、羅馬の叙情及び諷刺詩人として有名な人。もと、奴隸より解放せられし人の子なり。北方伊太利に生れ、羅馬、アテナに學び、後軍隊に入り、アルプスに從ひて、大功を建つ。後退隱し、カエリキリウス、メケナス等と親交す。尤、彼の思考は

兼好には二様の性質あり。

甚深ならず。哲學思想は市井的にして學究的ならず。隨つて高尚精緻の感想は興へ難しといへども、程度なる諷刺を用ひて、人を教訓する點に於て古今獨歩とす。

天台宗の一長老たる兼好は、——常に斯く論ざる可からざるが故に、——常によく人を諭して、或は人生は無常なりと云ひ、或は、名利に使はれて一生を苦しむることを愚なれと云ひ、或は濁世の利慾を放下して早く無量壽域に到らんことを心懸けよと説けども、兼好自身には、人間の本能は尙存し、彼れ自身が持つて生れたる性癖は、決して制御すべきにあらず、篇中、徃々人慾の念の存在せるを見る。而して、兼好の崇拜者は、之を讀みながらこれ有るを忘れたり。

兼好の道心は、世事憧憬の中に交つて、而かも、ますます禪定を得、又は俗世間の生活に對して、而かも純潔不動なること、恰も聖壇の燈明に對する時の如きほどにも、堅固ならず。

凡そ、遁世するに有らざれば、道は修し難し(是れ天台宗の常套語なるが)とは、兼好が修道上の意見にして、また物にも記したり。兼好、剃髪の後、或時、木曾に遊びて其の山水を愛し、

思ひたつ 木曾の麻衣 あさくのみ

遁世せざれば道は修し難し。

染めてやむべき袖の色かは

と詠みて、即ち麁を、其の霧原山に結びて住みしが、一日國守、兼好が庵近く来て狩獵を催うし、一山大に騒動しければ、

此處も亦 浮世なりけり よそながら

ちもひし儘の 山里もがな

と、不平たらしく尙遠き山里に移りたりとぞ。

○兼好が此の意見は、徒然草の中に多し。其の一例を擧ぐれば、

道心あらば、住む所にしも因らじ。家にあり人に交るとも後世を顧はんに、難かるべきかはと云ふは、更に後世知らぬ人なり。げには、此の世を果敢なみ、必ず生死を出んと思はんに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧る營の勇しからん。心は縁に引かれて移るものなれば、閑ならては、道は行じ難し。

併し、兼好は、此の豫防法を用ひしも、生涯遂に、無我の域に達すること能はず。勿論、閑靜なる境には、自ら心も治まり氣も澄み渡るものなれど、それは、俗事に接せずして、心を高尚なる事物に安ずる結果に外ならず。語を換ふれば、器械的に妄念を起さざるに過ぎざるなり。

ともく、兼好といふ名は入道したる時に選みたる法の名にて、俗稱兼好をば音讀し

て、法師らしく讀ませたるなり。例へば *Onkō* といふ人ありとせよ。此の人出家して、別に法名を撰ばずして、直ちに *Brother Olivorus* と呼ぶが如し。

兼好は、可憐の人物にあらず。

兼好の文章は、自ら、兼好自身の人物を説明せるもの多く、其の文に據つて、兼好の爲人の徹頭徹尾可憐の人物にあらずを知るべし。結婚を嫌ひ、(但し、獨身と不犯とは、此人には同意の語にあらず)子孫あるを可とせず、四十年を越えてなほ生くるは面白からずと論ずる彼は、何處にか欠けたる所あるならむ。左の逸話は、兼好の自白なれば、彼が爲人の不思議に混合せるもの有るを見る。

心無しと見ゆる者も、善き一言は言ふ者なり。ある荒夷の恐しげなるが、かたへに會ひて、「御子はどはすや」と問ひしに、「一人も持ちはへらず」と答へしかば、「ちては、物の哀は知り侍らじ。情無き御心にぞ、物したまふらんと、いと恐ろし。子故にこそ、萬の哀は想ひ知らるれ」と言ひたりし。さも有りぬへき事なり。恩愛の道ならては、斯る者の心に慈悲ありなんや。孝養の心無き者も、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。

Even men from whom we should not expect much feeling sometimes say a good thing. A certain wild savage of terrible appearance, meeting a neigh-

pour, asked him, had he any children. 'Not one,' was the reply. 'Then you cannot know the Ah-ness of things, and your doings must be with a heart devoid of feeling.' This is a very fearful saying. It is no doubt true that by children men become conscious of the Ah-ness of all things. Without the path of the natural affections how should there be any sentiment in the hearts of such persons?

物のあはれ。

そもく、物の哀を知る」とは、日本の文學、分けて、古雅時代の文學には屢々繰返さるゝ文句なり。國學者本居宣長は、之を其の歌論「石上私淑言」に、甚だ長く論じ置けり。(又、源氏物語玉の小櫛にも)蓋し、「物の哀を知る」とは、佛蘭語の *Cœur Sensible* にて、見る物、聞く物に就けて、心の感じ動きて同情することなり。

兼好をして言はしめば彼自身の如き貴人、學者、詩人にとりては、物のあはれを感じるに、子を持つこと必要ならずといふならむ。但し、かの賤の男(即ち荒夷)の如きには、或はそれも可ならむとすべし。

各派の宗教徒及び道學者等は、各自競うて、兼好を引きて、我宗の長老にせんと欲す。

兼好の學は神儒佛
老を兼ぬ。

思ふに、兼好元より、佛門の一聖なれども、彼の各宗教徒が、兼好を我が宗派に引き寄せんと争ふ大原因は、爰にあらずして、兼好は、かの日本人の性質とも云ふべき、他人の信仰に對して、寛大なる度量を以て、如何なる説をも採用せし故ならざらんや。かれ兼好は、誠マコトに神道を信じ、儒教を尊び、兼て老莊の説をも窺ひたり。併し、兼好をば、各宗派の同類、又は倫理の師として尊敬するは誤れり。彼は、徒然草の開卷第一に、

つれづれなる儘に、日ぐらし硯に向ひて、心に移り行く由無し事を、そこはかと無く、書き附ければ、あやしうこそ物狂ほしけれ。

と其の心を陳べたり。若し、後世の學者の説を正しと爲ば、此の書、兼好が世に公にせんと欲したるものならざらしむ、何人か、現今の體裁にして、編纂したるなり。

○兼好は四季の段に
庭に任せつゝ、味氣無きすまびにて、撥破り聚つ可き物なれば、人の見るべきにもあらず。など云へり。

兼好は、尙古の人にて、美術的器物、内裏詞(現今も内裏詞には、古のもの尙存す)、書物等何くれと無く、古風を尙びて、源氏物語、枕草紙の文格をば、特別に賞讃し、其の文體を學んで、徒然草を作りしこと明白なり。

○徒然草に

何事も、古き世のみぞ甚はしき。今様は無下に卑しくこそ成り行くめれ。かの木の道の工の造れる美しき

「徒然草」の文體。

器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞なんどぞ、昔の反古どもはいかじき。ただいふ詞も口惜うこそ成りて行くなれ。古は、「車もたげよ」「火か上げよ」とこそ云ひしを、今様の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」と云ふ。「主殿寮の人数だて」と云ふべきを、「たちあかし白くせよ」と云ひ、最勝講の御座向所なるをば、「御座のる」とこそ云ふな、「かうる」といふ。口惜しとて老き人は仰せられし。と見ゆ。

故に、其の文體、平安時代の言語に代ふるに、漢語・支那の故事・比喻等を以てしたる當時の文體とは、甚だ異なる點あり。よりて、一言以て之を評すれば、兼好の文章は時代後の雅文なり。

併し、兼好は、必要なる漢語は用ふることを拒まず、又支那歴史を引て、適切なる證明を興ふることは忌まざれども、かの漢文を模倣するの徒が、往々浮華なる漢語を用ひ、自己の博學を衒うて、却つて其の文を傷くるが如きを好まざるが故、其の論文は恰も世才に長けたる人の談話の如く、平易質朴誠に無疵完全の文章なり。

日本の中古文學を研究せんと欲せば「徒然草」より良きは無し。此の書、源語・枕草紙ほどには困難ならざる上、「徒然草講義」といふ近刊の書物は、日本語に上達せる人を益する所多し。又珍本を嗜好する人は、一千六百七十二年及び一千六百八十八年に出でたる木版の古書を求むべし。其の版精巧にして、且つ注解に詳し。

兼好又歌人にて、其の頃、歌人の四天王(印度の神話を借りたる語)と呼ばれたる一人なり。

○和歌四天王は頼阿法師・兼好法師・淨辨法師・慶運法師なり。

(1) 頼阿は俗名二階堂良宗、下總守となる。感ずる所ありて正和二年(皇紀一九七三)剃髮し、叡山・高野に登つて修行し、和歌を藤原爲世に學ぶ(伏見一九四九——長慶文中元)其の歌集草庵集四卷、續二卷は、古來歌人の間に尊重せられ、本居宣長も之を註釋して、玉篋六冊を作り、又草庵集求詳解十五冊(梅月堂宣阿)あり。其の歌論の書を井蛙抄(續類從和歌部)にもと云ふ。二條良基との歌論の書を愚問賢註(續類從にも)と云ふ。水蛙眼目(群書類從和歌部)は、和歌の故實、作歌上の注意なり。

(2) 淨辨 慶運は其の傳を詳にせず。慶運は淨辨の子なり。慶運集は類從和歌部にのる。(以上三法師の傳は、大日本史第二二二卷にのる。頼阿のは、野史二六一にもあり)

(3) 此の四天王に、夫々異名あるは左の名歌を詠みし故

瀬田の頼阿
月やどる瀬田の面にふす鴨の水より立つ明方の空

手枕の兼好

手枕の野邊の草葉の霜枯に身はならはしの風の寒けさ。

蘆葉の淨辨

みなと江の水に立てる蘆の葉に夕霜さやに浦風ぞ吹く

羅野の慶雲

鹿若ふ山の羅野の夕雲雀あがるを落つる聲かとぞ聞く

然れども徒然草には、和歌を雜へず。多くの日本の學者は云ふ、兼好が和歌に於ける

才を、他方面に向けて文章を綴りしは幸なりと。

是より、徒然草を拔萃すべし。

八になりし年、父に問うて云ふ。「佛は、如何なる者にか、候ふらん」といふ。父が云ふ、「佛には、人の成りたるなり」と。又問ふ、「人は何として、佛には成り候ふやらん」と。父また、「佛の教によりて成るなり」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける」と。又答ふ、「それも亦先きの佛の教によりて、成り給ふなり」と。又と云ふ、「其の教はじめ候ひける第一の佛は、如何なる佛にか候ひける」と云ふ時、父「空よりや降りけむ。土よりや湧きけむ」と云ひて笑ふ。「問ひ詰められて、得答はずなり侍り」と、諸人に語りて興じむ。

When I was eight years of age, I asked my father, 'What sort of thing is a Buddha?' He replied, 'A Buddha is something which a man grows into.' 'How then does one become a Buddha?' said I. 'By the teachings of a Buddha.' 'But who taught the Buddha who gives us this teaching?' 'He becomes a Buddha by the teaching of another Buddha who was before him.' 'Then what sort of a Buddha was that first Buddha of all who began tea-

ching?' My father was at an end of his answers, and replied, laughing, 'I suppose he must have flown down from the sky or sprung up from the ground.' He used to tell his friends this conversation, much to their amusement.

よんじゅうはちごころのとき、色好むもの男は、いと寂寥しく、玉の冠の音無が心づきたてり。

However accomplished a man may be, without gaily he is a very lonely being. Such a one reminds me of a costly wine-cup that has no bottom.

後の世の事、心に忘れず、佛の道疎からぬ心にくし。

That man is to be envied whose mind is fixed on futurity, and to whom the way of Buddha is familiar.

女は、髪の日出度からんこと、人の目立つべかめれ。人の程、心操などは、物うち言ひたる景氣にこそ、舉動にも知らるれ。

事に觸れて、うち有る様にも、人の心を惑はし、すべて、女のうち解けたるいも

寝ず、身を惜しとも思ひたらず、堪へくもあらぬ業にも、能く堪へ忍ぶは、只色
を思ふが故なり。

賊に、愛着の道、其の根深く源遠し。六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつ
べし其の中に、只かの惑の一つ止め難きのみぞ、老たるも、若きも、智あるも、愚
なるも、かはる所無しとぞ見ゆれ。

されば、女の髮筋をよれる綱には、大象も能く繋かれ、女の穿ける足駄にて作
れる笛には、秋の鹿必ず集るとぞ云ひ傳へ侍る。

自ら戒めて、恐るべし、慎むべし、此の惑なり。

What strikes men's eyes most of all in a woman is the beauty of her hair.
Her quality and disposition may be gathered from the manner of her speech,
even though a screen be interposed. There are occasions too when her very
posture when seated leads a man's heart astray. Then, until his hopes are
realised, he bears patiently what is not to be borne, regardless even of his
life. It is only love which can do this. Deep indeed are the roots of passion,
and remote its sources. It is possible to put away from us all the other lusts

of this wicked world. But this one alone it is very hard to eradicate. Old
and young, wise and foolish, all are alike its slaves. Therefore it has been
said that with a cord twined of a woman's hair the great elephant may be
firmly bound; with a whistle carved from a woman's shoe the deer in autumn
may without fail be lured.

It is this beguilement which we must chastise in ourselves, it is this which
we must dread, it is this against which we must be on our guard.

神無月の比。栗栖野と云ふ所を過て、或山里に尋ね入る事はべりしに、遙なる
苔の細道を踏わけて、心細く住なしたる菴あり。木の葉に埋もるゝ笥の匣なら
てば、露音なふ者無し。閑伽棚に、菊・紅葉など折り散らしたる、流石に、住
む人の有ればなるべし。斯くても、在られけるよと、哀に見る程に、彼方の庭
に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、廻を厳しく圍ひたりしこ
と、少し事醒めて、此の木無からましかばと覺えしか。

One day in the tenth month [about our September] I took a walk over

the pain of Kurisu, and exploring a certain hill-district which lay beyond, was thending my way along a narrow moss-grown path, when I came upon a lonely cottage. No sound was to be heard except the dripping of water from a pipe buried under fallen leaves. It was, however, inhabited, as I gathered from the chrysanthemums and red autumn leaves which bestrewed the domestic shrine. 'Ah!' thought I, 'to spend one's days even in such a spot!' But whilst I stood gazing I espied in the garden beyond a great orange-tree with branches bending to the ground. It was strongly fenced off on every side. This [evidence that covetous desires had penetrated even here] somewhat dispelled my dreams, and I wished from my heart that no such tree had been.

筆を執れば、物書かれ、樂器を執れば音を立てんと思ふ。茶を執れば酒を思ひ、采を執れば、だうたん事を思ふ。心は必ず、事に觸れて来る。假りにても、不善の戯を爲すべからず。

あからさまに、聖教の一句と見れば、何と無く、前後の文も見ゆ。本附にし

て、多年の非を悔むる事もあり。かりに、今、此の文を開げたらんしかば、此の事を知らんや。是れ、則ち、觸るゝ所の益なり。

心、更に作らずとも、佛前に在りて、珠數を執り、經を執らば、ある中にも、善業自ら修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして、禪定なるべし。事理元より二つならず、外相もし背かたれば、内證必ず熟す。強して、不信ふは可からず、仰せし、之を信じて。

If we take a pen in hand, it suggests writing; if we take up a musical instrument, the very act of doing so prompts us to make music; a wine-cup suggests drinking; dice make us think of gambling. Our hearts are inevitably influenced by our actions. We should therefore be careful to abstain wholly from unedifying amusements.

If we thoughtlessly glance at a verse of the Sacred Scriptures, what goes before and after presents itself to our minds without our effort, and this may lead to a sudden reformation of the errors of many years. If we had never read the Scriptures, how should we have known this? Such is the virtue of

association.

If, even without any pious intentions whatever, we kneel down before the Buddha, and take in our hands the sacred book and the bell, a good work goes on of itself within us. If, even with wandering minds, we take our seat on the rope-mat, unawares we become absorbed in devout contemplation.

At bottom, action and principle are one. If we are careful to avoid offences in our outward actions, the inner principle becomes fortified. We should therefore beware of making a profession of unbelief, and treat religion with all honour and respect.

世には、心得ぬ事の多きなり。とも有る事には、先づ酒を勤めて、強い飲ませたるを興とすること、如何なる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へ難げに、眉を蹙め、人目を計りて捨んとし、逃んとするを、捕へて引留めて、すゝるに飲ませつれば、うるはしさ人も、忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らず、倒れ伏す。祝ふ可き日など

は、淺ましかりぬべし。明る日まで、頭痛く、物食はず、によひ臥し、生を隔てたる様にして、昨日の事覺えず。公私の大事を欠きて、煩となる。人をして、斯る目を見すること、慈悲も無く、禮儀にも背けり。かく辛き目に遇ひたらん人、如く口惜しと思はざらんや。他の國に、斯る習あめりと、是れらに無き人事にて、傳へ聞きたらんは、怪しく不思議に覺えぬべし。「中略」

There are many things in this world which to me are incomprehensible. I cannot understand how any one can find pleasure in urging people to drink against their will, as is done the first thing on all occasions. The victim in his distress knits his brows, and watches an opportunity when no one is looking to spill the liquor or to steal away. But he is caught, detained, and made to drink his share as if there was nothing the matter. The nicest fellows suddenly become madmen, and give way to absurd conduct. The healthiest men, before our very eyes, become afflicted with grave illness, and lay themselves down unconscious of past and future. A sorry way indeed of celebrating a festal occasion! Until the morrow they remain lying in a drunken

state, with aching heads, and unable to eat, as if far removed from life, taking no thought for the next day, and too ill to attend to important business, public or private;

It is not kindly or even courteous to treat people in this way. If we were told that such a custom existed in some foreign country (being unknown in Japan) we should think it most strange and unaccountable.

此の次に、酒狂者の醜態を描きたるが、事珍らしからざれば譯せず。次に左の句あり。此の世にては、過多く、財を失ひ、病を設く。百薬の長とは云へど、萬の病は、酒よりこそ起れ。憂を忘ると云へど、醉たる人ぞ、過にし憂をも思ひ出て泣くめる。後の世は、人の智慧を失ひ、善根をやくこと、火の如くして、悪を増し、萬の戒を破りて、地獄に墮つべし。酒を執りて、人に飲ませたる人、五百生が間、手無き者に生るとこそ、佛は説きたまふなれ。

In this world strong drink has much to answer for. It wastes our means and destroys our health. It has been called the chief of the hundred medicines, but in truth it is from strong drink more than aught else that all our diseases spring. It may help us to forget our miseries, but, on the other hand, the drunken man is often seen to weep at the remembrance of his past woes.

As for the future world, strong drink is pernicious to the understanding, and burns up the root of good within us as with fire. It fosters evil, and leads to our breaking all the commandments and falling into hell. Buddha has declared that he who makes a man drink wine shall be born a hundred times with no hands.

斯く説き來れば、兼好流石に、佛戒を守りて、大いなる禁酒家なりと讀者は推察すべけんが、次に左の如く説きたり。

斯く疎ましと思ふ物なれど、自ら捨て難き折も有るべし。月の夜、雪の朝、花の下にこそ、心長閑に物語して、盃出したる、萬の興を添ふるわづなり。

There are times when wine cannot be dispensed with. On a moonlight

night, on a snowy morning, or when the flowers are in blossom and with hearts free from care we are conversing with a friend, it adds to our pleasures if the wine-cup is produced.

而して、是の文句の次に、親友と痛飲することと説きたり。

獨、燈の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こゝなう慰むわかなれ。文は、文選のあはれなる卷々・白氏文集・老子の詞・南花の篇・此の國の博士どもの書ける物も、古へのは、あはれなる事多かり。

There is no greater pleasure than alone, by the light of a lamp, to open a book and make the men of the unseen world our companions.

何處にも有れ、しばし、旅立たること、眼をひる心地すれ。

Nothing opens one's eyes so much as travel, no matter where.

山寺に、かき籠りて、佛につかふまゐること、つれづれも無く、心の濁み清まる心地すれ。

I love to shut myself up in a mountain temple and attend to the services to Buddha. Here there is no tedium, and one feels that his heart is being purged of its impurities.

折節の移り變ること、物毎にあはれなれ。物の衰は秋こそ勝れと、人毎に云ふめれど、夫もなるものにて、今一きは、心も浮き立つものは、春の景色こそあめれ。鳥の聲なども、殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる比より、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやう／＼けしき立つほどこそあれ、折しも雨風うち續きて、心あはたしく散り過ぎぬ。青葉に成り行くまで、よろづに唯、心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負入れ、なほ、梅の句にぞ、古への事も立ち返り戀しう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤の覺束無き様したる、すべて思ひ棄て難き事多し。

THE SEASONS—SPRING

It is change that in all things touches us with sympathy. Every one says, and not without some reason, that it is chiefly the autumn which inspires this

feeling. But it appears to me that the aspects of nature in spring, more than at any other time, make our hearts swell with emotion. The songs of birds are especially suggestive of this season. With the increasing warmth the herbage in the hedge comes into bud, and as the spring grows deeper the hazes are diffused abroad and the flowers show themselves all their glory. Sometimes with continual storms of wind and rain they are dispersed agitatedly, and nothing but green leaves is left. All this affects our hearts with constant trepidation.

The flowering orange has a great fame. But it is the perfume of the plum-tree which makes us think longingly of the past. Then there are the gaily-coloured kerria and the wistaria of obscurer hues. All these have many feelings associated with them which it is impossible to leave unmarked.

静かに思へば、よろづ、過にし方の戀しさのみぞせん方無き。
人静まりて後、長さ夜のすまひに、何と無き具足とりしたため、残し置かじ

と思ふ反古など破りする中に、無き人の、手習ひ。繪書きすまびたる、見出たること、只その折の心地すれ。此の頃有る人の文だに、久しく成りて、如何なる折、何時の年なりけんと思ふは、哀なるぞかし。手馴れし具足なども、心もと無くて、變らざ久しき、いと悲し。

In our hours of quiet thought, who is there who has no yearnings for all that has passed away?

When every one has retired to rest, to while away the long hours of night we put in order our little odds and ends of property. Among scraps of paper thrown away as not worth preserving, a handwriting or a sketch thrown off for amusement by one who is no more, catches the eye and brings up vividly the time when it was made. It is affecting too, after years have passed, to find a letter even from one who is still alive, and to think that it was written at such a date, on such an occasion.

The articles their hands were familiar with remain unchanged (*they* have no hearts *ly*) for all the long years that have elapsed. Alas! alas!

手のわるき人の、憚らず、文藝を散らすはよし。見苦しとて、人に書かするは
らるべし。

The man who writes a bad hand should not be deterred by that circumstance from scribbling letters. Otherwise he gets his friends to write for him, which is a nuisance.

名利に使はれて、静なる暇なく、一生を苦しむること恐まれ。

He is a fool who spends his life in the pursuit of fame or gain.

或人、法然上人に、「念佛の時、睡に犯されて、行を怠り侍ること、如何して、此の障をやめ侍らん」と申ければ、「目の覺めたらん程、念佛したまへ」と答へられたりける、いと尊かりけり。又、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と云はれけり。是れも尊し。又「疑ひながらも、念佛すれば、往生す」とも云はれけり。是れも亦尊し。

The venerable priest Hōnen, being asked by a man whose drowsiness at prayers interfered with his religious duties, how he should remove this hin-

dance to devotion, replied, 'Pray earnestly enough to keep yourself awake.'

This was an admirable answer.

The same priest said, 'If you think your salvation is assured, it is assured; if you think it is not assured, it is not assured.' This is also an admirable saying.

Another admirable speech of his was to this effect: 'If, notwithstanding that you are perplexed by doubts, you continue your prayers, you will be saved.'

五月五日、加茂の競べ馬を見侍りしに、車の前に、雜人立隔て、見えざりしかば、各下りて、埒の際に寄りたれど、殊に、人多く立ち籠みて、分け入ぬべきやうも無し。かゝる折に、向ひなる棟ツクの木に、法師の登りて、木の股につい居て、物見る有り。取り附き乍ら、いたう睡りて、落ちぬべき時に、目を醒ます事度々なり。之を見る人、嘲りあざみて、「世の痴者かな。かく、危き枝の上にて、易き心有つて睡るらんよ」と云ふに、我心に、不圖思ひしまへに、「我等が

生死の到来、たゞ今にもやあらん。夫を忘れて、もの見て、目を暮す。恐なる事は、尙まぢりたるものぞ」と言ひたれば、前なる人ども、「誠に、ちたごころ候ひけれ、尤も恐に候ふ」と言ひて、皆後を見かへりて、「此處へ入らせたまへ」とて、所を去りて、呼び入れ侍りたま。か程のことほり、誰かは思ひ寄りぢらんなれども、折からの思ひ懸けぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらぬば、時どきして、物に感ずる事無きともふす。

We all got down and tried to push our way forward to the rails, but the press was too great for us to get passage. At this juncture we observed a priest who had climbed up a tree and seated himself in a fork to see better. Being drowsy, he was continually dozing over, and awaking just in time to save himself from falling. Everybody shouted and jeered at him. 'What a fool,' cried they, 'this fellow is to let himself fall asleep so calmly in such a dangerous position!' Upon this a thought flashed on me, and I exclaimed, 'Yet here are we, spending our time in sight-seeing, forgetful that death may overtake us at any moment. We are bigger fools even than that priest.'

The people in front of us all looked round and said, 'Nothing can be more true. It is indeed utter folly. Come this way, gentlemen.' So they opened a passage and allowed us to come forward. Now this remark of mine might have occurred to anybody. I suppose it was the unexpectedness of it at this time which caused it to make an impression. Men are not sticks or stones, and a word spoken at a favourable moment sometimes finds its way to the heart.

ふもあつたし

此の書の注釋者は、此の段を解して、此の段は、無常を鞠むるなり。生死の到来、只今にもや有らん。之を忘る可からずとの心なりと説きたり。

老來りて、始めて道を行ぜんと待つこと勿れ。ふるま境、多くは是れ少年の人なり。

名を聞くより、やがて面影は、推し量らるる心地するを、見る時は、又かねて、思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞かても、此頃の人の家の、そ

こほどにてぞ有りけんと思え、人も、今見る人の中に、思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又、いかなる折ぞ、只いま、人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我心のうちも、斯る事の、いつぞや有りしがと覺えて、何時とは思ひ出ねども、まさしく有りし心地するは、我ばかり斯く思ふにや。

賤げなる物。居たるあたりに、調度の多き。硯に、筆の多き。持佛堂に、佛の多き。前栽に、石草木の多き。家の内に、子孫の多き。人に會ひて詞の多き。願文に、作善の多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

花は盛に、月は隈なきをのみ観る物かは。雨に向ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行衛知らぬも、猶あはれに情深し。咲きぬ可きほどの梢、散り萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過にければとも、ちはる事ありてまからて」なんども書けるは、「花を見て」と云へるに、劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、然る事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「此の枝、かの枝散りにけり。今は見所無し」などは云ふめる。

"Beware of putting off the practice of religion until your old age. The ancient tombs are mostly those of young people."

"When we hear a man's name we try to form to ourselves some idea of his appearance, but we invariably find, on afterwards making his acquaintance, that we have been quite wrong."

"I wonder if it is only I who have sometimes the feeling that speeches which I have heard or sights that I have seen were already seen or heard by me at some past time—when, I cannot tell."

"THINGS WHICH ARE IN BAD TASTE"

"Too much furniture in one's living room.

Too many pens in a stand.

Too many Buddhas in a private shrine.

Too many rocks, trees, and herbs in a garden.

Too many children in a house.

Too many words when men meet.
 Too many books in a book-case there can never be, nor too much litter in
 a dust-heap."
 "It is not only when we look at the moon or flowers with our eyes that they
 give us pleasure. On a spring day, though we do not leave our house; on a
 moonlight night, though we remain in our chamber, the mere thought of them
 is exceedingly cheering and delightful."

思ふにかの Wordsworth が、若し、日本の文學者なりせば、

○ワースワース(西暦一七五〇—一八五〇)有名なる英詩人。革命戦争中フランスに旅行し、後閑逸に遊
 び、後稱國「ペラノヌ」に居たり。傑作の詩歌集を作り、サマシーに居て飲定詩人となる。

左の句は、兼好の此處より、剽竊したるなりと云はるべし。

"Inward eye

"That is the bliss of solitude." (幸に、胸に眼の有る隠者かな)

○徒然草研究書目

(1) 徒然草は古來大に行はれたる故、古今の註釋多し。
 兩きものにて有名なるは、

つれづれ(草野圃六冊(林道春))——徒然草文段抄七冊(北村季吟)——徒然草諸抄大成一〇冊(淺香久敬)
 これ、第一によるし。

明治になりて刊行せられたる活字本は、

つれづれ(草文段抄)小田清雄校(二冊)——訂正つれづれ(草文段抄)二冊(黒川眞頼、鈴木弘泰)——徒然草講
 義一冊(井上頼文)——挿(徒然草講義)二冊(伊藤平章)——標註徒然草一冊(増田宗信)——徒然草析義一冊
 (神崎一作)——徒然草新釋一冊(渡邊弘人)

○兼好法師の歌集は、類從第二六九卷和歌部。

○兼好法師の研究は

兼好法師傳考證三冊(野々口隆正)——本朝歴史(林龜山)——扶桑隱逸傳(深草元政)——吉野拾遺隱士
 松翁の著と云ふ。又、此の松翁は、兼好に仕へし童命松丸なりと傳ふ。——南山巡狩録(大草公弼)——史籍
 集覽にも——兼好傳記(倉田松益子)——大日本史第三二卷——歌道人物誌。

第三章 「能」「謠」「狂言」

朝廷に於ける短歌の製作は、此時代にも流行し、然る可き歌集は、絶えず撰ばれた
 り。されど、其の體は、特に注意すべきほどにもあらず、其の價值、前代のものに比

新しき詩的藝能現
はる。

能は、神樂より出
づ。

天の石窟の舞。

火闌降命の舞。

して大いに劣りたれば、今更に、取り出で、論ずべき必要も無し。それよりも、當時大いに興味を以て、國民より注意せられたる新しき詩的藝術の現出せるあり。之を「能」とす。能とは「藝能」の意にして、元は、「猿樂の能」と稱したる略稱にして、又「猿樂」とも稱す。

古希臘悲劇及び中世紀の神秘樂の如く、「能」は、實に其の源を宗教より發し、其の直系を「神樂」より引けり。「神樂」は一種の默舞にして、今日尙、神社の祭日には、舞臺の上にて、笛と太鼓に和せて舞ふ。而して、「神樂」の起りは、かの古事記（紀元七二二年）日本紀（紀元七二〇年）が撰ばれし時代に於て、既に傳はれる神話に歸することを得べし。傳へ言ふ。天照大神、其の御弟素盞鳴尊の惡戯を惡み、天の石窟戸に籠り給ひて、世は常闇となりし時、八百萬の天神、高天の原に集りて、大神を誘ひ出し奉るべき方法を講じ、天鈿女命に命じて、異形に粧はせ、槽の底を踏み鳴らして滑稽なる舞踏を爲さしめたりといふ。

又、此の二書に、尙一つ、宮中に於て、隼人（護衛兵）が行ひし默舞の起原ともなるべき話あり。左の如し。

此處に兄弟の神おはしき。兄神は火闌降命とて山嶽をしたまひ、弟神は彦火々出見

命とて海漁をなしたまひしが、或時、御兄弟御口論の末、彦火々出見命は養父におはする海神より贈られたまひし、潮満瓊を以て波を起し、大に兄神を困しめたまへば、兄神、罪に伏し吾れ汝に事へて、奴僕となるべし、救ひたまへと請ひたまへば、彦火火出見命なほ愠りて、共に言宣はず、依て、兄神は積鼻を著け、赭を面に塗り、足を擧て、其の溺苦の狀を爲し、永く汝の俳優の民たらんと誓ひたまひぬ。これ、後世まで傳はりし隼人の舞の濫觴なり。而して、隼人とは、火闌降命の御子孫にして、大隅薩摩に住む人々の總名なるが、此の族、中世まで交番して上京し、皇室守護の職となり、大嘗會などの式日には、隼人の舞を朝廷に奏す。其の舞の姿、裝飾はかの火闌降命が溺れ給ひし時の様子を真似るなり。

其の後の日本歴史にも、默舞の行はれしことを屢々記したり。其の樂多くは俗樂なれども、亦多少神聖的のものも少からず。

「神樂」に、對話の加はりしものは、即ち「能」にして、行脚の僧が、「平家」を語りしより發明せられたりといふ。且つ、「能」には、此の臆説を確かむべき用語多し。思ふに、「能」作者は、平家物語のみならず、源平盛衰記、太平記等をもよく研究せし人なること明白なり。

能の發明。

能の始り。

「能」は、第十四世紀より始まり、最初は純粹の神樂にして、専ら神を慰籍する爲に用ひられたるものにて、其の神社の縁起を奏したり。能役者は伊勢に三座、近江、丹波に三座、奈良に四座ありて、孰れも其の神社に奉仕したり。

室町の初、奈良の一座の幹事、結崎次郎清次、其の藝、將軍義滿の目に留りて、近習に招かれ、名を觀阿彌と賜ひ、西紀一千四百六年（應永十三年）五十二歳にて歿したり。此の觀阿彌は大和の小名なり、これ、能役者が社會に於ける地位の如何を察する上に於て、見通す可からざる事とす。是よりして、「能」は將軍家より特別の保護を受けることとなりたり。かの和歌が朝廷の保護を受けたるに比すべし。清次の長子元清繼ぎ、世阿彌宗全と稱し、又將軍の寵を受け、八十三歳にして一千四百五十五年（後花園天皇康正元年）に歿し、子孫長く將軍の寵恩を蒙りぬ。其の後、大關秀吉、亦甚だ之を好み、朝鮮の役、肥前名護屋に在りし時、歳五十を過ぎて、始めて、此の舞を學び、自ら其の役者を勤め、亦新に數曲を作らしめたりといふ。降つて、江戸時代に至れば、代々の將軍ども、大いに、心を此の藝に寄せ、遂に幕府の一式樂となしたるほどにて、弓馬の道を勵むべき武家の若衆等も之を修行したり。されば、「能」は現今なほ、前代に有せし人望は、悉くは之を失はず、東京、京都其の他の都會にて、觀世

「能」は將軍家の保護を受けたる有様は、之を、和歌が朝廷の保護を受けたるに比すべし。

「能」は武士に歡迎せられ、平民は其の趣味を解せざりき。

謡曲。

の子孫及び傳統者が之を演ずる時は、前の大小名及び其の舊臣等、相集つて之を觀覽す。而して、町人、百姓はもと、全く「能」の趣味は解せざりしなり。此頃出版したる、「能」の書物「謡曲通解」に載る謡曲の數二百三十五種の中、九十三種以上は、二代目の幹事世阿彌元清の作にして、十四は其の父觀阿彌清次の作、二十二種は元清が養子の作、其の他は夫々以後の幹事の作なりとす。而して、謡曲とは「能」に用ふる歌詞にして、舊くは「謠」と稱す。又、「能」無くして單獨に謠ふこともあり、之を素謠ソワガキと稱し、端座して、扇子を執つて謠ふなり。この謠の過半は第十五世紀に成る。

謡の作者。

「謡曲通解」の著者の臆説に曰く、清次・元清の名は、謠の作者としても有名なれども、其の實、彼等は、文句に節を附けて謠ふべく、舞ふべき様に作りしかりにて、歌詞の作者には非ざると云ひて、其の作者を、當時に於ける總ての文學の作者なる僧侶なりと推察す。併し、此の研究は無用なり、何となれば「能」の特色は個人の特色よりも、寧ろ一派の特色を具へたればなり。

さて、其の作者は誰にもあれ。謡曲の主眼は、信神の志を作興すると同時に、忠勇の精神をも鼓舞するに在り。而して、各篇其の材料は、主として神佛に縁ある昔譚に採

謡の本意。
謡曲に採用せる材料。

り、之を粧飾するに、天地自然の美觀を以てす。此の故に、此の劇に出づる主人公は、大抵僧侶或は聊宜なれば、其の應對振は即ち、僧侶或は神官風にして、罪障の事を演る時は必ず殺生戒、神社佛閣への念願祈誓、人世の無常、人事の須臾變轉等を以て好題目とす。

謡曲の文體。

宗教の次は、歌に關する研究なり。「謡曲」は歌にあらざることは確なり。尤も純叙情的文句は無きには有らねど、多からず。且つ其の句調の點より觀察する時は、「謡曲」は散文なることは明白。其の他七五調句の不規則に連絡して、詩的分子の少き歌文折衷の文體多し。漢語は、之を調和よく採用したれども、歌としての品位を減じたるにあらざると思はるゝ傾向あり。古來、和歌は、嚴しく漢語を排斥したる所以を憶へ。

「謡曲」の文體中、最も著しきものは、元來歌を作らんが爲めに工夫したる語句を濫用したるにあり。かの枕詞（前章既に之を論じたり。四六頁—五〇頁参照）は、屢々之を採用し、對句は、普通に使用して文を飾れり。然し、就中、最も好みて使用したるものは、かの所謂絡詞（Pivot word）なりとす。「謡曲」に此の詞を使用したることの夥しきは、前未だ曾て見ざる程なり。讀者よ、余は今更に、チェムパレン氏

謡掛の詞の文學的價值

が *Classical Poetry of the Japanese* にて論じたるものを引きて、此處に、此の詞に就いて聊か論ずる處あらんとす。氏は曰く、「そも〜絡詞は、一語にして兩義を有し、かの餘的、蝶番的作用をなす詞にして、前に在る歌詞の意味が、未だ論理的に結了せざる間に、後に在る歌句が既に非論理的に發生する作用をなし、前後の文意相連絡して纏綿盡さざるが故に、其の意味を解するも確固と解することを得ざるなり」と。又曰く、「英國人は必ず思はん、—斯の如き餘的蝶番的戲語の發明せられたるは、誤れるの甚だしきものなりと云はん。されども、斯かる詞より成れる歌より得る思想の印象は、日本人には非常に愉快なるは事實なり。これ、讀者の眼前に漠然たる優美にして餘情ある光景の行過するを以てなり。凡そ、古き歌劇風の文の特徴は、此の種の修飾語を使用したるに在り。之を使用したるが故に、其の研究は西洋人には殊に困難にして、其の劇の性質を十分評價すること能はざるなり」と。

日本人は、チェムパレン君の此の説を聞いて、面白しと批評し合ふべきこと疑を入れず。又日本人は、元來愉快なる人種なれば、斯くの如き輕業風の言葉を好むべし。併し、英人は問はん「斯かる浮きたる根無し詞の爲に、必要なる思想と句法とを、犠牲にするほどの理由、何處に在るか」と。是に於て、我敢て言はん「謡掛の詞

は、之を嚴格なる文章に用ふるは誤なり」と。又曰はん、「江戸時代に於て、淨瑠璃作者、小説家又はかの「能」の作家等が、區々なる此の文飾を偏愛せるは、たま／＼以て、當時の文學の衰へ、趣味の低まりし表徴にあらざらんや。さてこそ、新井白石・室鳩巢・本居宣長の如き人々は、全く之を忌みたるなりけれ」と。

さて「謡曲」の作者は、敢て自家の獨創を出さんと思はず、常に、有名なる古の詩歌・經文等、凡そ記憶に存する詩的文句の錦の繻を、此處彼處より引き描き來て、巧みに絡り合せたり。これ、此の作者の伎倆なりとす。凡そ日本人は、古來剽竊するをば尤めざる風あるに注意せよ。

「謡曲」は、古雅的歌にあらず。又、文章法上の明瞭・記述の整頓・事件の照應及び趣味の點に於て欠くる所無きにはあらねど、亦一種雜助の棄て難き所無きにもあらず。其の文、例の絡詞（言掛、序詞、縁語等）より成り、故事多くして意味難澁の點多けれど、讀者忍んで、其の絲の紛糾を解かば、豈に又多少の報酬あらざらんや。歌の格調は、元より、かの萬葉の純・古今の雅に如かざれども、傳説・想像・信仰心等の豐富なる點に於ては、彼の雅歌どもの到底同日に語るべきにあらず。たとへ、其の體、古歌に特有なる整正を、此の謡曲の中に見出すこと能はざらんも、事件の多種多様な

謡曲作者の綴文の伎倆。

謡曲の文の眞價。

るは、優に其の欠を補ふに足れり。惜いかな、斯ばかり有望なる文學の一萌芽の、遂に花咲き、實らずして、十六世紀以後には、新に栽培せられずなりしは惜しむべし。十六世紀以後、日本の上流人士の思潮の流は、佛教より儒教の方へ奔流し、従前の「能藝」は、昔ながらに、誦はれもし、演ぜられもせしかど、新作を出すが如き勢力は既に有らざりき。

「能」は演劇としては價值少し。取り出でて説明すべきほどの脚色も無く、研究すべきほどの趣向も事件も無く、何れの「能」も大抵左の如き趣向なり。即ち、

一人の僧、舞台に出て來り、「これは何の誰にて候ふ」と先づ我が名を名乗り、これより、諸國を行脚せんと告げ、程無く、寺院になり、古戰場になり、靈場などに到着し、古人の運命を悲み、末路を悼み、人世の果敢無きことなどを嘆きなどして、懐古の情に堪えざる處へ、忽然、亡魂、神佛などが、土地の古老、異人などの姿して現はれ、僧に其の地の往事を語り、尙一言二言の金句格言を交へたる後に引込む。僧は之を聞て、ますます感に堪えず、一心に其の跡を追弔し、會向するに、亡魂は當の人物となりて現はれ、其の當時の所作を示して、僧の法力によりて、初て此の世の迷執を晴らして解脱成佛すといふにあり。

「能」の趣向。

謡曲一篇の長さ。

謡曲の演ずる事件と時間、空間との関係。

而して、謡曲一篇の長さは、大和田氏の「謡曲通解」にて、六七頁以上を越ゆるは稀に、演技の時間は、通常一時間足らずとす。故に、斯く狭き範圍なれば、時間は同時間、場所も同じ場所、事件も同事件と早合點する人も有るならんが、何ぞ圖らん、事件には多少の連絡あれど、時間と空間との連絡は全く無視せられたり。

○謡曲通解に、時間空間のこと、大和田氏の論あり。

例へば、僅か七頁の「高砂」は、忽にして肥後より播磨・播磨より住吉に、其の場所を變ず。此の地實際の行程、健脚といふとも、數週日間を要すべきなり。

○曲通解總論に曰く、道行と稱へて、數十里の路程を僅々三行、四行、五六行の内縮め、千里も一步の旅情を寫し出す文句あり。その旅行者の豪情と經過する山川の風景を、挟み歌へる手際は、謡曲獨特の妙處と云はんも誦言ならざるべし。

「能」に要する役者は、二三人乃至五六人(三人なるが多し)にして、外に二三の樂人(即ち囃子方)と謡人(地謡)とあり。

○能役者は、一に仕手(爲手の意にして主人公となる役者)二に連(仕手連とも云ふ、主人公の副役なり。高砂の老翁は仕手、老翁は連なり)三に脇(仕手の客となりて、之を助くる役)四に脇連(脇の副なり)高砂の友成は脇にて他の官人は脇連なり。五に子方(小兒にする役。角田川の梅若丸、舟辨慶の義經など)六に間(狂言方の役)(舟辨慶の船頭の類)是等の役者はおのづから分業にして、互に相犯し、相助くる事なく、各自所持の詞を遣ひ且つ所作か爲す。尤もシテとシテツレとは無難し、ツキとツキツレとは兼業することもあり。シテは大夫とも云ふ、其一番の主人公たる役なり。一番の内始終一人一體なるもあり。一人なれども中入して装束を替へ、二體となるもあり。又は前と後と別人をあらはす事もあり。二度出づるをば、前を「前シテ」、後を「後シテ」と云ふ。

謡人の事業。

○囃子方は、能一番毎に、舞臺に出て並ぶ。一に笛方、二に小鼓方、三に大鼓方、四に大鼓方、の順序で、小鼓と大鼓は床几に掛り、他は下座す。但し大鼓は用ひる能と用ひざるとあり。(以上「謡と能」より採る。)

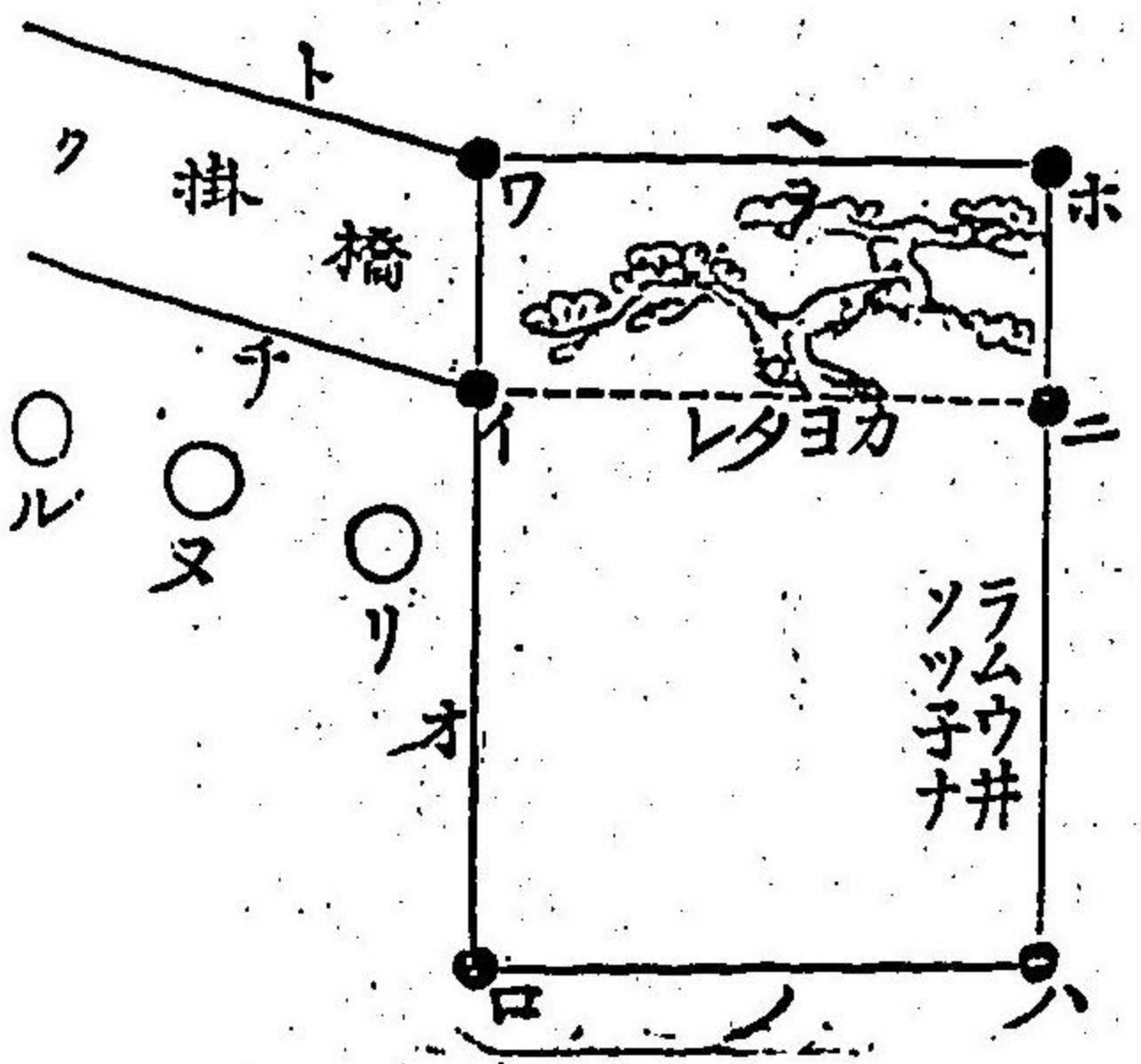
此の謡人の執る可き事業は、種々あり。先づ、一篇の梗概を謠ふこと、(是れはシエキスピアの古劇にもあり)、舞臺の背景に現はれる景色を説明するなどのことなるが、時々剴切なる、或は同情ある意見を吐露し、又は登場人物と對話することもあり。

次の一節は之をチェンバニン君の Classical poetry of the Japanese より採る。舞臺は、十五世紀上半期(足利時代)以來其の儘の木造なり。方形にして、一方塞り、三方は開けて柱を以て支ふ。柱と柱との間隔は凡そ十八呎ばかり。屋根の形は異風にして、やゝ寺院めきたり。渡廊(橋のこと)あり、廣さ九呎ばかり有りて、樂屋に通

謡の舞臺。

ず。劇の一部は此の渡廊の上に始まることあり。舞臺の奥の方、狭き場所には笛役一人、鼓役二人、太鼓役一人坐し、向つて右手には、謠人坐す。此の人数は一定せず。舞臺の塞がれし壁板には、古式のまゝの松樹を畫き、庭上には、例の如く、三株の小松を植え、舞臺の三方、屋根無し土間を隔て、見物人の席を設く、是れには屋根あり、かこひ有り。女子に扮し、化生に化くる時は、假面を被る。衣裳は非常に華麗たれど舞臺には背景無し。

○能の舞臺は、大和田氏の「謠と能」の説明は簡明なれば引用すべし。能を舞ふ場所を舞臺と云ふ。正式の寸法三間四方にして之に橋掛を附けたり。其の圖左の如し。



イの柱はシテ柱と稱ふ。シテの主所作をなす起點とも休點とも終點ともなる所なり。

ロの柱は月階柱として、シテの所作を爲すに、月を見るとき、雲を見るとき云ふ形をあらはす時を始とし、シテシテの目的として眼を注ぐ爲に使ふ場所なり。

ハの柱はマキ柱とも大臣柱とも稱へてマキの常に着席する處なり。

ニの柱は笛柱と稱ふ。笛吹の着席する所。道成寺の鐘を釣る綱などは此の柱にて控へおくなり。

ホは切戸と稱へて、地謡後見などの常に出入する口とす。

ハは舞臺の後方を仕切りたる板にて、之を鏡板と稱す。松を畫くが正式なり。

トは裏板とも羽目とも云ふ。橋掛の左手に當る樂屋の境なり。

チは橋掛の前面にして欄干あり。

リは一の松と稱ふ。シテの橋掛にて謡ひ出すは、多く之を目あてとす。

ヌは二の松、ルは三の松。

ナは横板と稱す。舞臺は壁に板を置きたれど、此所は横にしたればなり。

マは後見座と稱す。後見の着座する處なればなり。其の左の柱(正面より見て)を狂言柱と云ふ。間の役なる狂言師の着座する所なればなり。

カは笛の席。ヨは小鼓の席。タは大鼓の席。レは太鼓の席。ソツネアラムウキ等は地謡の席なり。

ノは正面にして、オは着席したるマキを正面に見る所なれば、脇正面と云ひ。又は横正面とも云ふ。クは上げ幕にて、幕の中を鏡の間と云ふ。シテの出づる時に姿を寫し見る鏡を置く。

請ふ、容易に察したまへ、「謠曲」の文を解することの甚だ困難なるを。かの博士

ミトノオールド君すら、其の Tales of Old Japan の中に、謠曲は完全に解することを

謡曲の文章は、完全に翻譯すること能はず。

得ずと云はれしにあらすや。但し君は、謡曲の趣向に關して、多く記述せられ居るを見れば、君の前言には、稍謙辭あらんも、「謡曲」の味を解したる君すら、此の翻譯の困難は未曾有のものなりしなり。余は思ふ、凡そ世界の文學中、正確に英譯せんと欲するに方り、「謡曲」ほど困難なるものの、又と有るべしや。謡曲には、網の如く紛糾せる言掛の詞あり、引歌あり、引句あり、歴史上の故事あり、文學上及び神儒佛道の故事あり、是等を如何にして譯すべきか。響きは、*チヤン、ハ、イ、ン、チン* 君も其の二三を英詩に譯して、只「能」の意譯に過ぎずと自狀せらる。左に、「高砂」の一部をば、散文とも云ふべき拙き無韻の詩に譯して示すべし。見らるゝ如く、詩に欠く可からざる形式に頓着なく譯したれども、尙思ふがまゝに精密に譯すること能はず。其上、譯し得べからざる文句は一切省きたり。併し、毫も私意を加へざらんと努めたり。

高砂

「高砂」は一千四百五十五年に歿したる觀世元清の作とすれども、元清は歌詞の作者にはあらずして、歌詞に節を附けて、舞ふ可く、謠ふべき様に整へし人なることは、既

高砂。

に世の定評なり。「高砂」は能の中にて、最も華かに、最も名高し。近年(一八九七)我がニューカッスルなるアームストロング會社にて建造せられたる日本の巡洋艦が、「高砂」と命名せられたるにても、*此レハ、その大なるを見るべし。*

高砂 (古名相生)

元清 作

ロキ次第「今をはじめの旅衣、日もゆくすまぞ久しき。國ともく是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり。われ未だ都を見ず候ふほどに、此の度思ひ立ち都に上り候ふ。又よき序なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ。道行旅衣、未はるくの都路を、けふ思ひ立つ浦の波。舟路のどけき春風も幾日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるくと。さしも思ひし播磨瀧、高砂の浦に着にけり。

シテッレ一壁「高砂の松の春風ふき暮れて、尾上の鐘もひびくなり。ツレ波は霞の磯がくれ、二人音こそしほの満干なれ。シテサシ誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならで、過ぎ來し世々は白雪の積りくして老の鶴の、ねぐらに残る有明の春の霜夜の起居にも、松風をのみ聞きなれて、心を友と管筵の思ひを述ぶるばかりなり。二人歌、おとづれば松に事問ふ浦風の、落葉衣の袖をへて、木蔭の塵を搔

前シテ 廻 翁
ツレ 住吉明神
後シテ 阿蘇の神主
ロキ 播磨
處は

かうよ。所は高砂の尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや。木の下蔭の落葉スかく、なるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所かな。マキ里人をあひ待つところに、老人夫婦きたれり。いかに是なる老人に尋ねべき事の候ふ。シテ爾こなたの事にて候ふか。何事に候ふぞ。マキ高砂の松とはいづれの水を申し候ふぞ。シテ唯今木蔭を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。マキ高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國をへだてたるに、何とて相生の松とは申し候ふぞ。シテ仰せの如く古今の序に、高砂住の江の松も、相生のやうに覺えとありさりながら、此の尉ビは津の國住吉の者、是なる姥ババこそ當所の人なれ。知事あらば申させ給へ。マキ不思儀や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國をへだてて住むと、いふはいかなる事やらん。マキうたての仰せ候ふや。山川萬里を隔つれども、互に通ふ心づかひの、妹脊の道は遠からず。シテまづ案じても御覽ミせよ。シテ高砂住の江の、松は非情の物だにも、相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを。マキいはれを聞けばちもしろや。マキさきに聞えつる、相生の松の物がたりと、所に云ひ置

くいはれは無さか。シテ昔の人の申ししは、是はめでたき世のためしなり。マキ高砂といふは上代の、萬葉集のいにしへのき。シテ住吉と申すは、いま此の御代に、住みたまふ延喜の御事。マキ松とは盡さぬ言の葉の、シテ榮えは古今あひ同じと。シテ御代とあがむるたとへなり。マキよくく聞けばありがたや。今こそ不寐不寐の日の、シテ光やはらぐ西の海の、マキかしては住の江。シテこは高砂。マキ松も色そひ、シテ春もマキのどかに、地四海波しづかにて、國も治ま

る時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生選の、松こそめてたかりけれ。
 ○マキ地誌が、此の處にて述ぶ小説は、日本の正式の祝言の席上、常に之を誦ふ。且つ席上に、鳥鳥といふ靈を飾る。これには松の樹が植え、樹下に尉尉緒二個の人形が、手に笏笏と筆とを携へたるを据う。即ち此の高砂を換したるなり。これは、日本の美術家が好んで製作する材料なり。

げにや仰ぎても、言言もちろかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君の恵みぞありがたき。マキ高砂の松のめでたきいはれ詳しく御ものがたり候へ。地地ククそれ草木草木心無しとは申せども、花實の時をたがへず。陽春の徳をそなへて、南枝花はじめて開く。シテ然れども此松は、そのけしきとこしなへにして、花葉花葉時を分かず。地地四つの時至りても、一千年のいろ雪のうちに深く、又

は松花の色十かへりとも云へり。シテかゝるたよりを松が枝の、地言の葉草の露の玉、心をみかく種となりて、シテ生きとし生ける物ごとに、地敷島のかげによるとかや。クキしかるに長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌に漏ることなし。草木土砂風聲水音まで、萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、秋の蟲の北露に鳴くも、みな和歌の姿ならずや。

中にも此の松は萬木にすぐれて、十八公のよそほひ、千秋の緑をなして古今の色を見ず。始皇の御爵にあづかるほどの木なりとて、異國にも本朝にも萬民之を翫賞す。シテ高砂の尾上の鐘の音すなり。地曉かけて霜は置けども松が枝の、葉色は同じ深みどり、立ちよる蔭の朝夕に、搔けども落葉の盡させぬは、誠なり松の葉の、散りうせずして色は尙ほ、正木のかづら長き世の、たとへなりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめてたき。

ロンギ地げに名を得たる松が枝の、老木の昔あらはして、この名を名のり給へや。シテ今は何をか包むべき。是は高砂住の江の、相生の松の精。地夫婦と現じ來りたり。地ふしぎやさては名どころの、松の奇特をあらはして、シテ草

木心無けれども、地かしこき世とて、シテ草も木も、地わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと夕波のみぎはなる、海人の小舟にうち乗りて、追風にまかせつゝ、沖の方に出てにけりや。沖の方にいてにけり。マキ歌高砂や、此の浦舟に帆をあげて、月もろともに出てしほの、波の淡路の島陰や、遠くなるをの沖すきて、はや住の江に着きにけり。

後シテわれ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松よく経ぬらん。むつまじと君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゝしめ給へ宮つこたち。地西の海、あをさが原の波間より、シテあらはれ出てし神松の、春なれやのこんの雪の朝香がた。地玉藻かるなる岸陰の、シテ松根によつて腰をすれば、廿千年の緑手に満てり。シテ梅花を折つて頭にさせば、地二月の雪衣に落つ。

ロンギ地ありがたの影向や。月すみよしの神遊び。御影拜むあらたきよ。シテげにさまぐの舞姫の、聲もすむなり住の江の、松蔭もうつるなる、青海波とはこれやらん。地神と君との道すくに、都の春にゆくべくは、シテそれぞ遠城樂の舞。地さて萬歳のシテ小忌衣。地さすかひなには悪魔を拂ひ、をさむる手には壽福

either when I rise or go to sleep in my nest of an aged crane, where the
 night-long moon sheds its rays, and the spring sends down its hoarfrosts. So
 I make my own heart my companion, and thus give utterance to my thoughts.
 BOTH. Let us sweep away the fir-needles that lie beneath the tree, sleeve
 touching sleeve of our garments, whereon rest fallen leaves shaken down by
 the shore-wind asking their news of the firs.

.....
 TOMONARI (*spoken*). While waiting for some of the villagers to appear, an
 old man and an old woman have come hither. I pray you, old people, permit
 me to ask you a question.

OLD MAN. It is I whom you address? What is it you desire to know?

TOMONARI. Which is the tree that is called the fir-tree of Takasago?

OLD MAN. This very tree whose shade we are cleansing is the fir-tree of
 Takasago.

TOMONARI. The phrase "growing old together" is used of the Takasago

and Suminoyo fir-trees. But this place and Sunniyoshi [the same as Suminoyo]
 are in provinces distant from one another. How then can they be called the
 fir-trees which "grow old together"?

OLD MAN. As you have deigned to observe, it is stated in the preface to
 the *Kokinshū* that the fir-trees of Takasago and Suminoyo make us feel as
 if they were growing old together. However that may be, here am I, an old
 man, who belong to Sunniyoshi, in the province of Settsu, while the old
 woman here is of this place. Be pleased to tell me, if you can, how that may be.

TOMONARI (*in verse*). Strange! I see you old couple here together. What
 mean you then by saying that you dwell apart, one in distant Suminoyo, the
 other in Takasago, divided from one another by seashore, hill, and province?

OLD WOMAN (*in verse*). What an odd speech! Though many a mile of
 mountain and river separate them, the way of a husband and wife whose
 hearts respond to one another with mutual care, is not far apart.

OLD WOMAN. There is Suminoye.

OLD MAN. And here is Takasago.

TOMONARI. The fir-trees blend their lincs.

OLD MAN. And the spring air——

TOMONARI. Is genial, while——

(Here the chorus strikes in with a canticle which is chanted as the indispensable accompaniment of every regular Japanese wedding, and is one of the best known passages in Japanese literature. Figures representing the two old folks under the fir-tree willb reoms in their lands are, on such occasions, set out on a sort of tray. This is a favourite subject of the Japanese artist.)

CHORUS. On the four seas

Still are the waves;

The world is at pence:

Soft blow the time-winds,¹

¹ The hard and sea breezes, which blow regularly only in fine weather.

Rustling not the branches.

In such an age

Blest are the very firs,

In that they meet

To grow old together.

Vain indeed

Are reverent upward looks:

Vain even are words to tall

Our thanks that we were born

In such an age,

Rich with the bounty

Of our sovereign lord.

• • • • •

OLD MAN. I hear the sound of the bell of Onoye, in Takasago.

CHORUS. The dawn is near,

And the hoar-frost falls
 On the fir-tree twigs ;
 But its leaves' dark green
 Suffer no change.
 Morning and evening
 Beneath its shade
 The leaves are swept away,
 Yet they never fail.
 True it is
 That these fir-trees
 Shed not all their leaves ;
 Their verdure remains fresh
 For ages long,
 As the Masaki trailing vine ;
 Even amongst overgreen trees—

The emblem of unchangeableness—
 Exalted is their fame
 As a symbol to the end of time—
 The fame of the fir-trees that have grown old together.
 TOKOKARI. And ye who have made known the bygone story of these ancient
 firs whose branches have indeed earned fame—tell me, I pray you, by what
 names ere ye called.
 OLD MAN AND OLD WOMAN. Why conceal it longer ? We are the spirits
 of the fir-trees of Takasago and Suminoye that have grown old together,
 manifested under the form of a married pair.
 CHORUS. Wonderful ! A miracle wrought by the fir-trees of this famous
 place !
 OLD MAN AND OLD WOMAN. Plants and trees are without souls—
 CHORUS. Yet in this august reign—
 OLD MAN AND OLD WOMAN. Even for plants and trees—

CHORUS. Good is it to live
 For ever and ever
 In this land
 Of our great sovereign,
 Under his rule.
 To Sumiyoshi,¹ therefore,
 He would now take his way
 And there wait upon [the god].
 He embarks in a fisher's boat
 That lies by the beach,
 Where the waves of evening roll,
 And spreading his sail
 To the favouring breeze,
 Puts out into the deep,

¹ Sumiyoshi means "dwell-goat."

Puts out into the deep.
 TOKONAMI. From Takusago I set sail
 In this skiff that lies by the shore,
 And put forth with the tide
 That goes out with the moon.
 I pass under the lee
 Of Awaji's shore,
 I leave far behind me Naruwo,
 And now I have arrived
 At Suminoye.
 (*The god of Sumiyoshi¹ appears, and enters into a poetical dialogue with the chorus.*)
 CHORUS. We give thanks for this manifestation;
 Ever anew we will worship
¹ There are in reality three gods. Doubtless only one appears on the stage.

Thy spirit with sacred dance
By Suniyoshi's pure moonlight.

Chorus. And now, world without end,

The extended arms of the dancing maidens

In sacerdotal robes

Will expel noxious influences;

Their hands folded to rest in their bosoms

Will embrace all good fortune;

The hymn of a thousand autumns

Will draw down blessings on the people,

And the song of ten thousand years!

Prolong our sovereign's life.

And all the while,

¹ Equivalent to our "God save the Queen."

The voice of the breeze,

As it blows through the firs

That grow old together,

Will yield us delight.

「能」の中には、其の科白が高砂よりも、やゝ演劇的なるあり。チェンバレーン君が譯したる「仲光」の一篇の如きは、それにして、又「唐船」も其の類なり。今、この梗概を左に記さん。

「唐船」の梗概。

九州箱崎の住人に某といふもの有り。十三年以前日本支那の兩國間に船舶上の争論起りて日本にては、支那の船舶を拘留し、支那にては日本船を拘留することゝ成りし時、何某も支那の商船一艘を拘留し、捕虜の一人なる祖慶官人と云ふ者を奴僕として、牛を飼はしめたり。然るに、祖慶官人が國に遣し、二人の子、父を購はんとて來朝したり。何某之を許す。父子大によろこび、三人今や舟出せんとす。其の時、日本にて生みし二人の子、袂に縋りて従ひ歸らんと云ふ。何某之を許さず。父は、支那にての子と歸國せんことを欲し、又、日本にての子を振り棄てんことの悲しくて、とや

「道成寺」の梗概。

かくと心を苦しめたる末、身を海に投げんとするなど、父子の情の憐れを感じて、遂に許して悉く歸らしむといふ趣向なり。(譯者は、事の序に、仲光、唐船の二篇を掲載すべし)

「道成寺」——是は、一人の僧來つて「當寺には、撞鐘久しく中絶せしが、此の頃、新に鑄させられたれば、供養させん」と云うて、伴僧に其の準備を命じ、且つ式場には決して婦人を近づく可からずと命ず。

然るに、一人の白拍子來て、式場にて一さし舞ひたしと請ふ。伴僧先きの命令をも忘れて、舞はしむ。白拍子立ち舞ふ風に見せつゝ、飛び附いて、龍頭に手をかけて其の鐘を引被る。先の長老其の報を得て大に驚き、驅け來りて、伴僧どもを集めて、先きに「婦人を近づくること勿れ」と命じたる理由に關する苦譚を爲す。

昔譚終つて、長老は伴僧どもと共に、丹精を籠めて祈禱せしに、佛力にて、鐘は再び元の處に、自ら釣り揚り、白拍子は大蛇と成りて烟を噴き、近所の河に躍り入る。僧ども満足して退場。(譯者は又左に之を掲ぐ)

道成寺

清次作

前シテ 白拍子

ワキ詞「是は紀州道成寺の住僧にて候ふ。扱も當寺に在りてさる子細あつて、人

後シテ
ワキ 道成寺の僧
ツレ 同
狂言 能力
處は 紀伊

しく撞鐘退轉仕りて候ふを、此の程再興し鐘を鑄させて候ふ。今日吉日にて候ふ程に、かねの供養をいたさばやと存じ候ふ。いかに能力。はや鐘をば鐘樓へ上げて有るか。狂言さん候ふはや鐘樓へ上げて候ふ御覽候へ。ワキ「今日鐘の供養をいたさうするにて有るぞ。又さる子細有る間女人禁制にて有るぞ。かまひて一人も入れ候ふな。其分心得候へ。狂言「畏つて候ふ。

シテ次節「つくりし罪も消えぬべし。鐘の供養に參らん。サシ「是は此國のかたはらに住む白拍子にて候ふ。扱も道成寺と申す御寺に、鐘の供養の御入り候ふ由申し候ふ程に、唯今參らばやと思ひ候ふ。歌「月は程なく入りしほの、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺に着きにけり。詞「急ぎ候ふ程に、日高の寺に着きて候ふ。やがて供養を拜まうするにて候ふ。

狂言「シカ〜。シテ「是は此國のかたはらに住む白拍子にて候ふ。鐘の供養にと舞をまひ候ふべし、供養ををがませて賜はり候へ。

狂言「シカ〜。シテ「荒うれしや涯分舞をまひ候ふべし。うれしやさらば舞はんとて、あれにまします宮人の、烏帽子をしばし假に着て、既に拍子をすゝめけり。次節「花の外には松ばかり。暮れそめて鐘や響くらん。ワキ「道成の御承り、始

めて伽藍橋の、道なり興行の寺なればとて、道成寺とは名づけたりや。

地「山寺のや。ッ」春の夕ぐれきてみれば、地、入相の鐘に花を散りける。ッ「さるほどに寺々のかね、地、月落ち鳥鳴いて霜雪天に、みちじほほどなくひたかの寺の、江村の漁火愁に對して、人々眠ればよき障ぞと、立ち舞ふ様にてねらひよりて、つかんとせしが、思へば此鐘恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし、ひさかづきてぞ失せにける。

狂言「シカ」。ッ「國」言語同斷。かやうの義を存してこそ、困く女人禁制のよし申して候ふに、曲事にて有るぞ。のうく皆々かく渡り候へ。此鐘に付て女人禁制と申しつるいはれの候ふを御存じ候ふか。ッ「いや何とも存せず候ふ。ッ「さらば其謂を語つて聞かせ申し候ふべし。ッ」戀に御物語り候へ。ッ「むかし此所に、まなごの庄司と云ふ者あり、彼者一人の息女をもつ。又其頃奥より熊野へ參詣する山伏の有りしが、庄司がもとを宿坊と定め、いつも彼所にきたりぬ。庄司娘を寵愛の餘りに、あの客僧こそ汝がつまよふよなんと、戯れしを、をさな心に誠とおもひ年月を送る。又或るとき彼客僧庄司がもとに來りしに、彼女夜更け人しづまつて後、客僧の間にゆき、いつまでわらはをばかくて置き給ふ

ぞ。急ぎむかへ給へと申し、かは、客僧大きにさわざ、さあらぬよしにもてなし夜にまされ忍び出で此寺にきたり、ひらに頼むよし申し、かは、隠すべき所なければ、つき鐘をふるし其うちに此客僧を隠しおく。扱彼女は山伏を、のがすまじとて追つかくる。折節日高川の水以ての外に増りしかば、川の上しもをかなたこなたへはしりまはりしが、一念の毒蛇と爲つて、河を易々とおよぎこし此てらにきたり、こゝかしこを尋ねしが、鐘のありたるをあやしめ、龍頭をくはへ七まとい纏ひ、煽を出だし尾を以てたゞけば、鐘はすなはち湯となつて山伏をとりをはんぬ。なんぼう恐しき物がたりにて候ふぞ。ッ「言語同斷。かゝる恐しきおん物語こそ候はね。ッ「其時の女の執心残つて、また此鐘に障得をなすと存じ候ふ。我人の行功も、かやうのためにこそ候へ。涯分祈つて此鐘を二度鐘樓へ上げうするにて候ふ。ッ「尤しかるべう候ふ。ッ「水かへつて日高川原の眞砂のかずはつくるとも、行者の法力つくべきかと。ッ「みな一同に聲をあげ、ッ「東方に降三世明王。ッ「南方に軍荼利夜叉明王。ッ「西方に大威徳明王。ッ「北方に金剛夜叉明王。ッ「中央に大日大聖不動。地、うごくかうごかぬかさつくの、曼荼羅三曼多囉日羅南。旋多麻訶嚕遮那娑婆多耶咩多羅叱干給。聽我説者得

大智慧。知我身者即身成佛と。今の蛇身を祈るうへは。ヤキ何のうらみかあり明の、つさがねこそ、地すはく動くを祈れたと、ひけやてんでに千手の陀羅尼。不動の慈救の傷。明王の火焰の、黒烟を立てしを祈りける。いのり祈られつかねど此鐘ひびきいて、ひかねど此鐘をどるとぞみえし。程なく鐘樓に引きあげたり。あれみよ蛇體は顯はれたり。地謹請東方青龍清淨。謹請西方白體白龍。謹請中央黃體黃龍。一大三千六千世界の、恒沙の龍王あいみん納受。哀愍自體のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈りのられかつばとまるぶが、又あきあがつて忽に、かねに向つてつく息は、猛火と爲つてその身をやく。日高の川渡深淵に、飛んでぞ入りにける。望み足りぬと驗者達は、わが本坊にぞ歸りける。

唐船 (古名 祖慶官人)

吉 廣 作

シテハ 祖慶官人
子方ハ 唐子二人
同 日本子二人
ヤキハ 箱崎某
處ハ 筑前

ヤキ詞かやうに候ふ者は。九州箱崎の何某にて候ふ。扱も一年唐土と日本の船のあらそひあつて、日本の船をば唐土にとりめ、唐土の船をば日本にとりめ置きて候ふ。某も船を一艘とりめ置きて候ふ、其船に祖慶官人と申す者とりめ置きて

候ふが、はや十三回に爲り候ふ。某は牛馬をあまた持ちて候ふ程に、彼の祖慶官人に申しつけ、野飼をさせ候ふ。今日も申しつけばやと存じ候ふ。

唐子二人一盤、唐土船の楫枕、夢路ほどなき名残かな。ソシ、サシ、是は唐土明州の津に、そんしそいと申す兄弟の者なり、二人扱ても我父官人は、一年日本の賊船にとらはれ、昨日今日とは思へども、十三回に早なりぬ。餘りに父の戀しさに、いまだ此世にましまさば、今一度對面申さんと、歌思ひ立つ日を吉日と、船の纜解き始め、明州河を押し渡り、海漫々と漕ぎ行けば、はや日の本もほの見えて、心づくしの果てにある、忍びし妻を松浦瀉。波路はるかに行く程に、名にのみ聞きし筑紫路や、箱崎に早く着きにけり。

ヤキ詞「唐土の人のわたり候ふか。ソシ、サシ、是に候ふ。祖慶官人いまだ存生にて、箱崎殿に召し使はれ候ふ由承り候ふ程に、數の寶に換へつれて歸國仕るべき爲に、唯今此所に渡りて候ふ。ヤキさん候ふ祖慶官人は未だ存生にて候ふ、唯今物語とて御出で候ふ、暫くそれに御待ち候へ。御歸り候はゞ引き逢はせ申し候ふべし。ソシ、サシ、是にて待ち申さずるにて候ふ。

ソシ、サシ、如何にあれなる童部ども、野飼の牛を集めつゝ、早々家路に急ぐべし。

日本子二人「かゝる業こそ物うけれ。シテ」よし我のみか天の原、一瞥七夕の、たとへにも似ぬ身のわびの、三人「牛牽く星の名ぞしるさ。子二人」秋咲く花の野飼こそ、三人「老の心のなぐさめなれ。シテ」是は唐土明州の津に、祖慶官人と申す者なり。我はからざるに日本に渡り、牛馬をあつかひ草刈笛の高麗唐土を名にのみ聞きて過ぎし身の、あら古郷戀しや。

國「かくて年月を送る程に二人の子を持つ。又唐土にも二人の子あり。彼等が事を思ふ時は、それも戀しく、又これもいとほしく。一方ならぬ箱崎の、二人の子供なかりせば、老木の枝は雪折れて、此身の果ては如何ならん。地あれを見よ。野飼の牛の聲々に、子故に物や思ふらん。况んや人倫に於てをや。我身ながらも愚なり。いさや家路に歸らん。

ロンギ日本子二人「如何に父御と聞こしめせ。扱住み給ふ唐土に、牛馬をば飼ふやらん御物語り候へ。シテ」中々なれや唐土の、華山には馬を放し、桃林に牛をつなく。是れ花の名所なり。子二人「さて唐土と日本の本は、いづれまさりの國やらん。委しく語り給へや。シテ」愚なりとよ唐土に、日の本をたとふれば、唯今尉が牽いて行く。九牛が一毛よ。子二人「さほど樂しむ國ならば、痛はしやそこそ實に、戀しく

思し召すらめ。シテ「いやとよ方々を、設けて後は唐衣、歸國の事も思はずと。地」語りなくさみ行く程に、嵐の音の少なさは、松原や末になりぬらん。箱崎に早く着きにけり。

「シテ」國「いかに祖慶官人、何とて遅く歸りてあるぞ。シテ」國「さん候ふ餘りに多き牛馬にて御座候ふ程に、さて遅く罷り歸りて候ふ。ヤキ」尤にて候ふ。又尋ねべき事の候ふ隠さず申すべきか。シテ「是は今めかしき事を承り候ふ物かな。何事にてもあれ申し上げらざるにて候ふ。ヤキ」扱御事は唐土に二人の子を持ちてあるか。シテ「さん候ふ子を二人持ちて候ふ。ヤキ」其名をそんしという申すか。シテ「あら不思議や、何とて知ろしめされて候ふぞ左様に申し候ふ。ヤキ」其そんしという、汝未だ存生の由を聞き。數の寶に易へつれて歸國すべき爲めに、只今此所に渡りて候ふ。シテ「是は思ひもよらぬ事にて候ふ物かな。扱其船はいづくに御座候ふぞ。ヤキ」此方へ來り候へ、あれにかゝりたる船こそ、彼兩人の船にて候へ。シテ「實にこれは某が船にて候ふ。シテ」むらば對面し候へ。シテ「餘りに見苦しく候ふ程に、引き續ひて、賜はり候へ。ヤキ」心得申し候ふ。

シテ「國」やあいかにあれなるは唐土にとりめ置きたる二人の者か。唐子二人「さん

候ふ童名ワラワラそんなしうなり。シテ「是は夢かや夢ならば、唐子二人所は箱崎、シテ明けやせん。地チ春宵一尅其の價、千金も何ならず。子ほどの寶タカラもあらじ。唐土は心なき、えびすの國と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと、日本人ヤマトビトも隨喜せり。尊とや箱崎の、神も納受し給ふか。

シテ「如何申し候ふ。追風がおりて候ふ急ぎ御船に召され候へ。シテ圖エいかに箱崎殿へ申し候ふ。追風がおりて候ふほどに船に乗れと申し候ふ。御暇申し候ふべし。ヤキ「めでたうやがて御歸國候へ。日本子圖エあら悲しや我等をもつれて御出て候へ。シテ「げに〜出船のならひとてはたと忘れてあるぞ此方へ來り候へ。ヤキ「暫く。祖慶盲人の事は力なき事。此のをさなき者どもは、此所にて生まれ相續の者にて候ふ程に、いつまでも某召し使はうするにてあるぞ。此方へ來り候へ。日本子「あら情なの御事や、大和撫子の花だにも、同じ種とて唐土の、唐紅に咲く物を、うすくもこくも花は花、情なくこそ候へとよ。唐子「時刻うつりて叶うまじ、急ぎ御船に召されよと、はや纜ワタを疾く〜と、シテ「呼ぶ子もあれば、日本子」とりともる、シテ「中にとりまる、唐子「父ひとり、地チたづきも知らず泣き居たり。身もがな二の箱崎の、恨めしの心づくしや。たとへば親の子を思ふ事、人倫に限らず、燒

野の雄夜の鶴、梁の燕も、皆子故こそ物思へ。

クキ「况んや我らさなきだに、明日をも知らぬ老の身の、子故に消えん命は、何中々に惜しからじとシテ「今は思へばとにかくに地チ船に乗るまじとまるまじと殿イハにあがりて十念し、既にうき身を投げんとす。唐土や日の本の、子供は左右に取りつきて、これを如何にと悲しめば、さすが心もよわくと、爲り行く事を悲し

マキ圖エよく〜物を案ずるに、物のあはれを知らざるは、唯木石キゼキに異ならず。殊更出船の際なれば、はや〜暇とらするぞ。とく〜歸國キクニを急ぐべし。シテ圖エ餘りの事の不思議さに、更に誠と思はれず。ヤキ「こはそも何の疑ぞや。當社八幡も御知見ミタメあれ。偽り更にあるべからず。とく〜船に乗り給へ。シテ「これは誠か。ヤキ「中々に。地チありがたの御事や。誠マコトに諸天納受して、此子を我等にあたへ給ふかありがたや。斯くて餘りの、うれしさに、時刻をうつさず暇申して唐人カヘは、船にとり乗り押し出だす。悦びの餘りにや、樂を奏し舟子ども、棹のさす手も舞の袖スベテをりから波の鼓の、舞樂につれて面白や。陸ウチには舞樂に乗じつゝ、名残ナノゴトとして海面ウミ遠く、なりゆくまゝに、招くも追風オヒカゼ。船には舞の、袖の羽風も追風オヒカゼとやな

らん。帆を引きつれて舟子どもは、悦び勇みて唐土さしてを急ぎける。

仲光 一名満仲 元 清 作

シテ 藤原仲光
ツレ 多田満仲
子方 美女丸
同 帝尊
ソキ 恵心僧都
處 攝津

シテ「是は多田の満仲に仕へ申す、藤原の仲光と申す者にて候ふ。扱も御子美女御前は、あたり近き中山寺に登せまかれ候ふ所に學問をば御心に入れ給はず、明彦武勇を御嗜み候ふ由聞しめされ、以ての外の御憤りにて、某に罷り上り御供申せとの御事にて候ふ程に、今日中山寺へ参り、美女御前を御供申し、只今御所へ参り候ふ。如何に申し上げ候ふ。美女御前を御供申して候ふ。満仲圓、いかに美女、久しく寺より呼び下さるは、學問能くせよとなり。まづ御經聽聞せんと、紫檀の机に金泥の御經、それ讀誦し給へと、美女が前にぞさし置きたる、美女は父御の仰せに付きても、住むかひもなき淺香山、手習ふことも無かりしかば、ましてや御經の一字をだに、讀まざりければ今更に、涙に咽ふばかりなり。満仲圓實に満仲が子なれば、一寺の賞齋隙を得ず、御經よまぬは理なり。さて歌は、美女讀み得ず候ふ。満仲管絃は、と問へどもいはぬ口オしの、地こはたが爲めなれば、父がさしめに云ひし事に、跡をつけぬ庭の雪、人に見せんもなながしが、子と

いふかひも無かるべしとて、御佩刀を取りたまへば、走りいづるや仲光が、中にて兎角御袖に、取り付きすがり申しつゝ、危き美女御前の、御身の程ぞいたはしき。

満仲圓「いかに仲光、心をしづめて聞き候へ。子供を寺へ登せよは、學問の爲めにてこそ候へ。明彦武勇をたしなまんには、寺に置きてのかひは何事ぞ。シテ圓、御誼尤にて候ふ、さりながら、折々の御折檻にてこそ候へ。先々御佩刀を賜はり候へ。満仲所詮美女を討つて参り候へ。さなきものならば、明神氏の神も御知見あれ。仲光共にそのまゝには置くまじきぞ。シテ何事も御誼をば背き申すまじく候ふ。まづ御内へ御入り候へ。

シテ「言語道断、以ての外の御怒にて候ふ。御呵あるべきとは存じ候へども、かほどまでとは存ぜず候ふ。いやく何と仰せ候ふとも、一まづ落し申さばやと存じ候ふ。いかに申し上げ候ふ、只今は餘りの御怒にて、某も迷惑仕りて候ふ、美女如何に仲光、只今自を逃しつるは、仲光が制するによれり、美女を討つて参らせと怒りたまふを、我物ごしに聞きしなり、はや自か首を取り、父御の御目にかけて候へ。シテ二げにげに健氣なる事を仰せ候ふものかな。所詮何と仰せ候ふとも、一まづ落し申さざるにて候ふ。いや、何と申すぞ、又御使の立ちたると申すか、あら笑止

や。扱何と仕り候ふべき。げにや何事も報い有りける憂き世かな。阿闍世太子は頻婆娑羅を害せずや。是れ皆宿縁かくの如し。美女過去にてなせば、シテ「現世にやがて、地報いは人の谷ならじ。只自がなすところを、愚にや恨みある、憂き世の中と思ふらん。たがひに憂き事を、語りかたれば時うつる。はや首とれや仲光と、言の葉も涙も、すゝむこそ悲しかりけれ。

シテ「阿はれ某御年の程にて候は、御命に代り候はんずるものを、惜しからぬ命もことによりて、心にまかせぬ口をしさは候ふ。幸齋「いかに父上、只今の御言葉こそ、幸齋が耳にとまりて候へ。早や自が首をとり、美女御前と仰せ候ひて、主君の御目にかけれ候へ。シテ「何と申すぞ。美女御前の御命に代らうずると申すか。さすが仲光が子にて候ふ。げに〜汝が首をとり薄衣につしみ、夜まぎれに違々と御目にかくるならば、さすが親子の御事なれば、よもさだかには御覽じ候ふまじ、さらば御命に代り候へ。時刻移りて叶ふまじと、太刀をつ取つて仲光は、我子の後に立ちよれば、美女、美女は餘りの悲しさに、仲光が袂にすがりつゝ、たとひ幸齋を失ふとも、共に自害に及ぶべしと、泣きかなしみて制すれば「シテ」のうぢ主の命に代る事、弓矢取る身の習ひなり。美女、悲しやな互に争ふ命のきは、幸齋、幸

齋もすゝみ、美女も立ちよる。幸齋「かなたは主君、シテ「此方は思ひ子。美女「中にてなかく、シテ「仲光が地、身は是程に惜しからじ。何とかせましとやあらんと、猛き心にも、弱り果てたるけしきかな。

美女「親にだに、惜まれぬ身を何とたど、かく思ふらん中々に、情のつらき如何ならん。幸齋「情は人の爲ならじ。今此きはの御命に、代り申さずば、弓矢の家の名ぞ惜しき。地「かなたこなたも幼き、御身にだにも理の、あるは主子は惜し。主君をばいかて手にかげんと、心よわしやしらま引、ゆん手に有るは我子ぞと、思ひ切りつゝ、親心の、問討に現なき、我子をゆめとなしにけり。狂言「シカ〜。シテ「「げに〜汝が申す如く、某が心中さつし候へ。又美女御前を御供申し、何方へも立ち退き候へ。

シテ「如何に申し上げ候ふ。美女御前を討ち奉りて候ふ。満仲「いしくも仕りたるものかな。さこそ最期の未練に有りつらん。シテ「いやさは御座なく候ふ。某太刀抜き持つて、少しためらひ候ふところに、やあいか仲光おくれたるか、是を最期の御言葉にて候ふ。満仲「いかに仲光、おこと存じの如く、總じて美女ならて子と云ふ者なし。今日よりしては汝が子の幸齋を一子と定むべし。急いで呼び

だし候へ。シテ其御事にて候ふ。美女御前の御別を悲しみ、元結切り暮に失せて候ふ。同じくは仲光にも御いとま賜はり候へ。様替へばやと思ひ候ふ。満仲、心強くは云ひつれども、さぞ思ふらん美女丸をも、我子の如く手馴れしに、二人の者に別るゝ思ひ、地よしや王土にすむ習ひ、貴命は誰ものがれぬぞと、仲光をとにかくに、すかし給ふぞよしなき。げにや親子の道なれば、あはれとや又思ふ子の、跡とふ法の事業を、營み給ふあはれさよ。

ワキ「是は比叡山惠心の僧都にて候ふ。扱も去る子細候ひて、只今多田の満仲の御所へと急ぎ候ふ。先々此方へ渡り候へ。いかに案内申し候ふ。シテ阿誰にて渡り候ふぞや、惠心の僧却の御下向にて御座候ふよ。ワキ「いかに仲光、扱も幸壽が事は候ふ。まづ某が参りたる由御申し候へ。シテ心得申し候ふ。如何に申し上げ候ふ。惠心の僧都の御出にて候ふ。満仲「あら思ひよらずや。先々此方へと申し候へ。シテ長つて候ふ。此方へ御入り候へ。ワキ「心得申し候ふ。満仲「さて只今は何の爲の御いてにて候ふぞ。ワキ「さん候ふ只今参る事餘の儀に非ず。美女御前の御事を申さん爲に参りて候ふ。満仲「その事に候ふ。餘りにふしぎの者にて候ふ程に、仲光に申し付け失ひて候ふ。ワキ「其事にて候ふ。まづ御心をしづめてさこ

しめされ候へ。美女御前を失ひ申せとの御使しきりなりしに、仲光心に思ふやう、いかに三世の主君を手に懸け申すべきと思ひ、我子の幸壽が首を切り、美女と申して御用にかけて候ふ。されば我子に代へて思ふ程の、美女御前の御不審免しをはしませと、美女を引きぐし満仲の御前にこそ参りけれ。満仲「さればこそ猶未練なる美女なりけり。幸壽を殺さば諸共に、などや自害に及ばざる。ワキ「いや、諸事をさし置きて、幸壽が御事と思しめし、美女を助けてたび給へと。涙を流し申しければ、地、猛さ心もよわくと、はや領掌を申しけり。仲光朗餘りのうれしさに、御盃や菊の酒、仙家に入りし身の、七世の孫に逢ふ事も、たとへならずや親と子の、一世のちぎりの二度逢ぞうれしき。シテ「親子鸚鵡の盃の、いく久しさの酒宴かな。ワキ「いかに仲光、目出度き折なれば、一指御舞ひ候へ。地「いく久しさの酒宴かな。シテワキ「鴛鴦の、友なき水にうきしづみ、地「下安からぬ思ひこそあれ。シテ「あはれやげに我子の幸壽が有るならば、美女御前と合舞せさせ、仲光手拍子囃し、只今の涙を感涙と思は、いかにはうれしかるべき。地「思ひは涙、よそめは舞の手、交るは袖の、上露も下露も、おくれ先だつ憂き世の習ひ、昨日は嘆き、今日はよろこびの都にかへる。是までなりと惠心の僧都は、美女を伴ひ歸りければ、

仲光も遙にわきごしに参り、此度の御ふしん人爲ヒトナガにあらず、かまひて手習學問ねんごろにあはしませと、御暇申して歸りけるが、無慙や幸壽が御供ならばと、しばしは御輿オケコを見送り申して、うちしをれてごごまりける。(譯者云ふ、是れは、引かずともと思ひしが、次編徳川時代の處にも、仲光のこと有る故序に引く)

狂言。

「狂言」——「能」は、直正の演劇に對して「狂言」なるが如く、「狂言」は「能」に對しての「狂言」にして、「能」を演ずる時、「狂言」として、其の舞臺にて演ぜらる。

「狂言」には、諸役無く、又對話は當時の純口語なる點に於て「能」と異なるが、其結構も亦「能」よりも簡短にして、甚だ疎略なり。

「狂言」五十番は、「狂言記」として出版せられたり。余が手許にある寫本は、狂言五十番を集めたり。

(譯者云ふ、「狂言」については、今少し論ぜざるべからず。芳賀博士の著「國文學歴史代選序論の狂言部を借用すべし」)

猿樂の能と離るべからざる關係あるものは能の狂言なり。猿樂の名已に中古の物語に見えて滑稽の所作を意味し、神社に奉仕せし猿樂の人が猿樂の能の役者となりし歴史より察すれば、猿樂の名はむしろ狂言に屬すべきものにして、後に發達せる能樂の爲

にこの名を奪はれたるものといふべし。しかも能樂發達の後と雖も尙之と密接の關係を有し、今日に至るまで能樂興行の際には必ず其中間に狂言を務むる定なり。この點に於ては以太利のインターセシオの如き性質あり。「方能樂の悲劇的なるに對して、喜劇的性質を帯びたる狂言が其中間に挿まれ、相錯綜して一日の歡を感ぜしむるは面白き對照といはざるべからず。然れども狂言はあくまで能樂の附屬物の如き位置に落ちたるは、その性質上及び事實上よりしかあるべき勢あればなり。蓋し能樂に於ては古英雄古美人を材料として、懐古の情を起さしめ、神明佛陀の功驗を示して神々しさ、いやちこさを感じしむるに反し、狂言に於ては無學なる大名、破戒の僧、似非修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足ればなり。又謠曲は古來の古歌古句を引用し、佛典の教義を説き、章曲に於ても大に學者的なるに反し、狂言は當時の平話を以て之を綴り、章句の上にも學識を要せず。又この章曲を歌ふにも謠曲は音樂的リズムを踏んで曲節に合はせざるべからず。狂言はもとより此事なし。舞臺に於ても能樂は希臘の古劇の如く舞方の上手は即ち役者にして、役者としての技術には専門の技術を要すること甚だ大なり。加之狂言は比較的單純なり。又能の數番の中間に於て、役者の休息の爲、又は

扮装を直すのが爲に狂言を挿入せる事あり。間の狂言の如きは前シテ後シテの間にも用ゐらるゝ如き情態なるを以て勢能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。希臘の古劇を察するにも喜劇悲劇の根本は相同じきが如く、我國の能樂狂言亦神事に起因して、兩面に發達せしこと甚だ相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言は永く能樂の附庸となり、文安田樂能記、糺河原勸進能記等に於て早く已に能樂の間々に演ぜられたるを見る。だゞその當時の言語を以て記して、全文悉く對話より成り、毫も他の文を挿まざるは謠曲に比して、一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世脚本の根源をなせりといふべし。

想狂言の作者及び製作の年代等の不明なるはなほ謠曲の如し。全篇一律にして大抵同一模型の蹈襲なること一時の製作に非ずして、時代を逐うて漸次に増加せしならんと想像し得べき事亦相同じ。而して其國民間に流布せる傳説を本とせるに於ても亦兩者相似たり。但し謠曲は英雄高僧等の偉人傳説に基づけるもの多く、狂言は單純なる童話を資料とせること相違の點とす。即ち謠曲はザークを根本とし、狂言はメルヘンを基礎とせる觀あり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、謠曲に擬して滑稽を仕組みたるもの尠からず、通關の如き、老武者の如き、若市の如き、その適例といはんか。通關は

滑稽。

宇治の茶坊主なれば頼政に似せて作りたる也。老武者も若市も修羅能に擬して作れる也。一種のパロディなり。「このわたりの愚僧なり」と名告らせ、貝をも持たぬ山伏の道に嘘を吹かうよ」と云ふ如き、謠曲の模倣に非ざるはなし。舞容も科白も謠曲に於ては尊崇莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕快飄逸を目的とす。この對照ありて能樂の全美をなすなり。これその相更代して、一日の歡を悉さしむる所以なり。

謠曲に通ぜる特性は説教なり、教訓なり。佛陀神明に關し、歌道古實に關し、その他一草一木の由來縁起をも叙べて街學的に、説明的なるは前に詳論したるが如し。狂言はむしろ之を知らざるを以て滑稽とす。之を知らざるべからざる人にして知らざるを以て滑稽となせるなり。大名にして古歌朗詠の心得もなく、連歌茶道の嗜もなく、武道をも知らぬは甚だしく不似合の事として笑ふに足るなり。大名知らずして冠者かへつて之を知り、亭主知らずして女房かへつて之を知るといふ顛倒は即ち可笑の源なり。僧侶の佛法を知らざるが如きも同じ。萩大名、岡太夫、秀句大名、船ふな、あかじり、鷄立の江、松樫葉、逃歌百姓、三人百姓、忠度の類皆是なり。盜取に關するものは、すべて舞の儀式を知らざるを滑稽とし、其類多し。換言すれば一方に於ては高貴なるもの、無學を笑ひ、一方に於ては却つて匹夫下郎の之を知るを以て滑稽とし、物の争を決するや一首

の歌を以てすることあり。即ち表面より當時の、術學的、氣風は認むべきなり。儀式を貴び、古實を重んじたる風は、御取狂言の外、鱈庵丁等之を證し、從つて系圖立てのやかまじさを示すものは、酢蟹、牛馬、鞆鼓炮礮、膏藥練等いづれも系圖由來を説きて是非曲直を定むる標準とす。秘傳秘事を重んじたるは文相撲の如き、粟田口の如き、料理舞の如きを以て之を知るべし、これ等はすべて近古文學の通有性にして、狂言はこれ等を以てすべて滑稽の資料となせり。煩瑣たる歌學、故實一切の秘傳秘事は皆嘲笑の材料に取られたるなり。この見方よりすれば、狂言は正しく一種の諷刺的文學の性質を帯びたりといふべし。滑稽と諷刺とはもとより甚だ相近きものなればなり。

無學、無風流、健忘、臆病、無藝、無智等は大名の特性としてあらはされ、横着、怠惰、狡猾、辯口等は冠者の常態として示さる、僧侶は破戒にして多慾、無學、偏狹なり。山伏も亦加持の効験などあり得べくもあらず。夫は怠惰にして直に離縁狀をさし付くるを常とし、婦は嫉妬にして忽ち家に逃げ歸る我儘者ばかりなり。目代の壓制、ごまの灰の滑稽等すべて當時の社會上のあらゆる人物、日常の小事件を擧げ來りて小詭計を以て敵手を陥れんとし、かへつて發見せられて成し遂げざるを以て終局とす。詭計にして成就せらるれば滑稽とならざればなり。常に普通日常の人物のみならず、古來の傳説を利用

して、七福人も地藏も閻魔も鬼も雷も皆之を滑稽化し去れり。之を謠曲の古英雄古美人を以て重に忠義、孝貞、節義等を叙し、佛者の縁起、効験、奇蹟を擧げたるものに比較すれば眞に好箇の對照にあらずや。

狂言と謠曲とはかくの如き好對照をなすと雖も、その神事に起源して相分岐し、元來は其根源を同じくせり。故に其材料に於ても相似たるもの尠からず。神事祝言に關するものあり。(三人百姓、松囃、松ゆづり葉、對馬祭、祇園、惠比須大黒、福渡、連歌毘沙門の類)武勇傳説に關係あるものあり。(奈須與一、七騎落、生捕鈴木の類)謠曲は軍記物語、歌書、材料を入れて、よく史劇的に發達せるに對し、狂言は益々社會的に發達し、行けるものといふべし。しかも薩摩守、ひめ糊、文藏の如き尙軍記の物語材料に採りたるを見る。

謠曲と狂言。

謠曲の役人人物はシテ、ワキにして狂言はシテ、アトなり、之を形式の上より見れば尙一層の類似を認むべし。蓋し狂言の様式はその内容より之を二様に分つことを得べし。一は平和に終るものにして、一は不和に終るものとする。平和に終るものは噺につれて一同笑ひ興じて退場するものにして、最後には舞を奏でて笑ひさくらめくを常とす。不和に終るものは「やるやうぞ〜」「すさり居らう」にて物別となるものなり。この二形式

を以て謠曲に比較するに、甚だ相似たるものあり。謠曲の最後には舞樂を以て其曲を終るは殆ど根本の性質なり。神事能、祝言能等に屬するものは、必ず後シテあらはれて舞樂を奏す。これ神樂舞樂の舊態を存するものといふべく、前にもいへるが如く、複式の能は實はこの舞樂の爲に設けられたるが如きもののみ。修羅物に於ては舞樂に代ふるに往時の戦闘状態を以てするなり。いづれもシテが舞臺の上の伎倆を示すものなり。狂言に於ては前後のシテなしと雖も、最初に行違ある時のシテアトと、後に感情融和して和熟する時のシテアトとは尙前後シテの關係ありといふを得べきか。こゝに於て舞を奏し囃をとなへて興じ入るは猶謠曲の後の部分に舞を奏するものと、全くその形式を同じうするものといふを得べし。又謠曲の或種類のもの、例へば安達原、道成寺等に於て僧侶に祈り伏せられて失せゆく鬼神鬼女の類、鐵輪の女の安部晴明に祈り伏せらるゝが如き、其他すべて幽霊のあらはれ來る複式能に於ては幽霊は大抵僧侶山伏等の行方に押され又成佛して、「間に紛れて失せにけり」「朝嵐とともに消えにけり」「村雨と聞きしも今朝は松風ばかりや残るらん」の類にて逃げ失するを普通とす。これかの不和的狂言の「やるまいぞ」「すまじ居らう」を以て物別れとなる形式に酷似するに非ずや。かゝるに狂言といひ、謠曲といひ、我國演劇詩の最初の形式をなせるものにして、そ

狂言の滑稽。

○秋大名 三人
 大名立鳥帽子。
 茶利。袴。ちい
 さ刀。

第五編 南北朝時代—室町時代

四八三

の單簡なる點皆相似たり。事件の錯綜紛雜して數段つゞきの變化ある劇詩は徳川時代に於て始めて發達せるものにして、狂言も亦單に一小詭計の失敗を以て滑稽に資したるに過ぎずして、種々の錯綜せる社會事實を糾合して篇を成せるものに非ず。希臘の最古のコメデーは我狂言と相距ること幾許も異ならざりしならん。然れどもアリストフアネスに至りては已に多くのアクテンを有し、純然たるコメデーの標本を作れり。我狂言は徳川時代に於ても遂は發達せる後繼者を見出す能はざりしを遺憾とす。加之狂言の滑稽はあまりに誇大にして事實に遠し。事實の誇大は滑稽としては最も容易き滑稽なり。蚊を撲つに大長刀を擔ぎ出さば人誰か之を笑はざらん。狂言の滑稽は率ねこの類なり。發達せるコメデーに於ては眞摯なる平生の舉動行作の行はるゝ間に好笑の材料を發見し來らざるべからず。眞面目に戀愛し、眞面目に宗教に熱中する側に於て滑稽なる事件は生ぜざるべからず。狂言のは最初より滑稽にして觀者ははじめより滑稽を以て之を迎ふ。故に輕飄にして莊重ならず。諷刺も亦深酷を缺けりといふべし。

秋 大名

和泉流本

▲大名「罷出たるは。隠も無い大名。此うち御前に詰めてあれば。心が何とやら屈して御さる。太郎冠者を喚び出し。何方へぞ。遊山に參らうと存ずる。在るかや

冠者 牛袴
亭主 長袴

い。▲くわじや「御前に。▲大名」汝を喚び出すは別義では無い。何方へぞ遊山に行かうと思ふが何とあらう。▲くわじや「は。内々は御意無うても。申上うと存ずる所に。一段で御ざりませう。▲大名」好からうな。▲くわじや「は。▲大名」何と。西山東山は何時の事。様子の違ふた所へ行きたいが。何處もとが好からうな。▲くわじや「誠に御意の通り西山東山は何時の事て御ざる。されば。是よりも下京邊に。心やさたかな御方が御ざる。殊の外の庭好きて御座る。是への御遊山が好う御ざりませう。▲大名」あう。是が一段好かる。それへ向けて行かうぞ。▲くわじや「は。乍去是へ御ざれば御歌をなされねばなりません。▲大名」これは如何やうな事を讀むぞ。▲くわじや「三十一文字の言の葉を。傳へた事て御ざる。▲大名」あゝこりや。なるまいに。▲くわじや「は。申上まする。▲大名」何とした。▲くわじや「某上京邊を通つて御ざれば。若し衆の見物に御ざらうとあつて。萩の花に付て。句づくろひをなされたを。聞いて参りまして御ざる。御前にをすへ(教へ)ませう。▲大名」やい。くわじや。其庭にも。萩の花が有ろうかな。▲くわじや「殊に亭主好きまするのが。萩で御ざりまする。▲大名」ふん。其義ならば。急いでをすへ(教へ)い。▲くわじや「畏つて御ざる。七重八重。九重とこそ。思ひした。とよ咲き出づ

る。萩の花かな。と申事て御ざる。▲大名」ふん。してそればかりか。▲くわじや「はア。▲大名」いや。是程の事なれば讀まう程に。急いで來い。▲くわじや「畏つて御ざる。▲大名」來い。やい。冠者。して。今の歌の云ひ出しは何であつたぞ。▲くわじや「忘れさつしやれて御ざるか。七重八重で御ざりまする。▲大名」あう。それぢや。して其後は。▲くわじや「申殿様。是ではなりません。▲大名」あう。なるまい。急いで戻れ。▲くわじや「申殿様。▲大名」何ぢや。▲くわじや「去乍。物によそへたら。覺えさつしやれませうか。▲大名」よそへ物によつて。覺えうす。▲くわじや「即扇の骨によそへませう。七重八重と申時に。七本八本廣げませう。九重と申時に。九本廣げませう。とよ咲きと申時に。皆廣げませう。▲大名」あう。これは好いよそへ物ぢやわい。やい。して又其後が有るぞよ。▲くわじや「はア。これは猶よそへ物が御ざる。▲大名」それは何によそへるぞ。▲くわじや「即ち身共をば。臍脛ばかり伸び居つて。厚く折檻なされます。其脛をば。思ひ出さつしやれませう。▲大名」あう。是が一段ぢや。來い。▲くわじや「疾と御ざりました。即ちこれて御ざりまする。それに待しやれませ。▲大名」やい。くわじや。亭主に。大名ぢや程に是へ迎いに由とす。▲くわじや「畏つて御ざる。御亭。内に

御さるか。▲ていし「さ。くわじや殿。何として御さつたぞ。▲くわじや」其事で御さる。たのうだ人が此方の庭を聞き及うて。見物にて御さる程に。表へ迎ひに出さつしやれし。▲ていし「心得まして御さる。はつ。これは又見苦しし所へ。御腰掛けられうと御さります。辱無うこそ御さります。▲大名「や。くわじや。ありや亭主か。▲くわじや」はア。▲大名「御亭。無案内にあぢやる。斯う通ります。▲ていし「はア。▲大名「や。太郎冠者。床机」。▲くわじや」はア。▲大名「や。亭主に。是へ出られしと」。▲くわじや」はア。御亭是へ出さつしやれし。▲ていし「畏つて御さる。▲大名「御亭々々。聞き及うだよりも。甚う庭が見事であぢやる。▲ていし「はア。此中は手入も致さぬによつて。甚う汚穢御さります。▲大名「否々。ちうもあぢやらぬの。なう御亭。彼の向ふな松は女松であぢやるか。男松であぢやるか。▲ていし「さ。彼れは男松で御さります。▲大名「ふん。甚う見事であぢやる。や。冠者。見事なな。▲くわじや」はア。▲大名「彼の左の方へすつと出た枝を見たか。▲くわじや」中々。見まして御さる。▲大名「鋸あくせし。引切ご神に立とうに。▲くわじや」は。▲大名「は。御亭。不案内にあぢやる。▲ていし「これ」。▲くわじや「何てか御さるぞ。▲ていし「さ。彼

の殿様に仰しやれませうには。いづれもの。御腰掛られては。彼の萩の花に付けて。短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれし。▲くわじや「心得まして御さる。申さする。▲大名「何とした。▲くわじや」亭主申さするのには。いづれものが短尺をなされませる程に。花につけて。歌をば詠まつしやれいと申さする。▲大名「亭主に是へ出よと」。▲くわじや「はつ。▲大名「御亭。只今は歌を詠と仰やる。久しう詠ぬが。何とあぢやる。一つ詠まうか。▲ていし「遊ばしませう。▲大名「斯うもありやるか。七重八重九重とこそ思ひしに。とへさき出づる。萩の花かな。▲亭主「あ。是は。いから出来さつしやて御座ります。▲大名「亭主。身は歌よみて居りやるの。▲ていし「あ。強う出来さつしやれて御さる。▲大名「や。冠者。亭主が出来たて。甚う喜ぶわ。汝は何方へど行け。暇を出す程に緩りと行て寛ろして來し。▲くわじや「畏つて御座ります。▲ていし「申殿様。▲大名「御亭。何てあぢやるぞ。▲ていし「只今短尺に書きませる。最一度吟じまつしやれませう。▲大名「ちう。心得てあぢやる。七重八重。九重とこそ思ひしに。とへ咲き出づる。出づる。さ。冠者奴は。どこもとに居るてあぢやれし。▲ていし「申殿様。御歌に冠者は。りませし。急して後を詠まつしやれませし。

▲大名「して。短からうぢやるか。▲ていしゆ」中々字が足りませぬ。▲大名「したらば。出づるを幾個も書いて置きやれ。▲ていしゆ」いや。それでは足りませぬ。▲大名「はて、冠者奴が。早う戻り居らして。▲ていしゆ」申殿様。急いで詠まつしやれませぬ。▲大名「ここな奴は。諸武士に手を掛居つて。憎い奴の。▲ていしゆ」ても。字が足りませぬ。▲大名「あゝ。思ひ付けたわ。▲卒主」何と。▲大名「もの。▲ていしゆ」何と。▲大名「太郎冠者か向廊に。某が鼻の先。▲ていしゆ」何でも無い事。疾と言はしませ。

朝比奈

大藏流本

○朝比奈。
シテ朝比奈。
大島類聚斗目。
大口。白鉄つば折。
アト閻魔大王。
着付大格子類厚板。狂言袴括る。白鉢巻。さげき髪。腰帶。色入厚板押折。扇子。杖竹。扇子。刀佩く。大竹を持つ。武悉の面。

アト「地獄の主閻魔王」。ろさい(邏齊)にいさや出うよ。是は地獄の主閻魔王です。當代は人間が利根になり。八宗九宗に宗體を分け。極樂へそろりとそろめに依て、地獄の餓死以外の外な。さるに依て。今日は閻魔王自身六道の辻に出。よからう罪人も通らば。地獄へ責め落さばやと存ずる。(打切や)住馴れし地獄の里を立出て。足に任せて行く程に。六道の辻に着にけり、急ぐ間六道の辻に着いた。先此處に休らひ。よからう罪人も通らば。地獄へ責め落さうと存

鬼道巾。
巾法破の肩取りてしする。
其時は着付厚板よし。

ずる▲シテ(一セイ)「カもやう」朝比奈は、冥土へとてこそ急ぎけれ。是は娑婆に隠れも無い朝比奈の三郎義秀です。われ思はずも無常の風にさとはれ。只今冥土へ赴く。先そろりと参らうと存ずる。▲ア「くん」。いや。よい罪人が来た。と見えて人臭うなつた。何處許ぢや知らぬ。(互に行逢ふて)いや。是へ能い罪人が来た。急いで地獄へ責め落さうと存ずる。いかに罪人。急げとこそ。(一段責めて)やい。何事ぢや。▲シ「某が目の前をちらりとちらめくは何者ぢや。▲ア「身共を得知らぬか。▲シ「い。や。何共知らぬ。▲ア「是は地獄の主閻魔王様ぢやはやい。▲シ「何ぢや。地獄の主閻魔王ぢや。▲ア「中々。▲シ「あらいうしの態やな。娑婆にて聞てありしは。地獄主閻魔王こそ。珠の冠を着。石の帯をし。金銀をちりばめ。四邊も輝く態と聞てありしが。一向そらもありません。▲ア「あう。其古は珠の冠を着。石の帯をし。金銀をちりばめ。四邊も輝く態があつたが。當代は人間が利根になり。八宗九宗に宗體を分け。極樂へそろりとそろめに依て。地獄の餓死(餓饑のこと)以外の外な。さるに依て。今日は閻魔王自身六道の辻に出。罪人も通らば地獄へ責め落さうと思ふ處へ。あのを來たに。今一責せめて地獄へ責め落すぞ。▲シ「あう。如何程なりともあせめ。▲ア「責めいては。夫地獄

あう
二ん
ね

遠きにあらす。極樂遙なり。いかに罪人急げとこそ。(又一段責めて)やうく。何事ぢや。此閻魔王が秘術盡して責むれ共ゆつすりともせぬ。おのれは何者ぢや。▲「某を得知らぬか。▲「いさや。何共知らぬ。▲「娑婆に隠れも無い朝比奈三郎義秀よ。▲「何ぢや。朝比奈三郎義秀ぢや。▲「中々。▲「牛に喰はれたらされた朝比奈と聞いたらば責めまいものを。が。朝比奈と聞いて責めねば地獄の名折ぢや。今一責せめて地獄へ責め落すぞ。▲「いか程なりとも責めそい。▲「いかに朝比奈急げとこそ。(又一段責めて。竹に取つき中返りする。)▲「閻魔王。もそつとせめそい。▲「もう責めたる無い。▲「もそつとせめそいと云ふに。▲「はて。もう責めたる無いと云ふに。▲「どうもちりやるまじ。▲「いさや。思ひ出た事があるやうく。▲「何事ぢや。▲「此土へ来る程の者に和田戦の起を尋ねれども。最負偏頗で定説が知れぬ。汝真の朝比奈ならば。和田戦の起を知って居るであらう。語って聞かせい。▲「易い事。語って聞かざる。床机を持って。▲「心得た。(床机にかけて)さうく。語れく。▲「退きとろ。▲「何とする。▲「下に居よ。▲「扱々閻魔王あたりの荒い罪人ぢや。▲「此を見よ。▲「い。罪い。夫は何ぢや。▲「其時娑婆で手柄をした道具ぢや。▲「い。

そい

い

う。そう見えて殊の外麗い。早う語れ。▲「抑和田戦の起を尋ねるに。荏柄の平太胤長といつし者。碓氷峠にて君に奪はれ。一度ならず兩三度まで鎌倉を引渡さる。和田の一門九十三騎。平太が細目の恥を雪がんとて。親にて候義盛。白髪頭に甲を取つて載けば。誰かはあつて残るべき。中にも五月二日に鎌倉の門に押寄せ。一度に哄と鬨をつくる。▲「ほう。▲「されば古郡がついぬき。さげ切。數を知らず。斯う申す朝比奈が人飛礮。目を驚かす所に。親にて候義盛使者をたて。何とて朝比奈には門破らぬぞ。急ぎ破れとありしかば。畏つて候とて。頓て馬より飛んで下り。ゆらりくと立越ゆる。内よりも、すは朝比奈こそ門破れ。破られては叶はじと。八本の高梁をかけ。大釘大鋸を打抜きしたりしは。たゞさながら劔の山の如くにてありしよな。▲「ほう。▲「されども朝比奈何程の事の有るべきと思ひ。門の扉に手をかけ。さらりくと撫づれば。鐵は忽ち湯となつて流れぬ。扱其後金剛力士の力を出し。門の扉に手をかけ。えいやと押せば内よりもえいやとかいゆ。えいやと押せばえいやと抱へ。えいやとえいやとふて押したりしは。大地震の如くゆらめいてありしよな。▲「ほう。▲「されども朝比奈が力やまさりけん。八本の高梁も折れ。門扉押落し。内なる武者三十騎ばかりと

しに打たれて死したりしは。只さながら鮮押したる如くにてありしよな。▲「ほ
う。其鮮がトほほばり頬張りたいなア。▲「あ。参らせたらこそ候へ。▲「
「面白。睡れ。▲「か。つし處に。御所中の兵に。五十嵐小文次といつし
者。朝比奈が笠返さんと目掛けてかかる。朝比奈心に思ふやう。何程の事のあるべ
きと思ひ。彼の小文次を取て引寄せ。鞍の前輪に押付け。左へはさり。右へはさり
。さり。さり。と押し廻してありしよな。▲「はア。もう和田戦の談聞きたうな
。▲「シ。もそつと聞きたう。▲「マ。はて。聞きたうも無しと云ふに。▲「シ。夫ならば
浄土への道しるべをせし。▲「ア。此閻魔大王をさへ仕度いまいにする朝比奈ぢやも
のを。己が行度かろう方へ行かう迄よ。▲「シ。ちう云ふは道しるべをすま。と云ふ
事か。▲「ア。ふんでも無し事。▲「シ。夫は賊か。▲「ア。誠ぢや。▲「シ。眞實か。▲「ア。一定
ぢや。▲「シ。朝比奈腹にするかねて。熊手薙鎌金撮棒を持たする仲間の無いま
まに。閻魔王に。ずつしと持たせて朝比奈は。浄土へとてこそ急ぎけれ。

鬼の養子

和泉流本

▲女。妾は此の邊の者で御さる。山一つ彼方に。親里が御さる。久しう参らぬ程に。

○鬼養子 二人。

シ。鬼 鬼の頭

巾。武蔵の面。
厚板。
女はく小袖。
ゆばうし。子
を抱き出る。

今日此子を抱いて。見舞に参りませう。進行。人々参らぬが。何事も無いか。心
許なう御さる。やア参る程に。茲處は播磨の印南野と申所で御さる。此處は七つ
さがれば。鬼が出て人を取ると申が。心許無う御さる。早日も晩して御さる。人
でも連れて参らうものを。心許無う御さる。▲「シ。鬼。食らはう。▲「女。あ
。悲しや。なう。許して下さい。助けて下さい。▲「鬼。食らはう。▲「女。あ
や。そこな奴。汝は七つさがれば。人の通らぬ所へうせた程に。たつた一口にい
て食はう。▲「女。あ。悲しや。助けて下さい。▲「鬼。何と助けてくれ。やア見れ
ば好い女房ぢや。や。之れなら命を助けてやらうが。己が云ふことを聴く
か。▲「女。何なりとも聴きませう。▲「鬼。それなら。其方を連れて行て。己が女房にせ
う程に來い。▲「女。夫は迷惑で御さる。其上私に夫が御さる。▲「鬼。いや。男
はあるまい。己が女房にせう。▲「女。成程男が御さる。夫故此子が御さる。▲「鬼。夫
でも女房にせねばならぬ。如何あつても來い。▲「女。いや。夫は無理で御座
る。なりませぬ。▲「鬼。夫ならたつた一口にしてくれうぞ。いて食はう。▲「女。あ
。悲しや。それなら如何なりとも致しませう。助けて下さい。▲「鬼。何と合點する
か。▲「女。中々。合點で御さる。乍去。此子は何としませう。▲「鬼。其子は己が養子

にせう。これへちこせ。▲女「心得ました。抱かせられ。▲鬼「扱もく好い子ぢや。能う見れば旨さうな。一口にしてやる。わん。▲女「あゝ悲しや。其子故にこそ合點もしました。夫なら此方へ其子をちこさしやれ。▲鬼「夫なら食ふまひとでもこのことに此子を肩に載せて。唯もて行かう程に。其方も唯せ。▲女「心得ました。唯ませう。▲鬼「鬼の養子を肩に載せて。蓬萊の島へ参らう。扱もく。能う見れば見る程旨さうな。これは食はねば堪忍がならぬ。一口食ふてやるう。あゝ。わん。▲女「なうく悲しや。夫を食はしてなるものか。汝がやうな奴は。男には持たぬ。打倒してやつたがよい。其子も此方へちこせ。なうく可怖や。こはやく。(逃入る也)▲鬼「扱も扱も。女ぢやと思ふて油断して打こされた。扱もしなしたり。ヤア。これに笠を置いて行た。せめて此なりとも取て行かう。やゝ。今の女。何處へ行ぞ。如何でも女房にせねば置かぬぞ。やるまいぞ。

○謡曲、狂言研究書目

(1) 謡曲の沿革を見るには——修日本教習史(佐藤誠實)、これは、其の沿革を簡明正確に説明せる上、研究書目を取上げたる點最もよし。——修遊樂笑(北村前信)——修聲曲新纂(齋藤月岑)——修歌舞音楽史(小中村清延)

これは、説明簡短にして、考証正確なり。音楽に関する歴史の伯肩たり。又、此の外、故事類苑(甘樂部)、日本社会字彙中の謡、狂言の部(經濟雜誌社本)——家庭百科辭書中の謡、狂言の部(芳賀矢一、下田次郎)。

- (2) 謡曲「狂言」の文學上の價值は、——國文學史十講(芳賀矢一)に簡明にして面白し。又明治三十八年十一月の「教育」雜誌に、芳賀博士の「謡曲」に關する説あり。又、國文學歴史の序論(芳賀博士)に最も有益なり。
- (3) 能と外國劇との關係は、——修希臘古劇と我國の能樂(芳賀博士)三十七年一月帝國文學——能と元の雜劇との關係は、「露伴叢書中の元の雜劇」及び「支那文學大綱第五卷」

- (4) 謡曲の解釋には、——修謡曲通解(一)大和田建樹(二)の書は「古抄」「謡抄」及「謡抄抄」を參考して成りしもの故よし。——修謡曲評釋(大和田建樹著現今撰出中)——謡曲文粹(同上)。これは謡曲二百番中より、よき文を集めたるもの。——謡曲二十番(芳賀矢一校訂)これは二百番の謡曲より模範的のもの二十番を萃めしもの。名著文庫第七編)——謡曲の說(陽春庵雜考中、これは、謡曲の原典を説明す)——「能と能」——「能のしなり」(以上二書大和田建樹著)能に就て簡明に説明す
- (5) 狂言全集三冊(露伴校訂)の書は、元の狂言部、續狂言部、狂言部拾遺合十五冊を校訂して活字版にしたるもの。——狂言二十番(芳賀矢一校訂)(名著文庫第七編)——狂言評註(大和田建樹)
- (6) 猿樂者の系圖は、——猿樂系圖(經濟雜誌社の大日本人名辭書)

第六編 江戸時代(西紀一六〇三—一八六七)

第一章 總論—「太閤記」

江戸時代に於ける
國民道徳。

何れの方面に拘はらず、苟も日本人の歴史を研究する人は、必ずや、本章第一行に掲げたる二個の年代を見遺すこと無かるべし。是れは、徳川幕府と云うて、興味ある政體の始め終りを示す年代なり。初めのは、徳川家康が、幕府を江戸に開きし年、後のは幕府倒れて、數百年間中絶したりし帝政の再び起りし年なり。惟るに、此の時代に、漢學の一代潮流は、全國に溢れて、感化の及ぶ所は一方ならず、政體は云ふも更なり、法制に、技藝に、學問に、甚だしきは、此の時代の哲學、文學が説明せるが如く、國民思想の根底にも、支那思想の深く培はれたるあり。而して、今日尙、此の潮の全く流れざるにあらず。併し、今日は、只、國民道徳の舟の、此の上に漂ふ外は、さして重ぜられずして、此の一千八百六十七年以後は、何事も西洋思想を吸収すること成りたり。

是より先き、十六世紀の後半は、即ち室町の晩年にして、日本の天下は麻の如くに亂れたりし時代なり。地方に割據したる豪族等は、何れも中央政府を蔑にして、日夜互に權力と土地との争に、日も足らざる有様なりし故、淺穢しくも、天下は遂に無政府の姿

織田信長出づ。

豊臣秀吉太閤と稱す。

徳川家康將軍となる。

となりたりき。然れども、群雄に抜ん出て、初めて之を平定せしは織田信長とて果斷勇武の武人なりき。而して、之を輔佐するに、腹心の名將羽柴秀吉。徳川家康などの人々ありき。然れども、かれ信長は、未だ擅に將軍の榮職を握るに至らずして忽ちに亡びぬ。併し彼れは、天下の諸群雄を平けたる上、足利の將軍を倒したるなり。西紀一千五百八十二年(正親町天皇天正十年)信長、逆臣の爲に弑せらるゝや、天下兵馬の權は、羽柴秀吉の手に落ち來れり。是に於て、秀吉は、信長の遺業を整理して、關白となり、自ら太閤と稱し、西紀一千五百九十八年(此の年薨す。後陽成天皇慶長三年)まで、實に日本を支配したり。次に一千六百年關原の大戦に、徳川家康大いに反對黨を打破つて、天下の覇權を掌握し、奏し請うて將軍の職に昇りぬ。これ即ち、徳川幕府の鼻祖にして、子孫相續いで近代に至れり。

蓋し、徳川家康は、日本稀有の大政治家なりき。其の赫々と權威ある封建制度の下に居て、萬民が、昇平の福祉を謳歌せしこと、實に二百五十餘年間なりき。思ふに、家康は天下の大權を鹽梅して、政府と地方との均衡を保たしめしより、子孫相續いて十五代、一千八百六十七年まで覇者たりき。其の政體は、諸侯に對しては大いに自治の政策を執りつゝも、中央政府は各方面に亘つて、權力の綱要を完全に握りしこと、日本の歴史

江戸の勃興。

上 antiquity に其の比を見ざる所なり。是に至つて、日本は、國富み、民殖え、文明の技術は、何くれとなく驚く可き長足の進歩を爲したり。随つて江戸の新都は、忽如として勃興せり。其の一原因と見る可きは、各諸侯は三代將軍の命令に遵ひて、參勤交代し、其の妻妾子供を人質として江戸に居らしめたりしことは是なり。傳へ云ふ、當時江戸の人口は、少くも百萬に達し、一時は、これ以上もありしならんと。

江戸と日本文學との關係。

既に政治の首都、商業の中心となりし江戸は、更に文學の中心となりしは理の當然なり。尤も江戸開府の初には、京都には二三文學の活動あり、大阪には、新しく演劇を産出したるしが、後には、全國の學才藝皆悉く江戸に吸収せられたり。斯の如くにして此の後、二百有餘年の間、江戸の、日本の文學に於ける關係は、恰も倫敦の、合同王國の文學に、巴里の、佛蘭西文學に於けるが如き有様なりき。江戸文學には、社會改良の一要素となりし特色あり。當時の學者は、其の意見を學者社會に發表するのみならずして、一般人民に向つても發表したり。是に於て、教育は廣く、前代未聞の普及をなして、政事を改良し、社會の基礎を確定したり。斯して下級の民は適當なる教育を受けたるは勿論、家々の富の増加するに従ひて、適當なる書籍をも購

江戸文學には社會を改良する特色あり。

印刷術の發達。

書籍の印刷と家康。

江戸文學が活動する範圍。

江戸時代には佛教衰へたり。

孔孟の道は武士の信教となる。

ふことを得、讀み得る暇をも得たり。これのみならず、書籍の供給も従前よりは遙に容易くなりたり。それは、八世紀頃より始まりし日本の印刷術が、此の時代に至つて發達したるが故なり。(Japan Asiatic Society Transaction 第十卷第一及び第二、サトウ氏の日本に於ける印刷術の濫觴參看)かの豊臣秀吉の軍が、朝鮮を征伐して還りし時、活版の書籍を分捕して歸りけるを、日本の印刷師は之を模して新に活字版を製り、家康亦大いに之を獎勵したるが故、版本の數量頓に増加して、汗牛充棟の有様とはなれり。而して、江戸時代に於ける文學の普及は、善と惡との兩方に働きぬ。一方に於て、あまたの益ある道德宗教の智識は、國民一般の耳目に觸れて、彼等の智識は非常に擴まると同時に、他方に於ては、趣味品性の著しく卑き小説が、江河の如く全國に氾濫したり。勿論、政府は此の發行を禁じたれども、忘り勝なれば堰き止むること能はざりしなり。江戸時代は、また、佛教の衰頹時代にてありき。尤も、佛教が、全く人望を失ひたるにあらざりしは、足跡の到る處に、寺院のありて、群僧なほ安逸を貪りしを以て證することを得れど、其の人心を感化する功德は大いに減じ、孔孟の道が、富強にして國民統治の權を握れる武門武士の信教となるに及びて、これは唯だ、朝廷の裡に見る蔭も無く殘

神道興る。

江戸文學の種類は甚だ廣し。

江戸文學に存する大なる缺點。

りぬ。一般國民の思想は、時世のまゝに漸くますます勇猛となり、人事は常無し、富貴は空虚、暴勇残酷は厭ふべし、陋しき六根の樂は節すべし、須らく人の世を遁れて、早く安心禪定の域に入るは人の務なりなどと云へる教には、當時さ程の興味を感せずして、佛教の旨よりも、疎にして活潑に、しかも現世的なる聖賢の教に耳を傾くることとなり、遂に政治・文學の上に、大いに活氣を賦與したり。併し、此の餘論は、後章に譲るべし。而して又、此の時代の末に至つて、更に古の神道教の再興を見たり。これこそ、實は國民思潮の中は、突如として生じたる一旋風にして、徳川幕府を吹き倒したる、政治上最も重大なる破壊的勢力なりとす。

さて、江戸文學を、平安時代の文學に比するに、其の量頗る浩濶にして、其の類も遙に廣濶なり。史傳あり、詩歌あり、淨瑠璃あり、議論あり、教訓あり、政治あり、宗教あり、夥多の *biblio abilia* (書に非らざる書)あり、各種の小説あり、紀行あり、字書に、文典に、其の他言語學上の著述、解題の書、醫書、植物の書、法制、兵書、漢籍の注釋書、佛教の書、博物志、好古學の書、心理の書物、案内記等あり。

之を古に比すれば、斯の如く、豊富にして盛なる此の新しき文學は、體裁の點に於て惜しむ可き缺點あり。其の二三を除けば、最も大なる最も明かなる缺點あり。即ち、作

中の事件に亂暴狼藉の多きこと、身體上・精神上に有りとすも無き出来事の多き、著者が自身の學を誇負することの多き、猥褻の多き、文章の虚飾ありて、くどくどしき、又、陳腐なる記事もあれば、法外なる珍事もあり、其の他、必要も無きにくたくしき記事を並べたるもの、到る處にあらざるは無し。是れ、何人の目にも見得べき缺點なりとす。併し、著者には才筆の人乏しからずして、作の機智・滑稽の少からざるは、具眼者の認むる處なり。又真情の溢れたるものも少からず、高尚なる徳の教は甚だ多く、且つ實際生活を直寫して着眼の鋭敏なるものも饒く、隨つて美文にも乏しからず。要するに、政治・社會に關する思想の範圍は、之を古代の逸樂的文學に比べて遙に廣大なりと謂ふべし。而して惜むべきは、爰に世界的の著作者無ければ、穩健なる思想・適勁なる名文・訓陶せられたる感情・整頓せる意識などの相調和せし文學は、之を當時の群書中に求めんと欲すれども能はざるなり。

さて、日本語は此の時代に於て、大いに變化したり。新文明の要求に應ぜんが爲めに、單語の増殖必要となりたるを以て、漢語は自由に採用せられて、其の數遙か國語に超過するほどなりき。併し明治現代の日本語が英語に於けるが如く、當時の國語は、漢語採用の爲に毫も其の本質を失はずして、而かも古語に存する煩鎖なる文法はますます簡

日本語は、江戸時代に於て大に豊饒となる。

俗語、文章に入り来る。

易に赴きぬ。
而して、當時の俗語は、そろ／＼文學中に見え初めたり。初め俗語は、漸次文語より分岐して、遂には、別に俗語文典を編むにあらずば解すること能はざるほどに至れり。併し、其の、文語と成るべきや否やは未だ俄に判することを得ず、今に至るまで未だ著しき成功あらず。思ふに、之をして、語意簡明にして何事をも發表し得ること、從來の文語の如くならしむるには、尙十分の琢磨を要すべし。

徳川時代の研究書目

- 徳川時代の研究書目
- 徳川實記——續徳川實記(續國史大系)——藩翰譜(新井白石)——大日本野史二九一卷(飯田忠彦)——徳川太平記二(小宮山綏介)——徳川十五代史二(内藤恥叟)——幕末小史三(月川安宅)——徳川三百年史三(長田偶得)——開國始末(島田三郎)——徳川幕府時代史一(池田泉淵)——幕末史一(小林房次郎)——三百諸侯一(月川殘花)——幕府衰亡論一(福地源一郎)——慶長紀開四並今日抄一(安田照次)——徳川家康と直弼一(大久保余所五郎)——白河樂翁公と徳川時代(三上參次)——江戸幕府考七(江戸會編)——徳川禁令考並後聚一〇(菊地駿助)——徳川政教考二(吉田東伍)——日本四政史(太政官翻譯係譯)——内政外交術史一(渡邊修三郎)

○徳川時代の風俗の一斑を記したるものは、

- 慶長見聞集一(三浦淨心著、名著文庫に入る)——元禄時勢雜一(笹川禮郎)——元禄世相志一(野藤陸三)
- 近世女風俗考(生川春則)——「燕石十段」中の「神代のなごり」蜘蛛の絲巻等——千代田城大史三(永島、太田)

田)——大奥の女中三(池田泉淵)——側面觀幕末史一(櫻木草)——日本風俗史下巻(藤岡、平出)

○徳川時代の文致に關しては、
武江年表九(齋藤月岑)——近藤正登全集三(國書刊行會出版)〔此の二書は徳川時代の文致の研究材料なり。〕——日本教育史料——修訂日本教育史一(佐藤誠實)——江戸文學史界一(内藤恥叟著、日本文庫第十二編)——日本近世教育史一(横山達三)

○太閤記

江戸時代に於て、最初に出でたる文學の書は「太閤記」なり。これは、豊臣秀吉の傳記にして、二十二卷十一冊あり。本書は秀吉の薨後、僅に二十七年にして成りしものなれど、當時は史上の事實に妄誕奇異の事柄を附會する時代なるが故、其の第一章には、偶然の事柄をば、英雄の誕生に附會したり。以て、當時の人心の傾向せる處を卜するに足る。此の書、文學としては、左ほどの物ならねど、記事は史的憑據とするに足り、後の世に出でたる同様の書物に向つて、種々の事件を供給す。西紀一千六百二十五年の著。著者不詳。

○太閤記、二十二卷は豊臣秀吉の一代記。全部の事蹟は虚實混じりと雖も、之が爲めに讀者を堪はしむること多し。後世之に、法橋玉山が挿繪したる爲め一冊流行したり。元和二年丁巳(二二七七)の自跋寛永二年(二二八五)朝山意林庵素心の跋。萬治四年(二三二二)出版。著者は小瀬道喜(浦庵)とて初め秀次に事へ、秀次

亡後雲州侯細尾吉晴に事へ、後加賀の前田侯に事へ、寛永七年七十七歳にて歿したる人なり。「史籍集覽」帝國文庫第一編より第四編「又川角太閤記」あり。「我自刊我書」史籍集覽等にのる。これも豊臣太閤の一生の事蹟を詳悉したるもの。一部の體裁悉く問答體なり。因て、或は著者が實見實聞を他人に答へしにあらざりと云ふ。實録實史として尊ばる。著者川角某は、永祿天正の實戰を経て後に、書きしものか。此の外——太閤軍記四卷(小瀬甫庵の著なりともいふ)——太閤諸國軍記七卷——太閤素生記一卷(史籍集覽)等甚だ多し。

第二章 漢學者

室町の末に方つて、文學大いに衰へ、威名赫々たる彼の豊臣秀吉も無學なりしは、其の遺書を見て察せらる。而して、秀吉は明韓(韓國は秀吉の征伐せし國)との交際に適當なる學者を得るに困却したるほどなりき。然れども、秀吉は學問の親友なりき。次に、徳川家康が、新に社會を改造し新に國政を施行するに及んで、大いに人才の必要を感じ、印刷術を保護すると同時に、熾に學校を起し、且つ意を、版本及び寫本の聚集に用ひ、傍ら僧徒に命じて、諸家の記録を記さしめたり。

○印刷及び、勸學の事は、

右文故事(近藤守重)國書刊行會出版の正書全集又は存探遺書——大日本教育史資料——故事類苑文學の部、印刷條——佐訂日本教育史第六編印刷條(佐藤誠實)——日本近世教育史(横山進三)

藤原惺窩出づ。

爰に、家康が愛護を受けたる學者の中にて、最も高名なるは、播磨の人藤原惺窩なりとす。惺窩(一五六一——一六一九)は即ち十三世紀の歌人藤原定家の後裔にして、自分も亦歌人なりき。幼にして頭角を現はし、剃髮して僧と成りしが、幾程も無くして、佛教の益無さを認め、是より心力を經籍に委ねたりしが、「四書新註」に和訓の無さを憂へ、一先づ明國に留學して「新註」の奥儀を傳へ、其の義理を以て、和訓を施さんと思ひ、薩摩國防の津より山舟せんとせしが、會、風に會ひて、船を山川の津に寄せて數日間正龍寺に滞留したり。凡そ、偶發せる細事も、時としては、大いに人の運命に影響することあるものなり。時に惺窩は、其の住持の僧が、何書やらん誦讀するを立聞し、「讀むは何書なりや」と問へば「論語なり」といふ。「ざるにても聞き慣れざる訓點かな」とて、之を一見するに、豈に圖らざりき、我が得たしと願ふ「四書新註」の和訓にてありき。一誦三嘆、「是れは、これ何人の訓點せしか」と尋ねれば「大隅正興寺の住僧、文之和尙の點なり」と答ふ。惺窩大に驚き、手を拍つて悦び「貧道はるる海を跨えんと欲するは、ただ、新註に和訓を施さんとなりけり。今幸に、我國の此の處に於て、之を得たり。今は明に行くに及ばず」とて、其の書を乞うて得たり。「四書新註」とは即ち例の「朱熹集註」にして、傳へいふ、此の和訓は、最初南禪寺の僧桂庵和尙(字玄樹、號島

惺窩の驚喜。

四書新註を傳ふ。

陰、山口人。應永三十四年に産るが、當寺の老僧惟肖、景徐に従つて學びしが、應仁元年(日本紀元二二二七)明に入つて、新註を修めて、歸朝し、之に完全なる和訓を施し之を肥後、薩摩の間に講じて、文之和尙に傳へたるなりとぞ。思ふに、文之和尙の和訓なりと云ひしは、傳の儘か、稍之を改良したるかは知らず。是に於て、惺窩之を研究せんと欲し、遂に渡海の志を酬して故郷に歸り、身を此の書の研究に委ねんと決心したり。

○藤原惺窩(正親町永祿四——後水尾元和五)名は庸字敏夫、惺窩は號、別に北内山人、柴立子、廣牛高等の號あり。祝髮して名を尊と稱し、妙壽院と號す。傳は、近世叢書(原念齋)——先哲叢談(角田簡)——野史儒林傳第二五一卷——徳川三百年史中編、

○當時の漢學の起原は、

漢學紀源(伊地知季安著、國書刊行會の續々群書類從第十)——類聚名物考(山岡波明、書籍部、——故事類苑漢學部、又——日本近世教育史(横山達三)——終日本教育史(佐藤誠實)を看よ。

○惺窩の倭歌集は、續々群書類從第十四、歌文部に收む。

陣中に學者を召す。

其の後、太閤秀吉が、征韓の帥を起し、肥前名護屋に在つて、外征の諸將を部署するや、惺窩は家康に召されて其の陣中に會見したり。是に於て家康、彼が學識の深さを認め、此の後屢々召して、書を講ぜしめぬ。併し、惺窩は、他の凡僧どもと伍するを厭ひ、門人林羅山をして之に代らしめ、病に托して、閑靜なる京都の市原村に退隱し、自ら北

惺窩の功績。

内山人と號せしが、従ひ學ぶ者市を爲すが如く、其の多くは貴公子なりき。其の後、幕府より召されたれども、すべて辭退せり。其の後家康が京都に學校を起さんとし、惺窩をして教官たらしめんとせしは、これ實に西紀一千六百十四年(慶長十九年)のことにして、彼も亦之を承諾したり。されど、偶々大阪の役起り、家康又尋て薨せしかば、有益なる此の計畫も水泡となり、惺窩は一千六百十九年に五十九歳にして歿しぬ。惺窩は、文學上注意するほどのものを殘さざりしが、初めて、宋學を日本に紹介したる功績の高くして大いなること計る可からず。其の著「假名性理」は惺窩が文章の標本なるべし。これは、表題の示す如く、宋學の手引草なり。

(譯者いふ、其の著「千代もと草」も、此の人の文の標本なり。續々群書類從第十教育部に收む)

夫れ、江戸時代の文學は、悉く、宋學に基づける道徳の主義と觀念とを以て貫連す。請ふ、之を説かん。而して、學者若し尙進んで十分之を研究せんと欲せば、左の書に就くをよしとす。

Monseigneur de Harlez's Ecole Philosophique de la Chine 及び千八百九十二年 Dr. Knox 氏 の投書に係る Journal of the Asiatic Society of Japan 中の然るべき部分。

江戸文學の根本的觀念、主義。

○徳川時代の儒學の沿革は、

日本に於ける儒學發達の大觀(有馬祐政「哲學雜誌第一七四號——一七七號、明治三十四年八、九、十、十一月」)——徳川時代諸學派系統(渡邊世祐「史學雜誌第四卷第一號明治三十五年一月發行」)又、經濟雜誌社の大日本名辭書附録の系圖を見よ。——大日本教育史資料——故那那苑經學部——訂日本教育史(佐藤誠實等六編文學部)——近世日本教育史(横山達三)——日本朱子學派之哲學(井上哲三郎)

宋儒の學說。

そもく、宋儒の學は、古聖賢の說を敷衍して、性理、倫理、究理、政治及び支那思想に離る可からざる君臣の道を論ずるなり。

朱子の說に據れば、萬物の本源は、太極なり。太極とは絶體の意なり。動いては陽となり、止つては陰となる。陽は活働的なり、積極的なり、發動的なり、男性的なり。陰は女性的なり、呼働的なり、消極的なり、此の二原理相働いて、宇宙、混沌の中に生じ、重くして濁れるものは陰と呼び、沈澱して地となり、軽くして清めるものは陽と呼び、上りて天と成れり。陰陽又水火木金土の五原素を生ず。而して、五原素各其の所を得ば、四季其の序を正しくし、風雨寒暑其の時に順ひて、長へに息むこと無し。さて、是等所論の形式中には、造化の如き物體無く、氣といふ原動力ありて、右の現象を起す。此の現象を起す原働力を理といふ。此の理と氣との性質に就て、支那日本の書籍に詳しく論じたるもの頗る多し。

朱子の哲學。

天の意識。

朱子の哲學には天を論ぜず、天の代りに抽象的に大氣を論ずれども、日本人は、かの孔孟の說に對するが如く大いに天を尊ぶ。而して此の天は、日本人の所謂神と大に似たり。彼等は曰く、天即ち天道は、高きに在つて見ざる無く、聞かざる無く、命ぜざる無く、報する無く、罰せざるなく、怒らざるなし。是の故に仰いで尊むべく、其の恩を謝すべしと。我等は、此の文句を讀む時は、やがて、其の所謂天は、人間らしき神の心地す。そは如何にもあれ、日本には、別に天を祀れる殿堂も無く、祈禱の法式も無し。

朱子の倫理說。

朱子派の倫理は、自然學派の一派なり。其の說によれば、天地に四季の序あるが如く、萬物の長たる人間にも、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、の關係ありて、君には忠、親には孝、兄には悌ならざる可からず。夫婦の間は愛を要し、朋友の交には信を要す。又、人間の道には、仁義禮智信の五常あり。斯くの如く、倫理と自然との合一説は、既に孔夫子の教義の中に包含せらる。曰く「天、命之ヲ謂フ、性、率、性、之、謂、道、修、道、之、謂、教、(中庸首章の語)と説きて、「人の性は善」と論せり。故に、日本に於ける朱子

天人合一の說。

學の泰斗室鳩巢は「人は天地の心を以て心とす」と説きたり。

爲政の主眼。

爲政の主義も、亦此の哲學より出たるものの如し。其の說によれば、人君もし、前陳の諸徳を行はゞ、其の化、國民に及びて、國を治め天下を平かにすることを得べしと。

又、賞罰を正しくし、官に任ずること公平に、賢良の人を登庸して、人民を正道に導くすべしと勸めたり。

○宋學の研究には、

宗元學案百卷（清黃宗義原著、全祖望補成）これは、宋元兩代に於ける列傳體の哲學史なり。——理學宗傳二六卷（清孫奇逢）これは、宋代大學者の傳記學說を系統的に説明す。——性理大全七〇卷（明胡廣等奉勅撰）宗儒の學說を集む。併し此の書、甚だ不統一、蕪雜なる故に清康熙帝、李光地等に勅して、其の粹要を撮ましめしは、——御纂性理精義一二卷とす。

○此の外程朱の學說を研究するには、

二程遺書二六卷。——二程外書一二卷。——朱子全書六六卷（清李光地等奉勅撰）——古今學變（伊藤東淵）——東洋倫理學史上（木村鷹太郎）——支那教學史稿（狩野真知）——支那哲學史（遠藤隆吉）——支那哲學史（中内蝶二）——支那思想發達史（遠藤隆吉）——宋學概論（小柳司氣太）
○朱子の傳には簡明なるもの無し。
朱子年譜（四卷）考異（四卷）附錄（二卷）（清王德瑛）

日本人は、朱子の哲學を實地に應用したり。

日本人は朱子の哲學に何事をも附加せざりき。たゞ日本人の特色は、此の哲學の實地的應用にあり。殊に人間の道徳上の義務は重大の意義を與へたるにあり。

是に於て、日本人と交際せざる人々の胸中に起る問題は、日本國民の性質と、西歐諸國民の性質との異なる點は、果して何處なるかといふことなり。之に答ふる機會は實に

日本人と歐洲人と性質の異同。

此處なり。

忠義を奨励す。

忠の爲めには、生命財産は物の數ならず。

仲光の一例。

忠義の精神は古今を貫く。

蓋し、善と惡との標準は、大體に於て、彼是相同じ。其の著しく異なる處は、いづれの徳を先にすべきかにあり。最も著しき一例は、忠義心が、命令的なることなりとす。忠義は、當時の諸徳中最も重大なるものにして、他の諸徳を壓倒して其の發達を妨げたり。而して、此の忠義の意味は、一般の國民が天子に對して盡すを云ふよりも、寧ろ諸侯が將軍に對して盡す義務及び兩刀の人人が、其の主君に對する奉公を指すなり。此の奉公は、忠勤無二なるを以て尊しとし、君の爲には、悦んで其の勞に服するのみか、至重至愛の生命、榮譽をも犠牲として惜まざるなり。これ實に、机上の空論にあらずして、之を實行したりし實證は、日本の歴史、文學に多くこれ有り。其の適當なる一例はかの「仲光」なりとす。仲光は、淨瑠璃及び物語に採用せらるゝ有名なる主人公にして、罪無き我が愛子を手懸けて、罪ある主君の姫君の身代となしたり。其の凜平たる忠勇、潔き献身は、吾人をして、不覺に古羅馬の勇士を想見せしむ。徳川氏の政體は、此の献身前道徳が柱となりて、維持せられたるが、今は政體も代りて、これらは皆過去の事に屬し諸侯・將軍既に存せず。されど、今日の日本人を知る人は、流石に古武士の子孫だけありて、愛國奉公の精神の厚くして堅きは、今も昔の儘なるもの有るを認むべし。

孝行を奨励す。

忠臣は孝子の門より出づ。

敵討。忠孝の爲に、敵討起る。

君、辱めらるれば臣死す。

○武士道のことば、
 武士道叢書三冊(井上哲次郎、有馬祐政)——武士道叢論一冊(秋山樞菴)——武士道家訓集一冊(有馬祐政、秋山樞菴)——武士道史蹟一冊(久保天隨)——武家時代少年士道訓一冊(同上)——古今武家童子訓四冊(神田白龍子)——諸國敵討日本武士鑑二冊——武士道發達史一冊(足立栗園)——日本武士流史(繪川龍夫)——江戸時代の武士(瓜生菴)——武士道一冊(山内鏡舟口述)——日本倫理史稿一冊(湯木武比古)——日本倫理學案一冊(井上圓了)——日本倫理要論一冊(有馬祐政)——近頃國書刊行會の續々群書類從第十、教育部に、山鹿素行の謫居童問を収む。

右の忠義心に次いで、重ぜられしは孝行なりとす。日本の國家は、家族の發達したるものなれば、家もし齊はざれば、則ち天下平かならず。親に事へて孝順ならざる子は、長じて又、忠順の臣たること能はずといふ意見なれば、政治上よりするも、孝順の徳は大いに重く支那、日本の兩國に於て極端まで之を擴張したり。

爰に又、敵討といふことあり。これは、臣子たるものが君父に對して盡すべき重き務の一なり。

當時、日本の道徳に、加害者の罪を宥むるといふこと無く、君父もし他人の爲に弑せらるるか、辱を受くることあらば、其の臣子たるものは、之が爲に怖しき復讐をなさざるべからず。世の中に、これ程、殘酷なる義務の、又とあるべしや。これも、決して空論にあらず、實行したるためし頗る多し。且つ、これは、男子と同じく婦人にも課せられ

徳川時代の小説は敵討を作り、歐羅巴の小説には、戀愛談を作る。

平安時代と徳川時代に於ける日本人思想の相違。

自殺。生命輕蔑の隨一なるもの。

たり。但し、婦人の場合には、平民と同じく多少、單に、理想として仰がれたるのみ。もし臣子が敵討の舉に出づるもの有らば、萬口一致して、大いに其の忠孝を賞す。此の故に、日本近代の小説家は、敵討の事件を以て趣向を立つること、歐羅巴の小説家が、戀愛事件を以てするが如く、淨瑠璃や小説の多くは、此の物語なりとす。

當時の日本人の主義によれば、忠孝の前には生命も顧るに足らず。思ふに、平安時代の國民は、慈悲忍辱を主義とせる佛教の感化を受けて、其の性質の温和なりしは、當時の文學の示す所なり。之を江戸時代の歴史・小説に貫通せる生命輕蔑主義に比較するに、其の差甚だ顯著なりと云ふ可し。而して、生命輕蔑の隨一なるものを「自殺」とす。

日本當時の倫理は「自殺」を否定せずして、武士が自殺を命ぜられたる機會、其の數限り無し。例へば、回復すべからざる大耻辱を受けし時、不當の不面目を蒙りし時、大に憤怒したる時、裁判官が判決を過りし時、又は職務上過ちて瑣細なる罪を犯したる時、耻づべき性質のものにあらずる過失を爲したる時などは、潔く自害する習慣ありき。随つて、自害すれば、多少の名譽之に伴ふものとせり。もし、武士が主君の失政を諫むる時あらんか、其の諫言をして有功ならしむる爲に、自害して諫むることも屢々ありき。彼の四十七士が、凶暴なる復讐を執行したる後、自殺して其の罪を謝せしは、ミトホー

第六編 江戸時代 忠臣蔵の物語 五二二

ルド氏が *Fables of Old Japan* を讀める人は知るべし。此の外、著しき一例は、かの一八〇八年、ブリチッシュの軍艦が、無禮したるを拘留するか、撃破することを得ざりしを悔いて、深く自殺したる長崎奉行なりとす。

○文化五年、英人長崎に來りて民家を掠む。奉行松平康英撤か移して兵を殺したれども、亦忿にして及ばず。英船既に遁逃したり。康英其の機を失ひしを悔いて自殺せり。

又、徳川末代の將軍にも引用せらるべき一例あり。一八六九年の事なり。當時幕府の威權全く地に墜ちたるを以て、其の老臣某、將軍に勸告するに、宜しく自害して、徳川家累代の名譽を回復すべしと勸めしに、將軍此の諫を用ひず、其の席を立ちたるを以て、實貞なる此の諫言者は、別室に退いて、花々しく切腹ハツツをして果てたりき。(切腹を直譯すれば、belly-cut なるが、或滑稽好きの英人は、之を *happy despatch* と譯するに至當なりといへり。)故に、淨瑠璃にも、小説にも男女、子供が自害をなす場甚だ多し。而して、自殺にも覺悟の上の自害もあり、他より催されてする自害もあるなど一にして止らず。

さて、世界は廣くとも、人情、何處も同じければ、男女に關する道は、日本も歐洲もつゆ異なること無く、貞操は男女の美德として獎勵す。されど江戸時代には特に忠孝を勸

Happy despatch

貞操を獎勵す。

平安時代には、婦人活動し、徳川時代には、婦人萎縮したり。

婦人の守る可き第一の道徳。

親の爲めに、操を棄つ。

むること甚しかりし故、貞操の徳はや、疎そかとなり、理に於ては、一夫一婦の定めなれども、大家の主人の如きは、嗣子を得んが爲には、一人乃至數人の妾を蓄ふことを許されたり。併し、姪樂の爲にする者は罪せられ、官途に在る者は刑を蒙りぬ。

さて、當時の婦人の地位は、妻たると然らざるとを別たす、之を古代に比すれば、其の差の太だしきを見る。蓋し、支那思想の大いに發展するや、出來得る限り、婦人を服従の室内に閉ぢ籠めたるが故に、婦人は他人と交際すること無く、又筆を文學の界に絶ち、平安時代の傑作が、女性の筆なりしとは著しき變遷なりとす。さて、婦人の履むべき第一の道徳は、其の夫に貞順なることなり。寡婦の再婚は強ち禁ぜざれども再縁せざる寡婦は賞讃せらる。日本の書を読んで、屢々出會する貞操といふ詞は、則ち此の徳を指すなり。妻は、我が夫の敵を討つ義務あり、故に、妻は此の名譽を得んが爲に、其の身の榮譽を犠牲にする物語は、少くとも小説の中に見えたり。歐洲の或漫遊者及び小説家が「日本にては、未婚の少女の貞操は、之を度外に置く」と云へるは、全くの愚論なり。されど、乙女時代の貞操は、基督教國に比して、劣れるは争ひ難き事實なり。又、小説家・淨瑠璃家の抱ける道徳律によれば、我親の貧窮を救はん爲には、其の娘が、身を河竹に沈むるをも許すべく、子として當然の事とすらなしたり。斯る事件の、常に

文學中に見えたるは尤なることなり。

○當時婦人の讀み物は、

女大學(貝原益軒の著と稱せらる)之を評論したるものに、「新女大學」あり。福澤翁の著。——姫籠一六冊(藤井懶齋)——比賣鑑三卷(中村欽)——女今川一卷(澤田きち)——女今川操鑑一卷——武家時代女學叢書二卷(梅澤和軒)——貝原益軒の教女子法(益軒十訓の中)

さて又、遊女の事は、江戸時代の文學に記せること甚だ多し。何處の文學者にも有ることなるが、日本の文學者にも、之に一種の詩趣を帶びしむるに盡力せし者乏からざりき。ミットフォオド氏の説の如く、文學上、此の題目は、日本に於ての呼物なりき。日本の俗歌に、

角い卵と、女郎の誠

あれば、三十日に、月が出る。

と有るを見れば、遊女社會に一貫せる人情は、明白に察せ得らるべく、程度こそ違へ、歐洲も日本も、遊女に對する一般の感情が其の根本に於て同様なることをも察せらるなり。

○遊女のことば、

遊女考一冊(相模長昭)——吉原十二時(石川雅翠)以上二書温知叢書第五編にのる——遊女大學教草一冊

〔女大學に擬す〕——大通流一冊——都風俗鑑(一名都色欲大全)四冊——遊狀案文一冊——遊女文章大成一冊——浪花唄中妻しるし(一名新町細見)一冊——唄中一覽一冊(一名浪花宵樓志)——吉原細見四冊——吉原評林(一名吉原源氏六十帖評判)二冊(原菴)——吉原雀二卷——吉原伊勢物語二卷——吉原大徳初篇二卷(豊芥子)——吉原草摺引六卷(鈴木武平)——吉原楊枝(山東京傳)——此の外、新群書類從第七書目の、吉原書目録、好色本目録を看よ。就中、當時の好色本等の小説は、此の研究には必要なり。又、新群書類從第一(鼻部午睡下巻)に遊廓のことあり。——嬉遊笑覽にもあり。

信仰心は薄かりき。
我せとありき

日本人は、深き宗教心なし。
行儀作法、名節、質素、正直、寛大、嚴格等を奨勵す。

以上、諸徳の總評。

其類も後に本書並となる。

次は、當時の信仰なり。而して、此の信仰の厚薄を觀察するには、佛教流行の程度如何を察するをよしとす。而して、徳川時代には、佛教の評判は高からざりき、隨つて、信仰心は薄かりき。之を要するに、何れの時代にも、日本人は厚き信仰心を有せざりき。

此の他、當時の日本人には、行儀作法を正しくし、名節を重んじ、刀劍は武士の魂として、之を尊びたり。又質素、正直、寛大、嚴格等の諸徳を奨勵したるは、泰西と同様なるを以て、説明する必要無し。又、強者と弱者・從者と主君・親と子・夫と妻との諸徳なども省略すべし。日本の倫理學者は、是等を輕視して論ずること尠な稀なり。

以上説きたる倫理思想は、初め之を支那の哲學より得て、更に其の範圍を擴張し、枝葉を附加したるものなり。蓋し、これらは皆最初は、國民を感化し、刺戟するに於て、必要なる良藥なりしならんも、後には却つて、國民發展上の妨害となり、進歩の重荷とな

庭樹と形式。

りしものあり。其の重く、強く武士の双肩に落ち来るや、爲る事、爲す事、すべてく
嚴重なる格式・拘泥せる禮法に制せられて、遂には不幸にも、人權の自由をも没却す
るに至りぬ。約言すれば、徳川時代の此の過失は、廣く世上人事の各部に、過重の規
則を負はするに至れり。余嘗て、東京に在りし日、時の樞密顧問官故寺島伯と、美麗
なる庭園を逍遙せしこと有りき。伯は、池の傍に立てる樹の、植木屋が手を入れたる
爲め、枝振り巧に面白きが其の生長を妨げたる松樹を指し、余を顧みて、此處に、幕府
の制度に育てられたる日本思想の標本あり。而して、此の思想は、漢學が製作したる
ものを「*トコ*」はれぬ。

あゝ研究し來れば、われら歐羅巴人には、解説し難き人情の多きことよ。まして
や、遠き昔の日の本の人の思想は、さこそなりけめと想ひやらる。思ふに、かの
Herodotus, Plato を距ること年代甚だ遠し、然れども、其の觀念・感情・道徳的基
礎の、我等に於ける距離は、僅々四十年前に於ける日本人の思想よりも却つて近
し。

○ヘロドタス(四紀前四八四—四〇八)希臘最古の歴史家。歴史の父と稱せらる。旅行を好み小アジア、エ
ジプト、シリア、バビロンに到る。晩年、其の見聞を記録せるものは、ギリシアの自由・開化とヘルシア
の壓制・野蠻との軋及び之に乗じて起りしアレキサンダー大帝の功業なり。

○プラトーン(四紀前四二九—三四七)希臘の大哲學者、始めソクラテスの門に入り、次にピタゴラスに従ひ
て學べり。

さて、藤原惺窩は、漢學者どもの前驅者にして、其の弟子等は、代る／＼教師とな
り、爰に始めて、學燈を挑げて闇の世を照したり。されば、余は此處に於て、十七世
紀に於ける日本人が、知識を得んが爲めに、憤を發し、食を忘れし有様を寫さまほしけ
れども、事長ければ、割愛すべし。たゞ一言に、之を評すれば、最近三十年間に於ける
日本人が洋學に對せし熱心に等しかるべし。

徳川世々の將軍は、家康の遺志に従ひて、其の權力の及ぶ限り、一方ならず、學問を
奨勵し、圖書館を設け、學校を起し、學者を保護し、優等の學生をば賞したり。中に
も五代將軍綱吉(西紀一六八〇—一七〇九)は、非凡の政治家なりしが、學を好みて、
儒者を聚め、政務の餘暇をば、講學に費し、遂には、諸侯・家老・神官・僧侶などを召
して、自ら經籍を講釋したり。(野史)是より江戸は、辭平として文學の淵藪となりぬ。

「上の好む所」の諺の如く、諸侯も亦争ひて、名儒を聘し、學校を建て、和漢の經史を
教へ、農工商の人民も、亦學問を疎かにせずして、近所の寺院に、寺子屋といふを
設けて、讀み、書き、算盤の道を學びたり。

文學に對する、徳
川將軍代々の貢
獻。

地方の勤學。

○寺子屋のことは、
日本近世教育史(横山述三)を見よ。

余、此の處に於て、當時最も有名なりし漢學者をば、悉く調査し、夥多の著書をば批評したけれども、到底なし得べきことならねば、省きて、最も必要なる林羅山に就て一言すべし。

林羅山。

林羅山、剃髮して道春と號す。此の他、尙十二個の號あり。さて號は、此の人のみ附けたるにあらず、すべての漢學者は、恣に多數の別名を吾身に附けて、日本文學上に於て、修史家・著述家をして混雜せしめたり。道春(一五八三—一六五七)は、實にかの惺窩の門人にして、篤く信じて學を好むの人、生涯一日として書を手にせざる日は無かりしといふ。傳へ聞く、嘗て、其の邸類焼に遇ひし時、火を避くるに際し、書を抱いて襦籠に乗り、走る路すがら、書に訓點を施したりとぞ。故に、其の著述、文章すべて一百七十種あり、多くは、學問、道德の事。此の外、史家に必要なる記述、其の他の雜著一百五十卷あり。盛なりと謂ふべし。

道春の勉強。

道春又、幕府に仕へて、法律を草し、樞務に參與したり。これ、漢學者が幕府に仕官せし始にして、林家相續いて儒官となり、一千八百六十七年の改革に至れり。

○林羅山(正親町二三四三—後四院二三一七)名は信勝、字子信、號は道春、羅山、羅浮山、浮山、羅洞、四維、長胡、蝶洞、瓢庵、夕顏庵、雲世溪、尊經堂、梅花村、壽眼。

○著書に—東陸綱要—儒門思問錄—詐術治要補—倭漢法制—荒政恤民錄—本朝編年錄—寛永諸家系圖傳—貞觀政要抄—神代系皇代系圖大綱—鎌倉將軍家譜—京都將軍家譜—織田信長譜—豐臣秀吉譜—中朝帝王譜—六朝考—渾天儀考—周易手記—性理字義詳解—經籍和字考—吳子抄—司馬法抄—尉繚子抄—六韜抄—羅山涉獵抄—朝鮮考—寛永私記(一名夕顏巷夜話)—四奇集註抄—道統小傳—駿府政事錄—語抄—神道秘傳—折中併解(慶長以來漢學者著述目錄)。

林春齋。

○傳記は、近世叢話—先哲叢談—非實文編—野史儒林傳第二五三卷—徳川三百年史中編
其の子、春齋(一六一八—一六八〇)は、一八五二年頃「王代一覽」といふ日本文学史を編纂したり。何れの點も、甚だつまら無き書なれども、クラブロス氏が之を佛譯して一八三八年、Oriental Translation Fund より出版せられたるを以て爰に記すのみ。

其の後、學問、道德共に一世の師表として推重せられ、記憶せらるる幾多の學者輩出したり。併し、

○林春齋(後水尾二二七八—元和二三四〇)此の人の傳記は、春齋墓碑—近世叢話—先哲叢談—大日本人名辭彙。

○著書は——寛永系圖——本朝通鑑——周易本義首書——王代一覽——職原抄聞書——古文孝經講解——孟子詳解——歷代笠等錄——本朝言行錄——日本百將傳——職原抄會通——和漢平談——本朝事蹟考——改元物語——諸家系圖傳——歷代叙略抄——弓書等（慶長以來漢學者著述目錄、近代名家著述目錄を看よ）。

貝原益軒。

今これ等を省きて、貝原益軒（一六三〇——一七一四）を記すべし。益軒は筑前福岡の人にして、家は世々其の藩臣なり。父は醫術を以て仕へたりし故、益軒亦醫學を修め、又佛書を読みしが、儒學を、兄元端に受くるに及んで、佛を棄て、一心を經籍の研究に委ねたり。其の後、明暦中京都に上りて、松永尺五、木下順庵、山崎闇齋等の門に遊びて、業大いに進む。初め、陸王の學を好みしが、後之を棄て、程朱に歸し、力學多年にして、博覽衆に越えたり。性謙遜にして傲らず、嘗て、海路より歸國の船中、乗り合せたる一青年、人々に向ひ意氣揚々として經義を説く、益軒、黙聽して、一言の是非も陳べざりし。上陸に臨んで、互に姓名を告げて再會を契りし時、かの青年、爰に初めて貝原先生の我が傍に在りしを知つて大に慚ぢ、挨拶も、そこへ我名も告げずして逃げ行きたりとぞ。又強記にして、見聞せしものは、一も忘れず。學成つて國に歸り、藩の學職に就き、爾後三主に歴事し、西紀一七〇〇年（元祿十三年）養老金を賜うて致仕し、居を京都に定めて、殘年を送りぬ。其の夫人、名は初、字は得生、東

益軒の夫人。

益軒は博大なる著述家なり。

益軒が著書の性質、

益軒の識見。

益軒の児童教育法。

軒と號しき。亦學才ありて、經史に通じ、文學をよくし、隸書に巧に、傍ら和歌を嗜めり。益軒の旅行に従遊して、文學上の著作を輔けたり。

益軒は、博大なる著述家にして、著書一百餘種あり。道德論あり、註釋あり、植物の書あり、旅行記あり。而して、益軒の書を著すや、其の志、一般の國民を利用するにあり、故に、正しき國語を以て記したるもの多く、其の文體雄健なれども、修辭學上の修飾無く、當時の小説家、淨瑠璃家が腐心せる鎖々たる語句に拘泥せず、ひたすら、兒童にも、淺學の人にも解し易からしめんことを務め、能ふ限りは、或は假字を用ひ、或は口語を用ひ、反覆叮嚀循々と説きて、尙悟らざるを恐るゝが如し。蓋し、益軒は、當時の碩學なりけんに、學を街ふ心つゆほども無かりき。故に、日本の書籍中、此の人の著書ほど解し易きはあらず。但、一つの缺點は、江戸時代の著述家の通弊なる反復冗漫くだくしきなり。

益軒は、着實の眼を以て、よく時勢と國狀とを洞察し、商量して書を著すが故に、其の書は、公平温健なる道德を説き、十分なる常識を以て、着實なる論を試みなるが故、其の國民を感化し、社會を教育したる功績は、實に計り難きものあり。

次の「童子訓」の文は此の書の性質を幾分か説明すべしと思ふ。而して、此の書は、彼

が八十歳の時に完成したる教育上の論文なり。但し、英譯文は多少の省譯、意譯あり。富貴の家には、能き人をえらびて、早く其の子につくべし。悪しき人になれそむべからず。貧家の子も、早く善き友に交らしめ、あしき事にならはしむべからず。凡小兒は、早く教ふると、左右の人をえらぶと、是、古人の子を育つる良法なり。かならず、是を法とすべし。

凡、小兒を育つるには、始めて生れたる時、乳母を求むるに、必ず、温和にして慎しみ、まめやかに詞少きものをえらぶべし。

始めて飯を喰ひ、物を云ひ、人の面を見て悦び、いかなる心を知る時より教ふべし。

又、たはひれに、恐しき事どもを云ひ聞かせ、まどしむるれば、後に臆病の癖となる。幽霊ばけもの、怪しく賦なき物語、必ず、いましめて聞かしむべからず。又衣服をあつくし、乳食にあかしむれば必ず病多し。

小兒を育つるには、前にも聞えつるやうに、先づ乳母かしづき従ふものをえらぶべし。心穩にして邪なく、慎しみて言葉少きをよしとす。わるがしこく、口き、偽りの詞多く、心邪にして僻み、氣猛く、恣にふるまひ、酩酊を好むを惡しとす。

幼き時より、心ことばに、忠信を主として、偽なからしむべし。もし、人をあざむき、偽を云はゞ、嚴しくいましむべし。こなたよりも、幼子を欺きて、偽を教ふべからず。こなたより偽れば、小兒是に習ふものなり。

小兒に學問を教ふるに、初より人品よき師を求むべし。才學ありとも、惡しき師に隨はしむべからず。師は、小兒の見習ふ所の手本なればなり。

子弟を教ふるには、先づ其の交る所の友をえらぶべし。古人の語に、年若き子弟、たとひ、年を終るまで書を讀まずとも、一日小人に交るべからずと云へり。

少年にて、師にあひて、物をならふに、朝は師に學び、晝は朝學びたる事を勤め、夕はいよくかさね習ひ、夜ふして、一日の中に、口と言ひ、身に行ひたる事を顧みて、あやまちあらば、くいて後のいましめとすべし。

古、もろこしにて、小兒十歳なれば、外に出して、晝夜師に隨ひ、學問所に居らしめ、常に父母の家にかかず。古人此の法深き意あり。如何となれば、小兒常に父母の側に居て、恩愛にならへば、愛をたのみ、恩になれて、日々にあまへ、氣隨になり、艱苦の勤なくして、徒らに、時日を過し、教行はれず。且、孝悌の道を父兄の教ふるは、我が身によく仕へよとのすゝめなれば、同じくは、師より教へて行はしむるが

宜し。故に、父母の側をはなれ、晝夜外に出して、教を師にうけしめ、學友に交らしむれば、まごり忘りなく、智慧日々に明らかに、仁義日々に正しくなる。是古人の子を育つるに、内にをらしめずして、外に出せし意なり。

あよそ、書を讀むには、必ずまづ、手を洗ひ、心に慎しみ、容を正しくし、几案のほとりと拂ひ、書冊を正しく机上にまき跪きて讀むべし。師に書を讀み習ふ時は、高さ几案の上に置くべからず。帙の上、或は文匣、矮案の上に乗せて讀むべし。必ず、人の踏む席上に置くべからず。書を穢す事なかれ。書を讀み終らば、もとの如く納むべし。もし、急速のことありて、たち去るとも、必ず、まづむべし。又、背をなげ、書の上を越ゆべからず。書を枕とする事なかれ。書の脹を巻きて、折りかへすと勿れ。睡を以て幅をあくる事勿れ。古紙に經傳の詞義、聖賢の姓名あらば、慎しみて、仙事に用ふべからず。又、君上の御名、父母の姓名ある故紙を穢すべからず。(此S別文と譯文に添ひて抜抄したる也。)

In the houses of the great, good persons should be chosen from the first to be attached to the child. Even the poor should be careful, so far as their circumstances will permit, that their children should associate with good people.

This is teaching of the [Chinese] sages.

A well-nurse should be of a gentle disposition, staid and grave of demeanour, and of few words.

A boy's education should begin from the time when he can eat rice, speak a little, and show pleasure or anger.

Some nurses make cowards of children by wantonly telling them frightful stories. Ghost stories and the like should not be told to children. They should not be too warmly clad, or have too much to eat.

Cunning, chattering, lying women should not be engaged as nurses. Drunkards, self-willed or malicious persons should also be avoided.

From their infancy, truth in word and thought should be made of the first importance. Children should be severely punished for lying or deceit. Let their parents be careful not to deceive them, for this is another way of teaching them to deceive.

A tutor should be a man of upright life. A child should not be put to

learn of a disreputable person, no matter how clever he may be.

Better for a child to lose a year's study than consort for a day with a base companion.

Every night the child's sayings and actions during the day should be reviewed, and if necessary, punishment administered.

At the age of ten a boy should go to school. If he remains longer at home he is apt to be spoiled by his parents.

Before sitting down to study, a boy should wash his hands, set a guard upon his thoughts, and compose his countenance. He should brush the dust off his desk, place his books upon it in an orderly manner, and read them in a kneeling posture. When he is reading to his teacher, he should not rest his book on a high desk, but on its case or on a low stand. It should certainly not be placed on the floor. Books should be kept clean, and when they are no longer required, the covers should be put on, and they should be put back in their place. This should be done even when the pupil is called

女子教育法。

away for some urgency. Books should not be flung about, stridden over, or used as pillows. The corners should not be turned down, or spittle used to raise the leaves. If waste paper contains texts from the classics or the names of sages, boys should be careful not to apply it to common purposes. Nor should waste paper with the names of one's parents or lord be defiled.

益軒は、女子教育の爲にとて「童子訓」の第五卷目を之に充てたり。彼は、温和と従順とを以て婦人の二徳とし、又別に、婦人に要する良性質を教へて曰く、

○女に四行あり。一に婦徳、二に婦言、三に婦容、四に婦功。此の四は、女の勤め行ふべからむなり。

婦徳とは、心だてよからむなり。心貞くしつちをよへ、和順なるを徳とす。

婦言とは、言葉のよからむなり。偽れることを言はず、言を撰びて、似氣なる悪言を出さず。言ふべし時言ひて、不用なる事を言はず。人其の言ふこととあらばあるなり。

婦容とは、形のよからむなり。おながらにかたまりを専らにせられども、女は容なり

かにか、をかしからず、粧のあてやかに、身持されいにいさぎよく、衣服もあつか
き穢なき、是、婦容なり。

婦功とは、女のつとむべさむなり。ぬひ物をし、ちみつむをとし、衣服を調へ
て、専らつとむべさむなり。戯れ遊び笑ふことを好まず、食物飲食するをよ
くし、舅夫賓客に進むる、是、婦功なり。

此の四は女人の職分なり。つとめずんばあるべからず。心を用ひて、つとめな
ば、たれもなるべさむなり。誇りするをよみて、この職をばしつとむべさむなり。

1st. A womanly disposition, as shown in modesty and submissiveness.

2nd. Womanly language. She should be careful in the choice of words, and avoid lying and unseemly expressions. She should speak when necessary, and be silent at other times. She should not be averse to listening to others.

3rd. Womanly apparel. She should be cleanly, avoid undue ornament, and have a proper regard to taste and refinement.

4th. Womanly arts. These include sewing, reeling silk, making clothes, and cooking.

Everything impure should be kept from a girl's ears. Popular songs and the popular drama are not for them. The *Ise Monogatari* and *Genji Monogatari* are objectionable on account of their immoral tendency.

次に、益軒は、左の十三箇條の心得を、世の父母に教へて、其の娘他に嫁ぐ時、書きて
與へよと云へり。

○また、女子の嫁する時、兼てより、父母の教ふべき事十三ヶ條あり。

一に曰く、我が家においては、我が父母に専ら孝養を行ふ理なり。されども、夫
の家に行きては、専ら舅姑を我が二親よりも猶重んじて、厚く愛しみ敬ひ、孝行を
盡くすべし。親の方を重んじ、舅の方を輕んずる事なかれ。舅の方に、朝夕の見舞
をかくべからず。舅の方のつとむべさむを怠るべからず。もし、舅の仰あらば、
愼しみて行ひて背く可からず。凡の事、舅姑に問ひて、其の教に任すべし。舅姑も
し、我を愛せずして、謗り惡むとも、怒り怨むる事、なかれ。孝を盡くして、誠を以
て感ぜしむれば、彼もまた人心あれば、後は必ず、心和きていつくしみある理なり。
二に曰く、婦人は、別に主君無し。夫を誠に主君と思ひて、敬ひ愼しみて事ふべ

し、輕しめ侮るべからず。和らぎ順ひて、其の心に違ふべからず。凡、婦人の道は従ふにあり。夫に對するに顔色言葉遣ひ慇懃にへり下り和順なるべし。いふりにして不順なるべからず。ちごりて無禮なるべからず。是、女子第一のつとめなり。夫の教いましめあらば、其の命に背くべからず。疑はしき事は、夫に問ひて其の命を受くべし。夫問ふ事あらば、正しく答ふべし。そのいらへるをかにすべからず。答の正しからず、其の理の聞えざるは、無禮なり。夫もし怒り責むる事あらば、畏れて従ふべし。怒り争ひて其の心に逆ふべからず。それ、婦人は夫を以て天とす。夫を侮ることはかへすく有るべからず。夫を侮り背きて、天より怒り責めらるゝに至るは、是、婦人の不徳の甚しきにて、大なる恥なり。故に女は常に夫を敬ひ畏れて、慎しみ事ふべし。夫に賤しめられ、責めらるゝは、我が心より出でたる恥なり。

三に曰く、こじうとこじうとめは、夫の兄弟なれば、情深くすべし。また、こじうとこじうとめに謗られ惡まるれば、眞の心に背きて、我が身の爲めにもよからず。睦じく和睦すれば、眞の心にならぶ。然れば、こじうとの心も亦失ふべからず。又、姉嫂を親しみ睦じくすべし。ことさら、夫の兄嫂はあつく敬ふべし。あによ

めをば、我が姉と同じくすべし。座につき道を行くも、へり下り後れて行くべし。四に曰く、嫉妬の心、ゆめく起すべからず。夫淫行あらば諫むべし、怒り恨むべからず。嫉妬甚しければ、其の氣色詞もちとろしくすまじく、かへりて、夫に疎まれすまめらるゝものなり。業平の妻の、「夜半にや君かひとり行くらん」とよみしこそ、賊に女の道にかなひてやさしく聞ゆめれ。ちよそ、婦人、心の猛く怒り多きは、眞夫に疎まれ、家人に謗られて、家を亂し、人をそこなふ。女の道に於て大に背けり。腹たつことあらば、ちよへて忍ぶべし、色に顯はすべからず。女は物ねんじして、心のどかなること、幸も見はつる理なれ。

五に曰く、夫もし、不義あり、過あらば、我が色を和らげ、聲を悦ばしめ、氣をへり下りて諫むべし。諫をきかずして怒らば、先、しばらくやめて、後に、夫の心和らぎたる時、また諫むべし。夫不義なりとも、顔色をはげしくし、聲をいららげ、心氣をあらくして、夫にさからひ背く事なかれ。是亦、婦女敬順の道に背くのみならず、夫に疎まるゝわざなり。

六に曰く、言を慎しみて多くすべからず。假にも、人をそしり、偽りをいふべからず。人の謗を聞くことあらば、心にをさめて、人に傳へ語るべからず。謗を言ひ

傳ふるより、父子兄弟・夫婦一家の間も、不和になり、家内治まらず。

七に曰く、女は常に心遣ひして、其の身をかく慎しみ守るべし、夙に起き夜にいぬ、晝はいねずして、家事に心を用ひ、怠りなくつとめて、家を治め、織縫うみつむぎ怠るべからず。また、酒茶など多く好みて、癖とすべからず。淫聲を聞くことを好みて、淫樂を習ふべからず。是、女子の心をとらかすものなり。たはひれ遊ぶを好むべならず。宮寺など、すべて人の多く遊ぶ所に、四十歳より内は、猥りに行く可からず。

八に曰く、巫覡などのわざにまひて、神佛を穢し近づき、猥りに祈り詔ふ可からず。只人間の勤を専らになすべし。目に見えぬ鬼神の方に、心を迷はすべからず。九に曰く、人の妻となりては、其の家をよく保つべし。妻の行悪しく放逸なれば、家を破る。財を用ふるに儉約にして、費をなすべからず。をごとりを戒むべし。衣服飲食器物など、其の分に隨ひ、あひにあひたるを用ふべし。猥りにかざりをなし、分限に過ぎたるを好むべからず。妻おごりて財を費せば、其の家必ず貧窮に苦しめり。夫たるもの、これに打ちまかせて、その是非を察せざるは愚なりと云ふべし。

十に曰く、若き時は、夫の兄弟・親戚・朋友・或は下部などの若き男來らんに、なづきひ近づきて、打ちとげ物晤すべからず。慎しみて男女の隔を固くすべし。如何なるとみの用ありとも、若き男に文など通はすることは、必ずあるべからず。下部を閨門の内に入るべからず。凡男女の隔、輕々しからず、身をかく慎しむべし。十一に曰く、身のかざりも、衣服の染色模様も、目にたゞざるをよしとす。身と衣服との穢れずして清けなるはよし。衣服と身のかざりに、すぐれてきよらを好み、人の目に立つ程なるは悪し。衣服の模様は、其の年よりすぐみておいらかなるが、しんじやうにしてらうたく見ゆ。すぐれて若やかに、大なる模様は、目にたちていやし。我が家の分限にすぎて、衣服に、きよらを好み、身をかざるべからず。只、我が身にかなひ、似合たる衣服を着るべし。心は身の主なり、尊ぶべし。衣服は身の外にあるものなり、輕し。衣服をかざりて人にほこるは、衣服より尊ぶべきその心を失へるなり。凡、人はその心さま身の振舞をこそ潔よくせほしけれ。身のかざりは外の事なれば、只、身に應じたる衣服を用ひて、あながちにかざりて、外にかゝやかし人にほこる可からず。愚なる俗人また、賤しき下部、しづの女などに、衣服の花やかなるを譽られたりとも益無し。よき人は、却て誇りいやしむべきわざに

傳ふるより、父子兄弟・夫婦一家の間も、不和になり、家内治まらず。

七に曰く、女は常に心遣ひして、其の身をかたく慎しみ守るべし、夙に起き夜に
いぬ、晝はいねすして、家事に心を用ひ、怠りなくつとめて、家を治め、穢穢うみつ
むぎ怠るべからず。また、酒茶など多く好みて、癖とすべからず。淫聲を聞くこと
を好みて、淫樂を習ふべからず。是、女子の心をとらかすものなり。たはむれ遊
ぶを好むべならず。宮寺など、すべて人の多く遊ぶ所に、四十歳より内は、猥りに
行く可からず。

八に曰く、巫覡などのわざにまひて、神佛を穢し近づき、猥りに祈り諂ふ可から
ず。只人間の勤を専らになすべし。目に見えぬ鬼神の方に、心を迷はすべからず。
九に曰く、人の妻となりては、其の家をよく保つべし。妻の行悪しく放逸なれ
ば、家を破る。財を用ふるに儉約にして、費をなすべからず。をごりを戒むべし。
衣服・飲食器物など、其の分に隨ひ、あひにあひたるを用ふべし。猥りにかざりをな
し、分限に過ぎたるを好むべからず。妻ちごりて財を費せば、其の家必ず貧窮に
苦しめり。夫たるもの、これに打ちまかせて、その是非を察せざるは愚なりと云ふ
べし。

十に曰く、若き時は、夫の兄弟・親戚・朋友・或は下部などの若き男來らんに、なづ
さひ近づきて、打ちとけ物語すべからず。慎しみて男女の隔を固くすべし。如何
なるとみの用ありとも、若き男に文など通はすることは、必ずあるべからず。下部
を閨門の内に入るべからず。凡男女の隔、輕々しからず、身をかたく慎しむべし。
十一に曰く、身のかざりも、衣服の染色模様も、目にたゞざるをよしとす。身と
衣服との穢れずして清げなるはよし。衣服と身のかざりに、すぐれてきよらを好
み、人の目に立つ程なるは悪し。衣服の模様は、其の年よりすぐみてもいらかなる
が、じんじやうにしてらうたく見ゆ。すぐれて若やかに、大なる模様は、目にたちて
いやし。我が家の分限にすぎて、衣服に、きよらを好み、身をかざるべからず。只、我
が身にかなひ、似合たる衣服を着るべし。心は身の主なり、尊ぶべし。衣服は身の外
にあるものなり、輕し。衣服をかざりて人にほこるは、衣服より尊ぶべきその心を
失へるなり。凡、人はその心さす身の振舞をこそ潔よくせほしけれ。身のかざり
は外の事なれば、只、身に應じたる衣服を用ひて、あながちにかざりて、外にか
やかし人にほこる可からず。愚なる俗人また、賤しき下部、しづの女などに、衣服
の花やかなるを舉られたりとも益無し。よき人は、却て誇りいやしむべきわざに

こそ。

十二に曰く、我が里の親の方にわたくしし、舅姑夫の方を次にすべからず。正月佳節などにも、まづ夫の方の客をつとめて、親の里には、次の日行きてまみゆべし。夫の方をすて、佳節に我が親の里に行くべからず。舅夫の許さざるに、父母兄弟の方に行く可からず。私に親の方へ贈物すべからず。また、我が里のよき事をほこりて、譽め語るべからず。

十三に曰く、下女を使ふに心を用ふべし。言ひがひなきものは、ならはし悪くして、智慧なく、心かたましく、其のうへ、物いふことなきがなし。夫の事、舅姑の事、こじうとの事など、我が心にかなはぬ事あれば、狼りに其の主に誇り聞かせて、それをかへりて忠と思へり。婦人として智慧なくして、それを信じては、必ず恨出来易し。固より、夫の家は、皆他人なれば、恨み背き恩愛を捨つる事易し。慎しんで、下女の言を信じ、大切なる舅こじうとの親しみをうすくすべからず。もし、下女すぐれてかたましく、口がましくて、悪しき者ならば、早く退ひ遣るべし。かやうのものは、必ず家道を亂し、親戚の中をいひ妨ぐるものなり。恐るべし。又、下女などの人を誘ふを聞き用ふる事なかれ。殊に、夫の方の一類の事をかりそめ

にも、誘らしむべからず。下女の口を信じては、舅姑夫などに和睦無くして、恨み背くに至る。慎しんで讒を信ずべからず。甚恐るべし。又賤しき者を使ふには、我が思ふにかなはぬ事のみ多し。夫を怒りののしりて止まざれば、せはしく腹立つ事多く、家の内静ならず。悪しき事は時々言ひ教へて、罪を正すべし。怒りののしるべからず。少しの過は、こらへて怒るべからず。心の中にはあはれみ深くして、外には行儀堅くしましめて、意づかざるやうに使ふべし。うるかせなれば、必ず行儀亂れ意りがちにて、禮儀さへむき、科を犯すに至る。與へ惠むべき事あらば、財を惜むべからず。但、我が氣に入りたること、忠なき者に狼りに財物を與ふべからず。

1. Be respectful and obedient to your parents-in-law.
2. A woman has no [feudal] lord. She should reverence and obey her husband instead.
3. Cultivate friendly relations with your husband's relatives.
4. Avoid jealousy. If your husband offends, remonstrate with him gently, without hate or anger.
5. Generally, when your husband does wrong, it is your duty to remon-

strate with him gently and affectionately.

6. Be of few words. Avoid abusive language and falsehood.

7. Be always circumspect in your behaviour. Get up early. Go to bed at midnight. Do not indulge in a siesta. Attend diligently to the work of the house. Do not become addicted to saké or tea. Avoid listening to lewd songs or music. Shinto shrines and Buddhist temples being public resorts for pleasure, should be sparingly visited before the age of forty.

8. Have nothing to do with fortune-tellers or mediums, and do not offend the gods and Buddha by too familiar importunities. Attend to your human duties, and do not let your heart run astray after invisible supernatural beings.

9. Economy in domestic matters is all-important.

10. Keep young men at a distance. On no account have any written correspondence with them. Male domestics should not be allowed to enter the women's apartments.

11. Avoid conspicuous colours and patterns in your dress. Choose those suitable for a somewhat older person than yourself.

12. In everything your husband and his parents should come before your own parents.

13. Do not attend to the tattle of female servants.

益軒とウオーツウ
オーズ。

右の如きは、全く平凡なる思想なるが、益軒は時々、高尚なる思想界に逍遙することあり、左の、「樂訓」の拔萃の如きは是なり。彼は實に、ウオーツウオスの流なりと謂ふべし。

○内の樂を本とし、耳目を以て、外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感じれば、其の樂かぎりなし。此の樂、朝夕のねに、目の前にみちくして、あまらあり。これをたのしめる人は、すなはち山水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず。たからもて買ふにあらざれば、一錢をつひやらず、心にまかせて、ほしきまゝにとりて用ふれどもつきず。つねに我が物として領せども、人いさはず。いかにとなれば、山水風月の佳景は、もと

より定まれる主なければなり。

かく、天地の内きはまり無き樂を知りて、たのしめる人は、富貴の驕樂をうらやまず、其の樂富貴にまさればなり。此の樂をしらざる人は、樂しむべき事、目のまへにつねにみち／＼とちほけれど、其の樂をしらざれば、樂しません。

世俗の樂は、其の樂いまだやまざるに、はやく我が身のくるしみとをなれる。たとへば、味よき物をむちほりて、ほし／＼に、のみくへば、はじめは快しといへど、やがて病ちこり、身の苦となれるが如し。凡、世俗の樂は、心をまよはし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂は、まよひなくして、心をやしなふ。外物をもて云はら、月花をめて、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、其の樂淡ければ、ひねもす樂しめども、身にわざはひなく、人のとがめ、神のさむるわざにあらず。此の樂貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は、其のちこり、そこたりにすぢみて、此の樂をしらず。貧賤の人は、此の二の失すくなし。志だにあれば、此の樂を得やすし。

If we make inward pleasures our chief aim, and use the ears and eyes simply as the means of procuring such delights from without, we shall not be

molested by the lusts of these senses. If we open our hearts to the beauty of heaven, earth, and the ten thousand created things, they will yield us pleasure without limit, pleasure always before our eyes, night and morning, full and overflowing. The man who takes delight in such things becomes the owner of the mountains and streams, of the moon and flowers, and needs not to pay his court to others in order to enjoy them. They are not bought with treasure. Without the expenditure of a single cash he may use them to his heart's content, and yet never exhaust them. And although he enjoys possession of them as his owl, no man will wrangle with him in order to deprive him of them. The reason is that the beauty of mountain and river, moon and flowers, has from the beginning no fixed owner.

He who knows the boundless sources of delight which are thus contained in the universe, and who finds his enjoyment therein, envies not the luxurious pleasures of the rich and great; for such enjoyments are beyond those of wealth and honours. He who is unconscious of them cannot enjoy the delect-

table things in the greatest abundance which are every day before his eyes. Vulgar pleasures, even before they pass, become a torment to the body. If, for example, carried away by desire, we eat and drink our fill of dainty things, it is pleasant at first, but disease and suffering soon follow. In general, vulgar pleasure corrupts the heart, injure the constitution, and end in misery. The pleasures of the man of worth, on the other hand, nourish the heart and do not entice us astray. To speak in terms of outward things, the pleasures which we derive from the love of the moon or of flowers, from gazing on the hills and streams, from humming to the wind or following the flight of birds with envy, are of a mild nature. We may take delight in them all day long and do ourselves no harm. Man will not blame us, nor God remonstrate with us for indulgence in it. It is easy to be attained, even by the poor and needy, and has no ill consequences. The rich and great, absorbed in luxury and indolence, know not these pleasures; but the poor man, little affected by such hindrances, may readily procure them if he only

chooses to do so.

園藝 (家道訓より)

○宅に、はじめてうつらば、まづ、早く菓木を植うべし。次に他木に及ぶべし。十年の計は、木を植うるにあり。樹木を植うるには、菓を先とし、花を次とし、葉樹を又其の次とす。菓は、尤も人に益あり、多く植うべし。取むき、橘柑柚を多く植うべし。みのりて熟したるは、うるはしきこと花に劣らず。柿梨栗椒など、好品をもとめ植うべし、花木は、梅を先とす。紅梅もよし、櫻亦よし。早くちるうらめし。つばき、花久しくさきて葉うるはし。挿せば活きやすく、花早く開く。海棠、躑躅、杜鵑花もよし。葉樹は杉、檜、樅、金槿、羅漢松、冬青樹などよし。竹を北方に多く植うべし。火と風をよせぎ、又、さうりて時用に備ふ。前庭には、柳、櫻、松、柏など植うべし。しげきを忌む。陰氣ふかく、夏は蚊多くしてうるさし。又、菜は、日用の助けとなり、宅中に植うるは、新しくして、市に買ふにまされり。其の葉さかへてうるはしきは、目をよるこばすこと花にあとらず。園に草木をうるゑて愛するも、亦、心を養ふ一助なり。いとまある時、少し心を

用ひて、あるにまかせて、求めやすき物を植うべし。得がたき物をしてひて得んとし、みだりに人に乞ひもとめ、あたひ多くつひやし、其の品の多きと、花のすべれたるにほなり、花のよかきおほいなりとかなほしかりせ、昔きくなら、今のやうらひなり、心細きなりなり。或、紫どせぬふ、紅き花ひるなり。

ON GARDENING.

When you move into a house your first care ought to be plant fruit-trees. Others may come after. Forethought for ten years consists in planting trees. In planting, fruit should come first flowers should be your next care, and foliage last of all. Fruit is of the greatest use to man; and fruit-trees should be planted in large numbers, particularly the orange and the lime. When their fruit has formed and ripened, it is not inferior in beauty to flowers. In planting persimmons, pears, chestnuts, and pepper, the best sorts should be selected. For flowering trees, the ordinary plum should come first. The red-blossomed plum is also good, and the cherry. It is a pity it sheds its flowers so soon. The carnellia remains long in bloom, and its leaves

are beautiful. It grows readily from cuttings, and blossoms early. The *k-itcho* [*Pyrus spectabilis*], and azalens of different kinds, are also to be commended. For foliage-trees, choose the cryptomeria, the *Thuja obtusa*, the podocarpus, and evergreen-trees generally. Bamboos should be planted on the northern side, as a protection against fire and wind. They may be cut down from time to time, and put away for use on occasion. In the front garden plant willows, cherry-trees, fir, and cryptomerias. Avoid planting too thickly: it makes too much moisture, and in summer harbours mosquitoes, which are a plague.

Vegetables may be planted for everyday use. They are fresher when grown at home than if bought in the market. Besides, the luxuriance of their leaves delights the eye not less than the beauty of flowers.

Moreover it tends to edify the heart if we plant trees and herbs in our gardens and love them. In our leisure moments we should pay some attention to looking for things easy to get, just as they may turn up, and plant-

ing them. If we strive after procuring things hard to come at, and either beg them unconsciously of our friends, or buy them at a high price, we get proud of the number of kinds we have collected, or of the superiority of the flowers. This leads to rivalry in the goodness of the flowers. Trouble ensues, and heart-burnings, which are injurious to self-discipline, yield no pleasure, and cause nothing but anxiety.

益軒の詩歌。

益軒又詩を作り、歌を詠む。其の辭世の歌は左の如し。

茶し方は 一夜ばかりの 心地して

やんぢあまの 夢を みしかな

The past
Seems to me
Like a single night:
Ah! the dream
Of more than eighty years!

(譯者は、序に益軒の辭世の詩も二首あるを引くべし。)

平生 心曲有、誰知
存順没 寧、雖不克

常畏 天威、欲勿欺

朝聞 夕死、豈不悲

幼求 斯道、在孤懷

德業 無成、夙志乖

八十五年爲、曷事

讀書 獨樂、是生涯

貝原益軒(明正二二九〇—中御門二二七四)名は篤信。字は子誠。號は益軒、又は損軒。久兵衛と稱す。

(1)傳記は——近世叢語——甘雨亭叢書——近世畸人傳——先哲叢談——事實文編——野史儒林傳——徳川三百
年史中編——大日本人名辭書——貝原益軒(沖野辰之助)——貝原益軒傳(石原笠軒)〔少年讀本第二二編〕
——益軒先生の傳(益軒十訓の中)——益軒之教育法(三宅米吉)

(2)著書は、五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、文訓、武訓、家道訓、樂訓、君子訓、養生訓(以上は益軒十訓と
て四田敬止氏編輯す)、和漢名數〔は國語漢文の研究には必要なり、近頃上田博士の校訂にて出版す〕、點例
〔これは漢文の點訓を論ず必要なり〕、慎思錄、初學知要、自撰集、小學備考、近思錄備考、筑前蝦風土記、和名
本草、大和本草、花譜、菜譜、和漢古語〔本書は古亦、熟語、俗語等の研究によし。由來貝原一家は我國語學上
に貢獻したること尠からず、益軒の姪好古に藤草、和爾雅、和漢事始あり、皆有益なり。〕日本釋名(熊原の
書)、和字解(假字遣の書)、心畫軌範(習字の論)、都題音聲略記、岐蘇略記、扶桑紀勝、有馬名所記、日光名所
記、大和廻等。これらは近世名家著述目錄(堤朝風)慶長以來著述目錄(漢學者の部)中根肅治等を見よ。又
有名なる「女大學」は益軒の著にあらざるよしは、明治三十四年七八月の「太陽」に横山逸三氏の論あり。

益軒の著書。

新井白石。

日本の文學者には
自叙傳甚だ尠し。

「折りたく柴の記」

さて漢學者中の俊才を新井白石とす。白石は一六五七年江戸に産る。父は正濟とて、上總久留里侯の臣なり。凡そ、日本の文學者には、自叙傳甚だ尠きが、幸にも白石には自叙傳あるを以て、十分其の經歷を知ることが得。これは、日本の著述家に稀なることなり。此の自叙傳は、白石退隱の後、一七一六年に書きしものにて、「折りたく柴の記」といふ。此の表題は、後鳥羽帝の御製、

おもひ出づる 折り焚く柴の 夕烟

むせぶも嬉し 忘れがたみに

といふに據れり。此の書、もと世に公にせんとにはあらで、我が子孫に遺して、白石父子の貧困なりし様子を知らしめ、子孫をして奮發せしめん爲めなりき。開卷第一に「父にておはせし人」の爲人を精しく面白く記したるが、たま／＼以て、當時の武士の風俗を察すべし。

我れ物の心をわきまへしより此のかたの事は覺えしに、日々の事、唯同じきまにし
て、露たがよ所おはせざりけり。寅の時ばかりには、必ず起き出で給ひて、水をも
て身をあらひすゝきて、みづから髪とりあげ給ひしかば、夜さむき比は、母にてお
はせし人の、湯をまゐらすべきとのたまひしを、めしつかふ者どもわづらはす事ゆ

當時に於ける武士
のおもかけ。

め／＼しかるべからずと制しとめらる。七十に餘りたまひしほどは、母にてお
はせし人の、我も齡のかたぶさぬれば、夜さむに堪ずとて、圍爐裏に火をうづみ
て、それに足さしてふし給ひて、鍮子に湯をいれて、火のほとりにさし置きて、父
の起出で給ふ時に、其の湯をまゐらせられたりき。

二人ともに、佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし人の髪とりあげ果てし
は、衣裳あらためて、佛を禮したまふ事、曉毎に忘りたまはず。父母の忌日には
手づから飯を炊きてすゝめらる。下部等に命ぜられし事あらず。夜いまだ明かる
ほどは、坐してあしたを待ちて夜明はてし出仕したまふ。

Ever since I came to understand the heart of things, my memory is that
the daily routine of his life was always exactly the same. He never failed to
get up an hour before daybreak. He then had a cold bath, and did his hair
himself. In cold weather, the woman who was my mother would propose to
order hot water for him, but this he would not allow, as he wished to avoid
giving the servants trouble. When he was over seventy, and my mother also
was advanced in years, sometimes when the cold was unendurable, a lighted

brazier was brought in, and they lay down to sleep with their feet against it. Beside the fire there was placed a kettle with hot water, which my father drank when he got up. Both of them honoured the Way of Buddha. My father, when he had arranged his hair and adjusted his clothing, never neglected to make obeisance to Buddha. On the anniversaries of his father's and mother's death he and my mother prepared the rice for the offerings. This duty was never entrusted to servants. After he was dressed he waited quietly till dawn, and then went out to his official duty.

我れ物覺えしよりは、髮に黒き筋は少かりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、丈けは短くおはせしかど、すべて骨ふとく、たくましく見えたまひたりき。天性喜怒の色あらはれ見えたまはず、笑ひたまふにも、聲高くわらはせ給ひし事は覺えず。まして人を叱りたまふにも、あらくしきこと宣ひし事は聞かず。ものたまふことも、いかにも詞すくなくして、たち居かるくしからず、驚きたまひ、さわぎ給ひ、事に堪かね給ひしなどいふ事は見し事あらず。た

とへば、灸治などしたまふにも、灸小さきと數すくなきとは、無益の事なりと仰せられて、大きな灸を、其の數すくなからず、五所も七所も、一時に据ゑおせて、さみ給ふけしきも見えたまはず。身靜かなる時には、つねにまはします所を淨く掃ひて、壁上に古書をかきて、花瓶には春秋の花を、すこしくしはをみて、それに對して黙座して日を消したまひ、又自ら繪かき給ふことなどいふもの、たれも、色を設けたることなどいふは好みたまはず。身の病み給ふ時より外は、人を召して使ひたまふこと無へ、回事を手づからのみまじ給ひたまふ。

Since I remember, there were but few black hairs on his head. He had a square-shaped face with a high forehead. His eyes were large, he had a thick growth of beard, and was short of stature. He was, however, a big-boned, powerful man. He was never known to betray anger, nor do I remember that even when he laughed he ever gave way to boisterous mirth. Much less did he ever descend to violent language when he had occasion to reprimand any one. In his conversation he used as few words as possible. His demeanour was grave. I have never seen him startled, hurried, or impatient.